

# 沼田遺跡

## 発掘調査報告書

1984

山形県  
山形県教育委員会

ぬま だ  
沼 田 遺 跡

発 掘 調 査 報 告 書

昭和59年3月

山 形 県

山形県教育委員会

## 序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和58年度に実施した飽海郡八幡町沼田遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

庄内地方の中でも、酒田市東部から八幡町にかけての水田地帯には、国指定史跡として古代出羽国の国府に擬定されている「城輪柵跡」や、古代の建築部材を埋設している「堂の前遺跡」など、平安時代を主とした出羽国の歴史を理解するうえで、まことに貴重な地域であります。城輪柵跡の東に位置する大島田地区も古くから土器類や柱根が出土する地として知られ、国府に関連する遺跡が存在するとの推測もなされてきました。

このたび、沼田遺跡が本年度施行予定の農村基盤総合整備パイロット事業（庄内地区）区域内に入ることになったので、関係諸機関と協議の結果、事前に緊急発掘調査を実施して埋蔵文化財の記録にあたることになりました。

近年、埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは増加の傾向にあります。県民生活の向上を目的とする諸開発事業と、県民、ひいては国民の財産である埋蔵文化財保護との調整は県政の重要な課題であり、県教育委員会においても今後鋭意努力を統けてまいる所存であります。

調査の結果、平安時代の人々が生活していた掘立柱建物跡や、人々の喉を潤した井戸跡、さらに本県では最初の発見となりました漆紙文書片の出土など、古代人の生活風景を呼び起こすことができたと申せましょう。本書が埋蔵文化財に対する御理解もかねて、皆さまの一助となれば幸いと存じます。

最後に、調査にあたって多くの御協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に、心から感謝を申し上げます。

昭和59年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹正治

## 例　　言

- 1 本報告書は山形県教育委員会が昭和58年度に山形県農林水産部の委託を受け、山形県埋蔵文化財緊急調査団が実施した農村基盤総合整備パイロット事業（庄内地区）に関連する八幡町沼田遺跡（県遺跡番号2265）の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は山形県教育委員会が主体となり、山形県庄内支庁経済部最上川右岸土地改良事務所、八幡町教育委員会並びに日向川土地改良区などの関係諸機関の協力を得て実施した。調査期間は、昭和58年5月9日から同年8月12日（延70日間）までである。
- 3 調査体制は下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 佐藤庄一（主任調査員）〔庄内教育事務所埋蔵文化財調査係長〕

野尻 侃（現場主任）〔庄内教育事務所技師〕

安部 実（調査員）〔庄内教育事務所技師〕

事務局所長 池田泰正（庄内教育事務所長）

所長補佐（総括担当）藤塚真一（庄内教育事務所次長）（昭和58年4月～同10月）

山田 登（庄内教育事務所次長）（昭和58年11月～昭和59年3月）

所長補佐（庶務担当）金内光彦（庄内教育事務所総務課長）

所長補佐（業務担当）成田恒夫（庄内教育事務所社会教育課長）

事務局員 藤原正俊（庄内教育事務所総務主査）

- 4 挿図縮尺は、各遺構については%・%・%，遺物については%・%を基本とし、各挿図毎にスケールを示した。遺物図版の縮尺は%を基本とし、異なるものは数値を示した。出土遺物観察表中計測値で（ ）内の数値は図上復元による。註及び参考文献は、各節末にまとめた。実測図中、断面を黒塗りしてあるものは須恵器、白ヌキは土師器・赤焼土器を示す。

- 5 本書の作成は、執筆は佐藤庄一、野尻 侃・写真撮影・編集は野尻 侃が担当し、全体については佐藤庄一が総括した。挿図・表・図版作成にあたっては、庄司 功、吉村加代子、小池敏美、坪池悦子、佐藤玲子、菅原郁子、小野真由美、池田玲伊子、鈴木繁子がこれを補助した。

また本書を作成するにあたり、川崎利夫・佐藤楨宏両氏より指導・助言をいただいた。記して感謝申し上げる。

# 目 次

## 序

### 例 言

#### I 遺跡の概観

1 遺跡の地理的環境.....	1
2 遺跡の歴史的環境.....	3
3 調査に至る経過.....	4
4 調査の経過と方法.....	4
5 遺跡の層序.....	7

#### II 遺 構

1 遺構の分布.....	9
2 建物跡・柱列.....	10
3 大溝・矢板列.....	25
4 井戸跡.....	27
5 土壙.....	29
6 溝状遺構.....	31
7 性格不明の遺構.....	32

#### III 遺 物

1 建物跡出土の遺物.....	35
2 大溝・矢板列出土の遺物.....	41
3 井戸跡出土の遺物.....	42
4 土壙出土の遺物.....	44
5 溝状遺構出土の遺物.....	56
6 包含層出土の墨書・刻印土器.....	71
7 その他の遺物.....	78

#### IV まとめ

1 遺構の時期と変遷.....	84
2 沼田遺跡周辺の官衙遺跡.....	85

## 挿 図 目 次

第1図	沼田遺跡と周辺の遺跡（1：25000）	2
第2図	グリッド配置図	5
第3図	遺跡の層序	8
第4図	A区遺構配置図	11
第5図	S B 1 建物跡	12
第6図	S B 2 建物跡・S A 4 柱列	13
第7図	S B 3 建物跡	15
第8図	G区遺構配置図	17
第9図	S B 5 建物跡	19
第10図	E区遺構配置図	21
第11図	S B 6 建物跡	23
第12図	S B 7 建物跡	25
第13図	S E 10 井戸跡	28
第14図	土壤	30
第15図	A区溝状遺構	31
第16図	S X59・60遺構・S D70溝状遺構	33
第17図	建物跡出土遺物（1）	36
第18図	建物跡出土遺物（2）	39
第19図	S A41矢板列出土遺物	41
第20図	井戸跡出土遺物	43
第21図	土壤出土遺物（1）	45
第22図	土壤出土遺物（2）	46
第23図	土壤出土遺物（3）	48
第24図	土壤出土遺物（4）	49
第25図	土壤出土遺物（5）	53
第26図	S X60遺構出土遺物	55
第27図	溝状遺構出土遺物（1）	57
第28図	溝状遺構出土遺物（2）	58
第29図	溝状遺構出土遺物（3）	59

第30図	溝状遺構出土遺物（4）	62
第31図	溝状遺構出土遺物（5）	63
第32図	溝状遺構出土遺物（6）	65
第33図	溝状遺構出土遺物（7）	66
第34図	溝状遺構出土遺物（8）	68
第35図	溝状遺構出土遺物（9）	69
第36図	包含層出土墨書き土器（1）	72
第37図	包含層出土墨書き土器（2）	73
第38図	包含層出土墨書き土器（3）	74
第39図	包含層出土墨書き土器（4）	76
第40図	その他の遺物（1）	79
第41図	その他の遺物（2）	80
第42図	刻印・墨書き土器	81
第43図	木製品	83

付図 第44図 沼田遺跡周辺の平安時代遺跡

## 付表目次

表-1	建物跡出土遺物観察表	37
表-2	矢板列出土遺物観察表	41
表-3	井戸跡出土遺物観察表	42
表-4	土壙出土遺物観察表（1）	47
表-5	土壙出土遺物観察表（2）	51
表-6	S X60遺構出土遺物観察表	55
表-7	溝状遺構出土遺物観察表（1）	60
表-8	溝状遺構出土遺物観察表（2）	64
表-9	溝状遺構出土遺物観察表（3）	67
表-10	溝状遺構出土遺物観察表（4）	70
表-11	墨書き土器観察表（1）	75
表-12	墨書き土器観察表（2） その他の遺物観察表（1）	77
表-13	その他の遺物観察表（2）	78
表-14	その他の遺物観察表（3）	82

## 図版目次

- |      |   |   |        |        |
|------|---|---|--------|--------|
| 図版 1 | 遺跡遠景  | 遺跡遠景                                    |        |        |
| 図版 2 | 遺跡近景  | 遺跡近景                                    |        |        |
| 図版 3 | A'区発掘風景   | E 区発掘風景                                 |        |        |
| 図版 4 | A 区土層図  | A 区土層図                                  | G 区土層図 | A'区土層図 |
| 図版 5 | A 区全景   | A 区北半近景                                 |        |        |
| 図版 6 | S B 1 全景  | S B 2 全景                                |        |        |
| 図版 7 | S B 3 全景  | E B 120柱穴 E B 128柱穴 E B 190柱穴 E B 191柱穴 |        |        |
| 図版 8 | S E 10井戸跡   | S E 10掘り下げ状況                            |        |        |
| 図版 9 | S E 10井戸跡土層断面   | S E 10掘り下げ状況                            |        |        |
| 図版10 | S K74土壤   | S K152土壤                                |        |        |
| 図版11 | S K77土壤   | S K39土壤                                 |        |        |
| 図版12 | A 区北半溝状遺構（北から）  | A 区南半溝状遺構（東から）                          |        |        |
| 図版13 | A'区矢板列検出状況  | A'区遺構完掘状況                               |        |        |
| 図版14 | S D70溝状遺構矢板列  | S X59遺構木製歯出土状況                          |        |        |
| 図版15 | G 区遺構検出状況   | G 区遺構検出状況                               |        |        |
| 図版16 | G 区全景   | 漆紙出土状況                                  |        |        |
| 図版17 | S B 5 全景 S B 5 西半部                                      | E B248                                  | E B251 | E B287 |
| 図版18 | E B247 E B248 E B251 E B287 E B304 E B303 E B365 E B366 |   |        |        |
| 図版19 | S K262全景  | S K262土器出土状況                            |        |        |
| 図版20 | S A41検出状況   | S A41追跡区                                |        |        |
| 図版21 | S B 6 全景  | E B336                                  | E B354 |        |
| 図版22 | S D229遺物出土状況  | S D229遺物出土状況                            |        |        |
| 図版23 | S D331遺物出土状況  | 鉄斧出土状況                                  |        |        |
| 図版24 | S K230土壤検出状況  | S K230土壤双耳壺出土状況                         |        |        |
| 図版25 | C 区 S B 7 建物跡   | C 区 S K221土壤土器出土状況                      |        |        |
| 図版26 | B 区トレンチ全景   | F 区トレンチ全景                               |        |        |
| 図版27 | S D62～64溝状遺構  | S G61近景                                 |        |        |
| 図版28 | S A41近景   | S D70遺物出土状況                             |        |        |
| 図版29 | 漆紙付着土器（原寸大）   |   |        |        |
| 図版30 | 漆紙文書赤外線テレビ写真 同返転文字「有」                                   | (東北歴史資料館撮影)                             |        |        |

- 図版31 建物跡出土遺物（1）
- 図版32 建物跡出土遺物（2）
- 図版33 建物跡出土遺物（3） 井戸跡出土遺物（1）
- 図版34 井戸跡出土遺物（2）曲物
- 図版35 土壌出土遺物（1）
- 図版36 土壌出土遺物（2）
- 図版37 土壌出土遺物（3）
- 図版38 土壌出土遺物（4）
- 図版39 土壌出土遺物（5）
- 図版40 S X60遺構出土遺物
- 図版41 溝状遺構出土遺物（1）
- 図版42 溝状遺構出土遺物（2）
- 図版43 溝状遺構出土遺物（3）
- 図版44 溝状遺構出土遺物（4）
- 図版45 溝状遺構出土遺物（5）
- 図版46 溝状遺構出土遺物（6）
- 図版47 溝状遺構出土遺物（7）
- 図版48 溝状遺構出土遺物（8）
- 図版49 溝状遺構出土遺物（9）
- 図版50 溝状遺構出土遺物（10）
- 図版51 溝状遺構出土遺物（11） 包含層出土墨書き器（1）
- 図版52 包含層出土墨書き器（2）
- 図版53 包含層出土墨書き器（3）
- 図版54 包含層出土墨書き器（4）
- 図版55 その他の遺物（1）
- 図版56 その他の遺物（2）
- 図版57 その他の遺物（3）
- 図版58 刻印・墨書き器
- 図版59 木製品

# I 遺跡の概観

## 1 遺跡の地理的環境（図版1）

遙く吾妻山系に源を発する最上川は、山形県の母なる川として内陸地方を南から北へ屈曲しながら貢流し、新庄市本合海で西に向きを変え、最上峡を西下し庄内平野へ注ぎ込む。最上峡谷を流れ出た最上川は、東方に位置する出羽丘陵に沿ながら北流し、松嶺付近で大きく西方に蛇行しながら緩やかに曲流し、酒田に至り日本海へ注ぐ。

飽海地方とも呼ばれる庄内平野の北半部の地形は、大別して東側の出羽丘陵地域と西側の庄内北部平野地域に区分される。平野地域はさらに東から、(1)庄内北部河間低地、(2)酒田北部三角洲、(3)庄内北部砂丘の3つに細分される。

庄内北部河間低地には、自然堤防・後背湿地・狭義の河間低地の三者を含んでいる。このうち自然堤防は日向川・荒瀬川沿いにみられるほか、安田・漆曾根・布目などにあり、観音寺から南西に放射状に分布する。ただし、これらの自然堤防は高度が低く、不明瞭なものが多い。後背湿地の明瞭なものは、生石の西方や上村付近などにみられる（註1）。

酒田北部三角洲は、海拔高度5～6m以下であり、いわゆる繩文海進期に海進を蒙ったと推定される。河間低地とした上位面との相違は、高度がより低いことのほか、自然堤防状の微高地がほとんどみられないことがあげられる。西縁では日向川のかつての流路があり、酒田北港付近で砂丘地を横断している。

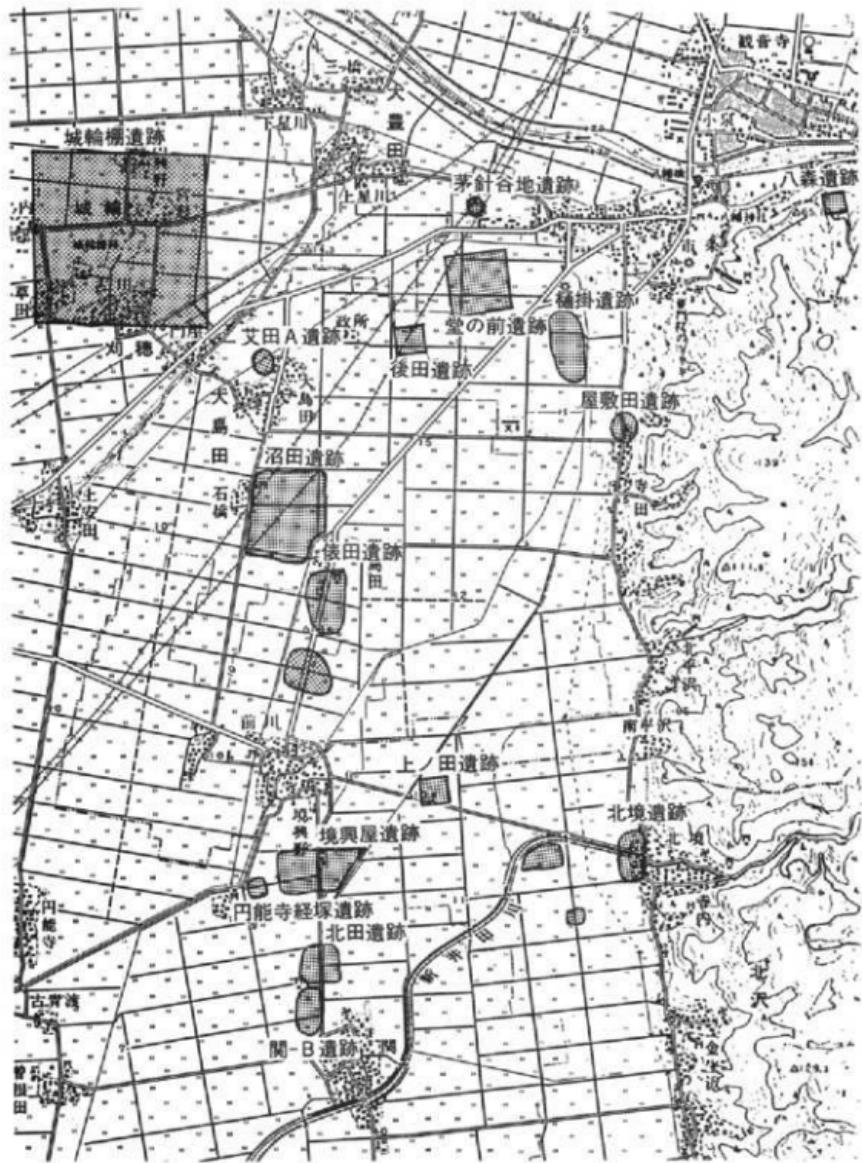
庄内北部砂丘は、最上川以北の通称河北砂丘とよばれるもので、日本海海岸に沿って南北走する。砂丘は古砂丘と新砂丘とが重なっており、砂丘列は海岸線に平行する東西2列の砂丘および海岸に人为的に作られた砂堆の列となっている。

観音寺の北方に広がる日向川扇状地は庄内平野北半部中唯一の明瞭な扇状地である。半径約2kmの小さな扇状地で、傾斜も1000分の15程度である。日向川は上流性の埋積谷を有し、それが庄内平野への出口で扇状地に移行する。

庄内北部河間低地に形成される自然堤防上に立地する遺跡は酒田市城輪柵跡と同大槻新田遺跡の2例だけである。酒田市北部三角洲や後背湿地に平安時代の遺跡がほとんどみられないことは、当時も湿地等で遺跡の立地に不適であったことを示すものと思われる。

沼田遺跡は飽海郡八幡町大字大島田字沼田に所在する。酒田市街より北東約8km、岡島田部落と石橋部落にはさまれた水田中にあり、標高は約11.5mを測る。遺跡の北方約2kmを日向川が西流しており、遺跡を覆う表層の地質は粗砂やシルトからなる沖積層で、かなりグライ土壤化が進んでいる。

註1 山形県「土地分類基本調査 酒田 5万分の1」 1978年



羽後觀音寺

0 1,000 2,000

第1図 沼田遺跡と周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)

## 2 遺跡の歴史的環境（第1図）

庄内平野を二分する最上川の北半、所謂「飽海地方」をほぼ東西に西流する日向川、新井田川、および荒瀬川等々の河川が形成する自然堤防や河間低地上には、平安時代から安土・桃山時代以降とくに平安時代の集落跡や官衙遺跡が数多く分布する。この標高10m前後の河間低地上には古代より現代に至るまでこの肥沃な土地を求めて開発が重ねられ、日本有数の穀倉地帯となっている。現在は見渡す限りの水田の中に特有の集散集落がみられるという景観を呈する。近年、この地域にも3反歩1枚のほ場整備事業が実施されており、山形県教育委員会では県農林水産部や地元市町村などと協議を重ね、設計その他で止むを得ない遺跡については、昭和48年度から緊急発掘調査を実施してきた。最上川以北地域でのほ場整備事業に関連する遺跡の発掘調査件数は、昭和58年度末現在で21遺跡にのぼる。

21遺跡の中で奈良時代以前に遡るもののは、昭和57年度に実施した関B遺跡第2次調査で発見された古墳時代前期4～5世紀の土器がある（註1）。また最近の調査で、俵田遺跡の最下層中から奈良時代末に相当される土器片とともに、矢板列や柱根も検出されており（註2），これまで生活面として把えていた地盤をさらに掘り下げることも含めて再検討の必要がある。

平安時代以降の遺跡で最も重要かつ庄内地方の平安時代を考察する基本となる遺跡が城輪柵跡である。昭和6年以來、現在までに34次にわたる調査の結果一辺約720mに及ぶ角材列によって囲まれた外郭の中央部に一辺120mの築地によって囲まれた内郭があり、正殿、東西両脇殿、後殿、後殿付属両建物などで構成され、地方の官衙としての性格を物語っている。城輪柵跡はその出土遺物や遺構から9世紀前半から12世紀にわたる出羽国府として位置付けされている（註3）。八森遺跡は城輪柵跡の真東3kmの丘陵上にある。90mを一辺とした正方形でとり囲む溝の内側には、正殿、後殿風の建物を配し、官衙としての様相をもち、正殿の前面には東西の脇殿を築く余裕もある。日本三大実録仁和三年条による「旧府近側高敞之地」として遷造された出羽国府とも推測されている（註4）。堂の前遺跡は城輪柵跡より東方約1kmの水田中に所在し、12m四方の基壇の下には、梁・長押・肘木・斗等をぎっしり敷きつめ、低地帯における基礎工事の筏地業を行なっている。重層塔が建立されたものと考えられ、古代出羽国分寺跡の可能性を有する（註5）。

その他城輪柵跡の周辺には公的な官衙遺構をもつ後田遺跡や上ノ田遺跡、村落遺跡として庭田遺跡、豊原遺跡、茅針谷地遺跡、境興野遺跡、北田遺跡、関B遺跡などが点在し、強力な国家規制の地割に基づいて配置された計画村落として存在するものと推測されている（註6）。

註1 野尻 侃他 「関B遺跡第2次調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第68集 1983年

註2 安部 実他 「俵田遺跡第2次調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第77集 1984年

註3 小野 邑 「城輪柵跡の性格論をめぐって」西田市教育研究所報第30号 1978年

註4 佐藤 横宏 「仁和三年条の出羽国府移転に関する覚書」庄内考古学第16号 1979年

註5 尾形 興典 「堂の前遺跡、昭和53・54年度調査略報」山形県埋蔵文化財調査報告書第30集 1980年

註6 佐藤 庄一 「城輪柵跡周辺の村落」第10回古代東北城柵官衙遺跡検討会シンポジウム発表要旨 1984年

### 3 調査に至る経過

庄内平野の北半部、通称飽海地方とも呼ばれる酒田市東部から八幡町にかけての水田地帯には、国指定史跡の「城輪柵跡」、「堂の前遺跡」をはじめ平安時代の遺跡が数多く分布する。沼田遺跡も古くから須恵器や柱根などが出土することで知られており、昭和38年刊行の『山形県遺跡地名表』(註1)にも平安時代の集落跡として記載されている。

この地域に、昭和40年代の後半から農村基盤総合整備パイロット事業(庄内地区)が計画されることになり、山形県教育委員会では数年来、県農林水産部や当該市町村教育委員会など関係諸機関と協議を行ってきている。沼田遺跡周辺は昭和58年度から事業が予定されることになったため、県教育委員会では昭和57年10月5日に現地確認調査、同年10月18・19日に試掘調査を実施した。調査の結果、東西330m、南北280mにわたって遺跡が広がることが確認され、掘立柱建物跡の柱穴や溝状遺構および平安時代に属する漆紙文書などが検出された(註2)。

これにもとづき再度関係諸機関と協議をし、最終的に昭和58年度に緊急発掘調査を行うことになったものである。調査は山形県教育委員会が主体となり、現地の調査は山形県教育庁庄内教育事務所が担当した。調査期間は、昭和58年5月9日から同年8月12日までの実質70日間である。

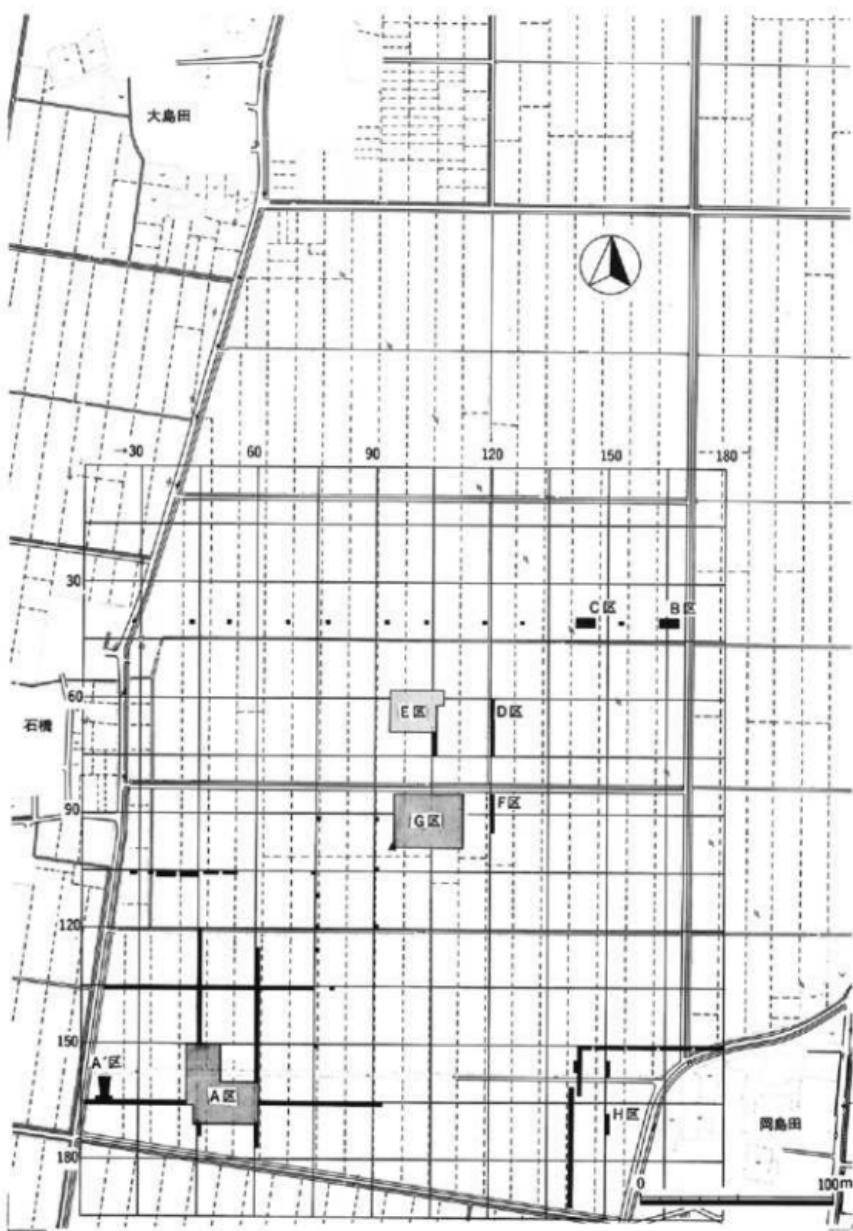
註1 山形県教育委員会 「山形県遺跡地名表」 1963年

註2 山形県教育委員会 「分布調査報告書(10)」 山形県埋蔵文化財調査報告書第74集 1983年

### 4 調査の経過と方法(第2図、図版2・3)

調査は初めに東西330m、南北280mの対象区域に基準杭を打ったことから行った。発掘区の地区割りは、2m四方を1単位としてX軸(東西軸)は西から東に、Y軸(南北軸)は北から南に第4象限で座標をとった。各グリッドの名称はX軸の数字を先に、Y軸の数字を後に、例えば100-90グリッド(G)というように呼ぶ。南北基準線の方位は真北に合せている。

つぎに2m幅のトレンチを20本設定して、遺物や遺構の分布範囲を確認する作業を実施した。なおこれと同時に2m四方の坪掘り調査も行っている。坪掘りの個所は分布調査も含め68ヶ所に及んでいる。この結果、調査対象地区のほぼ中央部と南西部の2地区に遺物や遺構の集中する場所が認められたため、この地区を手掘りに重機械使用による表土剥離を加えて拡張を行った。各地区的名称は、便宜的に精査順序にしたがってA・B……G・H区と呼ぶことにしている。これによると調査対象地区的南西部はA区およびA'区、同中央部はD~F区にあたることになる。



これと前後して、調査対象地区の北寄りに旧農道の撤去に係る新しい農道を緊急に通す必要が生じてきたため、6月27日から7月12日まで新設農道計画部分に2m四方の坪掘りを11ヶ所行ない、さらに遺構や遺物の検出された北東部に5×10mのトレンチを2本設定して精査を行った。これを東からおののB区・C区と呼ぶ。

また、調査対象地区の南東隅に工事の関係上排水路と仮設道路を緊急に作る必要が生じてきたため、5月24日から6月3日までこの部分に2m幅のトレンチを5本設定して精査を行った。これをH区と呼ぶことにする。

A区は、42~58-150~170Gを中心とするもので、精査面積は1,048m<sup>2</sup>である。調査の前半5月25日から精査を開始し、遺構の観察・記録や遺物の取り上げなどにS E 10井戸跡の調査も含めて7月12日まで要している。本区には煙の畝と思われる幅30cm前後の溝状遺構が密に存在し、掘立柱建物跡3棟や井戸跡、土壌なども検出された。A区の西方42mのトレンチ内で矢板列を伴う南北方向の溝状遺構が検出されたため、これを追求すべく北側を約70m<sup>2</sup>拡張して精査を行った。これをA'区と呼ぶ。これには6月30日から7月13日まで延べ10日間を要している。

G区は、95~112-83~96Gを中心とするもので、最終的な精査面積は1,008m<sup>2</sup>に達する。57年10月の分布調査の際に漆紙文書を出土した地区である。調査の中盤6月29日から精査を開始し、遺構の観察・記録や遺物の取り上げなどに調査の終了時まで連続してかかっている。本区には長さ35m以上におよぶ大溝や矢板列、それに掘立柱建物跡1棟などが検出されている。

E区は、G区の北方32m、94~107-58~68Gを中心とするもので、精査面積は560m<sup>2</sup>である。当初2×30mのトレンチ調査によって土壌や溝状遺構が検出されており、その西側をさらに拡張したものである。調査の終盤7月27日から精査を開始し、遺構の観察・記録や遺物の取り上げなどに調査の終了時まで連続してかかっている。本区から溝状遺構を伴う掘立柱建物跡が1棟検出されているが、時間の関係からその周辺については十分な精査ができなかった。

D区とF区は、2m×20~30mの南北に長いトレンチで、その西側にあたるE区とG区のトレンチと同時に調査期間の中盤に精査を行った地区である。それぞれG区ないしE区と関連する溝状遺構が数条検出されている。

B区とC区のうち、C区からは掘立柱建物跡1棟や土壌などが検出されている。B区からは遺構の検出は認められなかった。

調査期間中、7月19日には地元の一条小学校の児童75名を対象にした調査説明会、8月9日には一般の方々約30名を対象にした調査説明会を各々現地で実施している。

## 5 遺跡の層序（第3図、図版4）

本遺跡は、庄内北部河間低地の中央やや西寄りに立地する。遺跡の北方約2.2kmを荒瀬川、南方約2.6kmを新井田川が各々東から西に流れている。荒瀬川は遺跡の北北西約3.2kmで日向川と合流し、日本海に注ぐ。遺跡の東方は、約1.4kmで出羽丘陵の一部小平丘陵に至る。小平丘陵は、高度が200m以下であり、火山泥流にも覆われず、傾斜もかなり緩やかである。

遺跡周辺には用排水路などを除いて顕著な小河川は認められないが、八幡町観音寺から南西に延びる酒田市安田・同漆曾根にかけて自然堤防が不明瞭ながら認められることにより、以前は南西に放射状に分布する数ヶ所の旧河川が存在しただろうことが推察される。

遺跡周辺を覆う表層の地質は、粗砂・シルトおよび粘土からなる沖積層で、かなりグライ化が進んでいる。これと関連し地下水位も高く、深井戸やさく井資料の分析からみて、地表下約1.5mに静水位線が認められる。

今回の調査対象地区の標高は11～12mで、遺構の検出地域は現在、周囲より30cm程高い微高地になっているが、巨視的には東方の出羽丘陵や旧河川の沖積作用に伴って、北東から南西にかけて緩やかな傾斜を示す。

本遺跡の基本的な層序は、各精査区ともほぼ共通する。第3図には調査対象地区的北西隅にあたるH区、南西隅にあたるA区、北東隅にあたるB・C区の土層図を載せている。つぎに基本層序について説明をする。

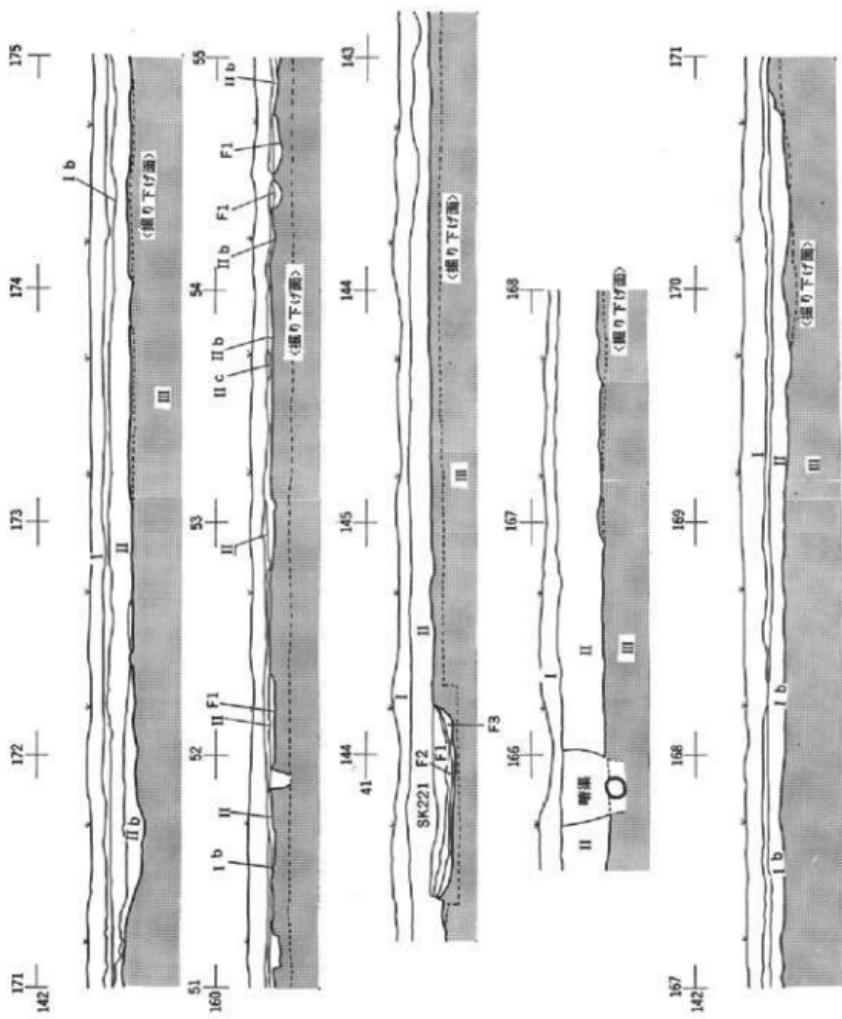
第I層 茶褐色耕作土 水田の耕作土で砂分を含み、10～20cmの厚さでほぼ均一に堆積する。

第Ib層 暗灰褐色粘質土 第I層と第II層との境界にある水田の滞水層である。厚さ5cm前後で、H区のように明瞭な地区とそうでない地区とがある。

第II層 暗褐色粘質土 炭化粒子を含み、硬くしまっている。平安時代の遺物包含層であり、厚さはA・G区では10cm前後と薄く、A'・C・E・H区では20cm前後、B区では約40cmと深くなる。

第IIb層 灰黒色砂質土 炭化粒子を少量含み、やや粘性がある。H区の窪地にあたる部分に認められる。遺物は微量含むだけである。

第III層 青灰色粘質土 色調は全体的に青灰色を呈し、部分的に酸化作用により濁黄褐色を示したり、粗砂を含む。遺物をまったく含まず、各遺構の壁や底面をなす。A区やG区のように遺構が密集して検出された地区ほど、地表面からの深さが浅い。



## II 遺構

### 1 遺構の分布

沼田遺跡の遺構や遺物が分布する範囲は、坪掘り調査の内容も加味すると、東西150m、南北300mの総面積約45,000m<sup>2</sup>という広大なものになる。第2図のグリッド配置図でみれば、C区からA区に至る北東から南西にかけて斜方向に遺構が分布する。

今回の発掘調査で検出された遺構には、掘立柱建物跡6棟、掘立柱列1条、板列2条、井戸跡1基、土壙47基、溝状遺構、ピットなどがある。各遺構の検出状況などから、沼田遺跡における遺構は、大きく4つの群に概括することができる。

第一は、A区北半42~56-150~164GからA'区にかけて分布する平安時代中葉の掘立柱建物跡を主とする遺構群である。A区とA'区の間にはかなりの未調査分が残っているが、坪掘りやトレンチ調査の内容からもこの地域に掘立柱建物跡を主とする遺構が存在する可能性が高い。またA'区からは、矢板列を伴う南北方向の溝状遺構が検出されており、この西側に遺構や遺物がほとんど認められないことを考え合わせると、本溝状遺構は遺跡を区画する何らかの施設とも推測される。なおA区南半42~58-150~170Gからは、真北に対し約23度西に傾く細い溝状遺構が密集して検出されており、この南側は畠地として占有された場所と考えられる。

第二は、G区を中心に分布する平安時代中葉の掘立柱建物跡を主とする遺構群である。雨落溝を巡らした南北3間×東西10間の東西棟のSB5建物跡がG区の南東部に検出され、これを囲むようにSD42大溝とSA41板列が北東から南北方向に走る。SA41板列は、G区の南西隅で南東方向に向きを換えていることから、SB5建物跡やその南東部に予測される遺構群を囲繞する施設とも考えられる。

第三は、E区を中心に分布する平安時代前葉の掘立柱建物跡を主とする遺構群である。雨落溝を東側と西側に巡らした南北4間×東西10間の東西棟のSB6建物跡がE区の東半部に検出されている。SB6建物跡は、雨落溝と考えられるSD269溝状遺構がさらに南側に延び、トレンチの先端でやや西側に向きを換えているところから、南側にさらに2間分広がる可能性も考えられる。

第四はH区北西隅141~152-150~173Gを中心に分布する平安時代中葉の溝状遺構や畦畔状遺構を主とする遺構群である。沼田遺跡の第一から第三までの遺構群とは、占地や遺構のあり方を異にしており、むしろ八幡町岡島田部落の南側に立地する倭田遺跡の遺構群に関連するものかもしれない。

## 2 建物跡・柱列

今回の調査で検出された建物跡、柱列には掘立柱建物跡6棟、掘立柱列1ヶ所である。各精査区毎の内訳は、A区が掘立柱建物跡3棟(SB1~3)、掘立柱1列(SA4)E区が掘立柱建物跡1棟(SB6)、G区が掘立柱建物跡1棟(SB5)、矢板列1列(SA41)C区が掘立柱建物跡1棟(SB7)である。以下建物跡から順に記述するが、G区の矢板列については、別に項をおこし記述する。

### SB1建物跡(第5図、図版6)

A区中央部47~50-157~161グリッド第III層上面で確認された桁行2間、梁行2間の東側に1間の庇をもつ東西棟である。建物跡南東部が未調査区域に入るため全容は検出されなかった。しかし東側に底部をもつことからこれ以上大きな規模の建物にはなりえないと考えられる。

柱間距離は、北面桁行EB18・24・10柱穴間は270cm(9尺)等間を測る。南面桁行EB19・20柱穴間も同様であるが、南東部が未調査区に入るためその柱穴は検出出来なかつた。西面梁行EB18・21・19柱穴間は270cm(9尺)等間である。東面梁行部には柱間距離が150cmを測る底部が作られ、EB117柱穴が存在する。

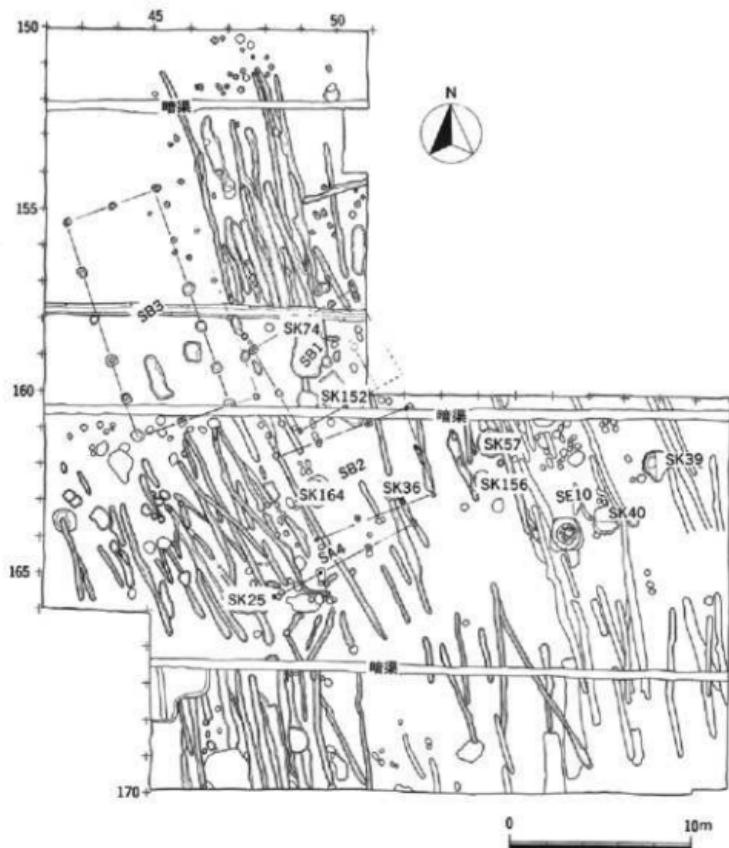
身舎の規模は梁行長540cm(18尺)、桁行長は底部も含めて690cm(23尺)を測る。

柱穴の掘り方は径約15~28cm、深さ10~20cm前後の円形ないし橢円形を呈し、径約12cmの円柱を使用していたことが判る。柱は抜きとられたり、朽ちて残っているものはないが、直線的、規則的に並んでいる。柱穴掘り方の埋土は、炭化物粒子を多く含む暗褐色粘質土と濁青灰色砂質土を交互に踏みかためられている。本建物跡の主軸方向は、真北を基準としてN-30°-Wである。

他遺構との切り合いでは、北面桁行のEB24柱穴がSD147溝状遺構の底面で確認されていることや、庇部北東隅EB117柱穴も同様にSD104溝状遺構の底面で確認されており、SD104・147溝状遺構よりは古い時期のものと考えられる。また南面桁行のEB20柱穴はSK152土壤の底面で確認されている。EB20はSK152土壤の精査中に認められ、柱穴の掘り込みは覆土中から認められなかったことにより、一時期古いものと考えられる。

柱穴の覆土中からは、内面が炭素吸着による黒色化処理された内黒土師器1片(EB117)、須恵器8片(EB21・24)、赤焼土器38片(EB20・21・24)の計54片出土している。しかし各土器片は細片で磨滅が著しく、測定可能な土器片は少なかった。

本建物跡の時期は、内黒土師器等が出土していることから平安時代10世紀後葉頃に比定される。

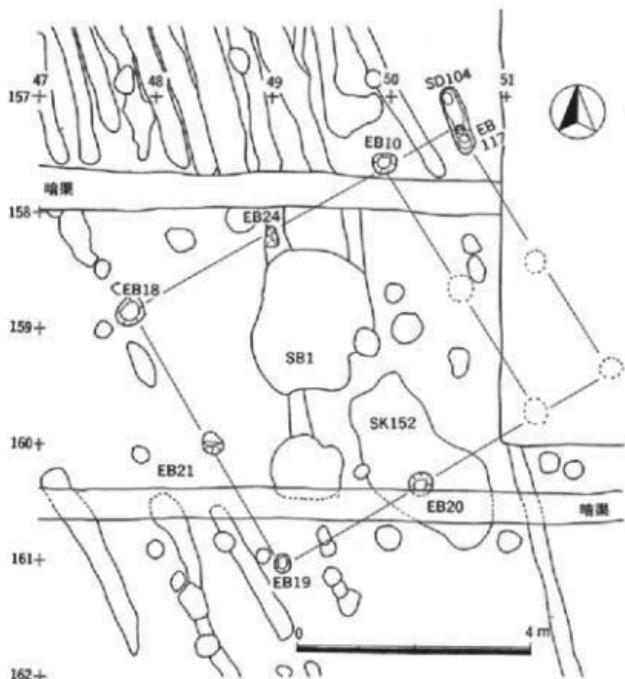


第4図 A区遺構配置図

#### S B 2 建物跡（第6図、図版6）

A区中央部48～52・160～163グリッド第三層上面で確認された東西棟の掘立柱建物跡である。S B 1建物跡と北側柱列と近接している。身舎は梁行2間、桁行3間である。

柱間距離は、梁行240cm（8尺）等間、北面桁行E B 11・12・13・14、南面桁行E B 15・22・16・23で西から240cm、300cm、210cmを測る。身舎を構成する柱のうち、南面桁行のE

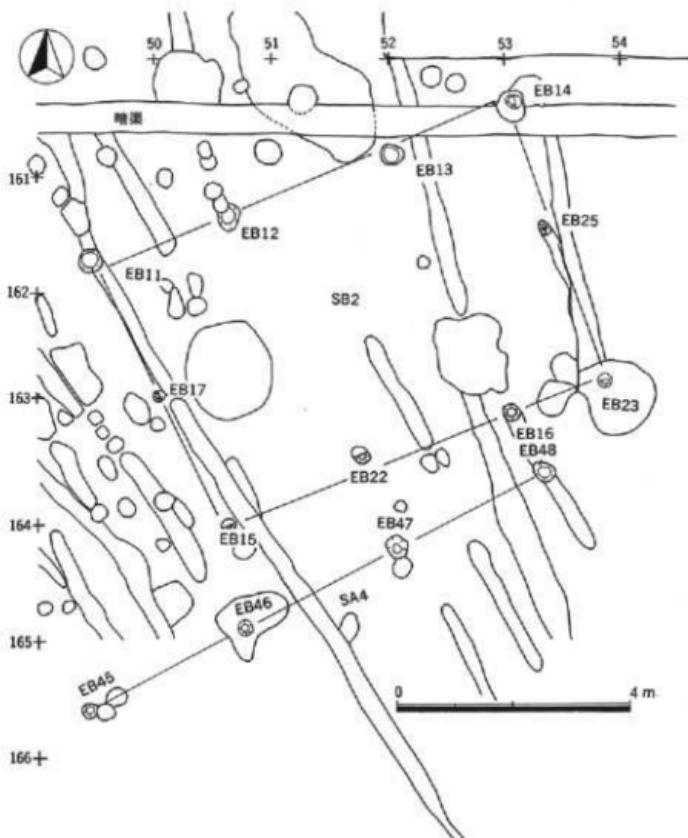


第5図 SB1 建物跡

B23柱穴は、やや内側に入るため、桁間の支え柱として用いられた可能性がある。身舎の規模は、梁行長480cm(16尺)、桁行750cm(25尺)を測る。柱穴の掘り方は径18~40cm、深さ10~25cm前後の円形ないし梢円形を呈し、径約15~30cmの円柱を使用していたことが判る。柱は抜きとられたり、朽ちて残っているものはないが、E B23柱穴をのぞけば比較的、直線に規則的に並んでいる。柱穴掘り方の埋土は濁黄褐色ないし茶褐色粘質微砂で、柱が倒れないよう固くふみかためられている。柱アクリ部の土質は炭化粒子を多く含む黒褐色粘質土である。本建物跡の主軸方向は、真北を基準としてN-25°30'-Wである。

他遺構との切り合いで、北面桁行北西隅E B11柱穴はS D125溝状遺構と、同北東隅E B14柱穴はS K81土壤と、南面桁行E B16柱穴は、S D206溝状遺構と、南東隅E B23柱穴はS K49土壤とそれぞれ重複している。先後関係は、E B11・14・23柱穴がそれぞれの遺構を切って掘り込まれ、E B16柱穴は、S D206溝状遺構の底面で確認されたものであることからやや古いものと考えられる。

柱穴の覆土中からは、須恵器10片（EB14・16・23）、赤焼土器16片（EB14・17・23）の出土があった。いずれも細片で、磨滅が著しい。その時期は、SB1建物跡と同様な主軸方向を向くことなどや、須恵器などから平安時代10世紀後葉として想定出来る。



第6図 SB2建物跡・SA4柱列

### S B 3 建物跡（第7図、図版7）

A区中央やや北西寄り、42~47-155~161グリッド、第III層中位で確認された南北棟の掘立柱建物跡である。SB 1建物と東側柱列とやや並行し接している。身舎は梁行2間、桁行5間の細長い建物跡である。

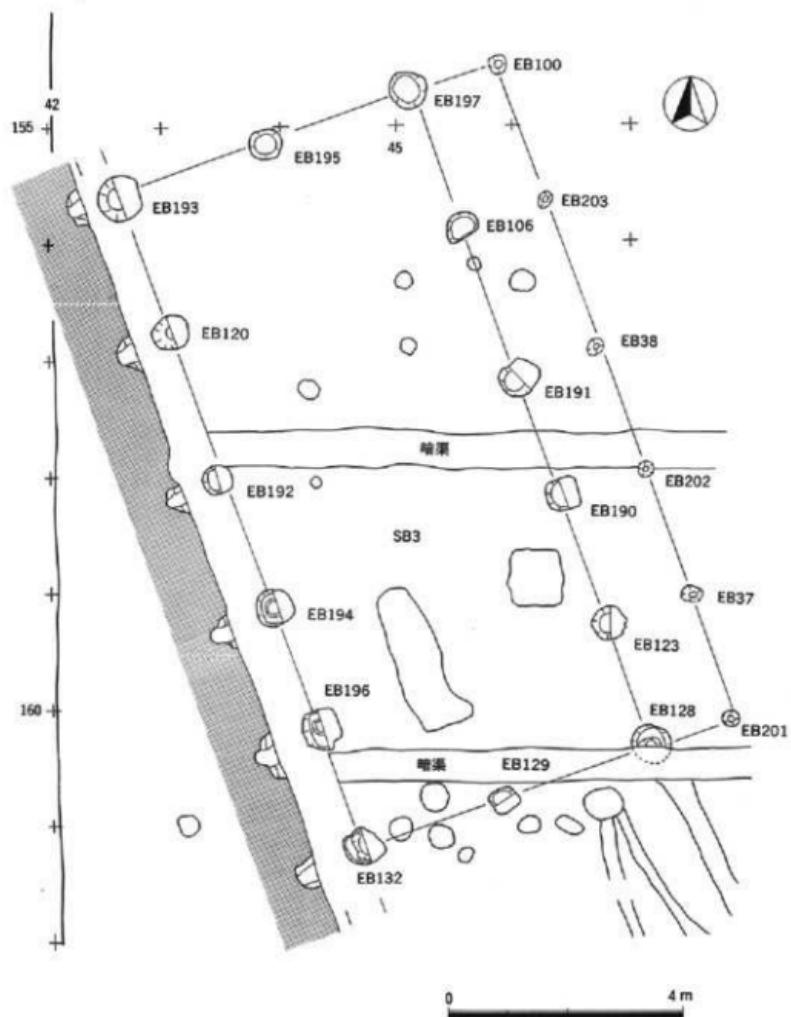
柱間距離は、北面梁行E B193・195・197柱穴が240cm（8尺）、270cm（9尺）となり、西面桁行E B193・120・192・194・196・132柱穴は北から240cm（8尺）・240cm（8尺）・210cm（7尺）・210cm（7尺）・210cm（7尺）を測る。身舎を構成する柱で、北面と南面梁行の長さがちがい、東側がやや大きくなる。また、桁行では、身舎北側が9尺等間の2間と、南側が7尺等間となるため、E B192柱穴と、E B191柱穴の間に間仕切り用の柱が存在することも考えられ、精査を進めたがその位置にあたる部分が暗渠配管により破壊されおり、柱の存在は確認出来なかった。身舎の規模は梁行長510cm（17尺）、桁行長1,110cm（37尺）を測る。

柱穴掘り方は、径約50~70cm、深さ15~30cmの円形ないし隅丸方形を呈する。柱は抜きとられたり、朽ちて残っているものはないが、柱穴掘り方のアタリなどから直径20~25cmの円柱を用いた可能性がある。柱穴堀り方の埋土は、暗黄褐色ないし、茶褐色微砂を交互に踏み固め、柱が倒れないように固くふみかためられている。アタリ部の土質は炭化物粒子を多く含む黒褐色粘質土である。本建物跡の主軸方向は、真北を基準としてN-20°-Wである。

他遺構との切り合いは認められなかつたが、身舎南東隅のE B128柱穴は東西に設置された暗渠配管により南部を破壊されている。

柱穴の覆土中からは総計299片の土器・木製品・種子等が出土しており、A区で検出された建物跡では最多の出土量である。その内訳は内面を炭素吸着による黒色化処理された内黒土師器4片（E B129・190・193）、内外面共に黒色化処理された両面黒色土師器1片（E B123）、須恵器12片（E B128・129・190・194・196・197）、赤焼土器274片（E B106・120・123・128・129・132・191~194・196・197）の計291片の土器片が出土しており、E B190柱穴からは70片の土器片の他、木片やモモの種子が出土している。

本建物跡の時期はその出土土器により平安時代10世紀前葉に比定され、北区で検出されたS B 1・2建物跡とはやや古い時期と考えられるが、主軸方向の向きにより本建物跡と付属するような方向を示すS B 2建物跡があるが、詳略な検討は出土遺物が少なく出来なかつた。



第7図 SB3建物跡

S A 4柱列（第6図、図版6）

A区南半部、48~52-163~165グリッドIII層上面で確認されたやや東西に設置された掘立柱列である。北方150~200cmにはSB2建物跡がほぼ同じ方向に存在している。柱列は

西から E B 45・34・47・48 柱穴の 3 間である。

柱間距離は、300cm(約10尺)等間を測り、直線的、規則的に並んでいる。柱穴の掘り方は、径25~40cm、深さ20~25cmを測る。柱は抜きとられたり、朽ちて残っているものはないが、柱穴掘り方のアクリなどから直径20~30cmの円柱を用いた可能性がある。柱穴掘り方の埋め土は、炭化物粒子を多く含む暗褐色粘質土と、濁青灰色砂質土を交互に踏み固められている。掘り方埋土の覆土中からは土器片等の出土はなかった。主軸方向はN-28°-Wである。本柱列は S B 1 建物跡とほぼ同一の主軸方向を向くことから、付属する柱列と考えられ、その時期も S B 1 建物跡と同一の平安時代11世紀後半頃と考えられる。

G 区で検出された遺構は掘立柱建物跡 1 棟、大溝 1 条、矢板列 1 条、畦畔状遺構 1 条、土壤、溝状遺構、建物跡として組み合せが出来なかった柱穴など多数の遺構が検出された。(第8図) また本区は、昭和57年秋における分布調査の際試掘トレンチの粗掘りで漆紙文書片を付着した土器片が発見された地区でもある。ここでは建物跡を記述するが、本遺跡で検出された建物跡のうち最大規模の建物である。以下詳述する。

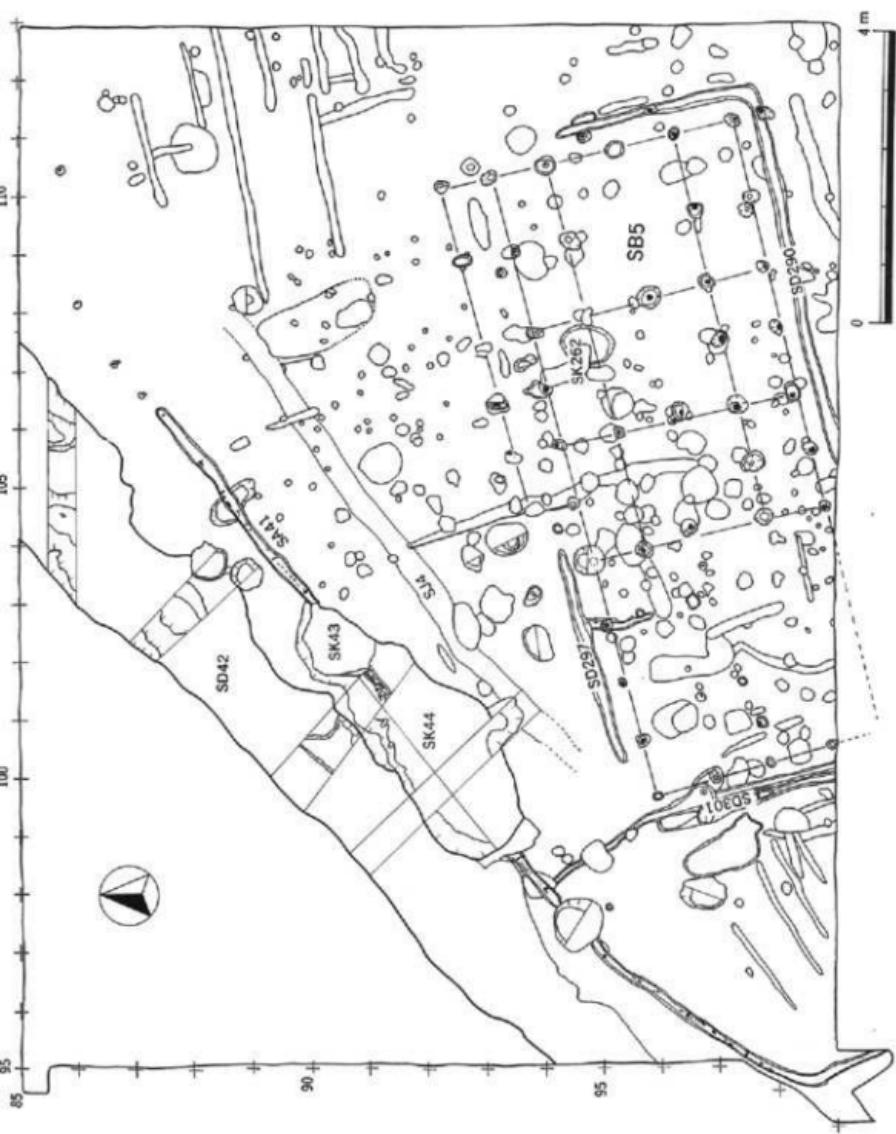
#### S B 5 建物跡 (第9図、図版17)

G 区南部99~111-91~99グリッドIII層上面で確認された東西棟の掘立柱建物跡である。身舎は梁行4間、桁行10間に北面桁行の東半部に1間の底部が付属し、底部をのぞく建物跡の周囲には、幅30~45cm、深さ15~20cmの雨落ち溝をもつ大規模な建物跡である。

柱間距離は西面梁行 E B 302・311~313 柱穴は 2.1m (7 尺) 等間、東面梁行 E B 314~318 柱穴も 2.1m (7 尺) 等間。北面桁行が西から E B 302~305, 248・247・246・245 までが 2.1 m (7 尺) 等間で、それに続く桁間の E B 244・318 柱穴が 2.7m (9 尺) 等間である。南面桁行も同様の柱間距離を保ちながら西面梁間 E B 311 から 1 間分のびる部分に建物跡南西隅の柱穴が存在するものと考えられるが、調査区南部が未調査区域となり確認出来なかった。

本建物跡は、梁間、桁間共に 2.1m (7 尺) 等間を基本とした建物と思われる。そして桁行間では東側に 2.7m (9 尺) 等間の 2 間を合わせ、10 間となったものである。底部は北面桁行 E B 318・244~248 柱穴の北側へ 1.5m (5 尺) の柱間をもちながら 5 間作られている。柱間距離は、北面桁行と対応する距離で E B 319・249~253 柱穴は 2.7・2.7・2.1・2.1・2.1 m の 9 尺・9 尺・7 尺・7 尺・7 尺の等間となる。身舎を構成する柱で、北面桁間の E B 245 柱穴から南面桁間の E B 283 柱穴にかけては、間仕切りの柱穴を考えられる E B 242・259・260 が存在する。また西側の E B 279・276・274・287 柱穴も間仕切りの柱穴として考えられるが、北面桁行の E B 248 と 305 柱穴間に柱穴が存在しない。この部分に S K 280 土壙があり、

第8図 G区遺構配置図

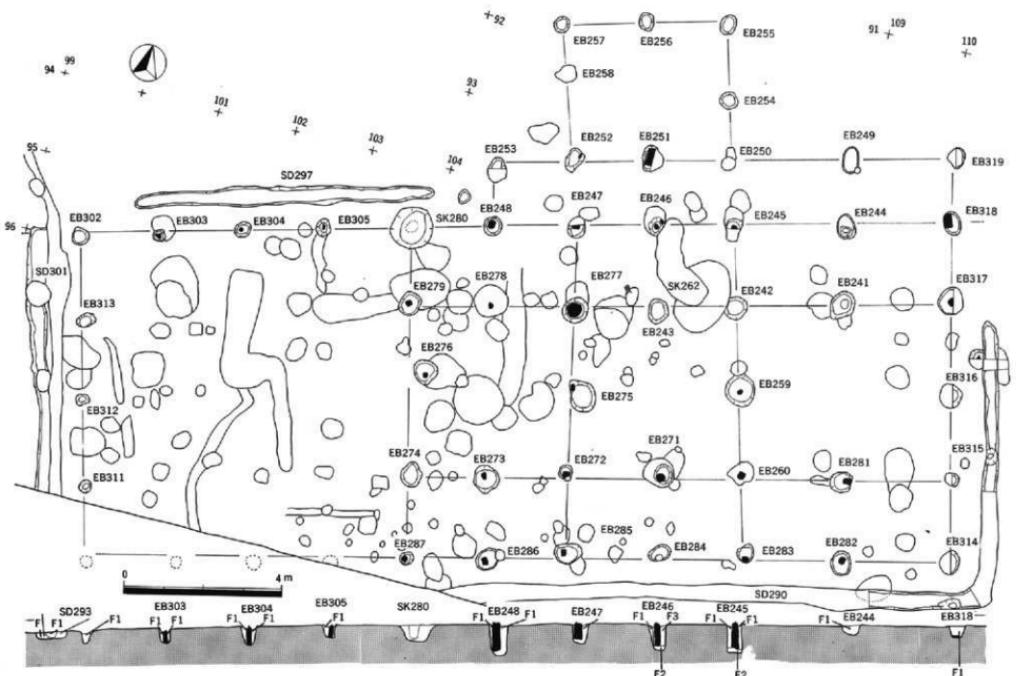


S K280土壤により破壊されたものと考えられる。またこの柱列では、E B276柱穴がやや東側にその列からはずれるが、間仕切りの支立柱として存在するものと考える。身舎の規模は梁行長8.4m(28尺)、桁行23.2m(74尺)となり、東面梁行では底部を入れ、9.9m(33尺)を測る。本建物跡の主軸方向は、真北を基準にしてN-14°30'Wである。

柱穴掘り方は、径約45~70cm、深さ30~80cmの円形ないし隅丸方形を呈する。確認された44個の柱穴のうち、柱根が残存しているものが25個、柱は抜きとられてはいるが礎材となる板材を敷いている柱穴が2個、その他の17個の柱穴は、柱が抜きとられたり、朽ちて残存していなかった。比較的柱根と礎板がある北面桁行の柱穴を通して断面で観察したところ、西半のE B302から305柱穴は径に12~15cmの円柱又は角柱を使用していたことが判る。また東半の245から248柱穴は、径18~22cmの円柱を用いている。E B244柱穴は、柱穴掘り方も浅く、抜きとられたものと考えられる。E B318柱穴は、確認面から深さ24cmの部分に、幅18cm、長さ36cm、厚さ3cmの板材を水平に置いている。柱根は残っておらず、抜きとられたものと考えられる。通し断面を全体的に観察すれば、身舎中央部にあたる部分の柱穴は掘り方も比較的大きく、柱根も太く深くそえられている。また、西側4間と東側2間はやや少なく、掘り立も浅く、柱根も細いものである。身舎のうちで最も太い柱根を残しているものは、中央部のE B277柱穴である。径45cm、長さ85cmを測り、身舎の中心的な柱として存在していたものと考えられる。柱穴掘りの埋土は、柱穴底面には青灰色粘質土に茶褐色砂質土を混入した固い土を敷きつめ、その上に柱を置き、柱の周囲は、暗褐色粘質土と茶褐色砂質土を交互に踏み固め、柱が倒れないような処置を施している。柱根が残っていない柱穴のアクリ部の土質は、黒褐色粘質土となっている。

身舎の周囲には、S D290溝状造構とした雨落ち溝が存在する。東側梁間のE B317柱穴から身舎南面桁間にかけてL字状にあり、西側梁間E B302柱穴からE B311柱穴にかけてはS D301溝状造構が存在する。身舎南西部は未調査区域に入るが、S D290溝状造構は身舎南面桁間と並列して続き、西面梁間と並列するS D301溝状造構とつながるものと考えられる。そしてこの雨落ち溝は、身舎を囲むようにコの字状に設置されたものと思われる。幅30~45cm、深さ15~20cmを測り、覆土は茶褐色粘質土の單一層である。また北面桁行西半にも同様な雨落ち溝が存在する。長さ750cm、幅20~35cm、深さ10~15cmを測る。雨落ち溝が存在しない北面桁行東半部分には前述した5間の底部が1.5m(5尺)の柱間で存在するため雨落ち溝が設置されなかったものと考えられる。

本建物跡の柱穴内からは土器片の他、木片・石・石製品・種子・炭化物等の遺物が出土している。土器片は総数838片出土し、種別では内面を炭素吸着による黒色化処理された内黒土師器、内外面共に黒色化処理された黑色土師器、須恵器、赤焼土器である。石製品は

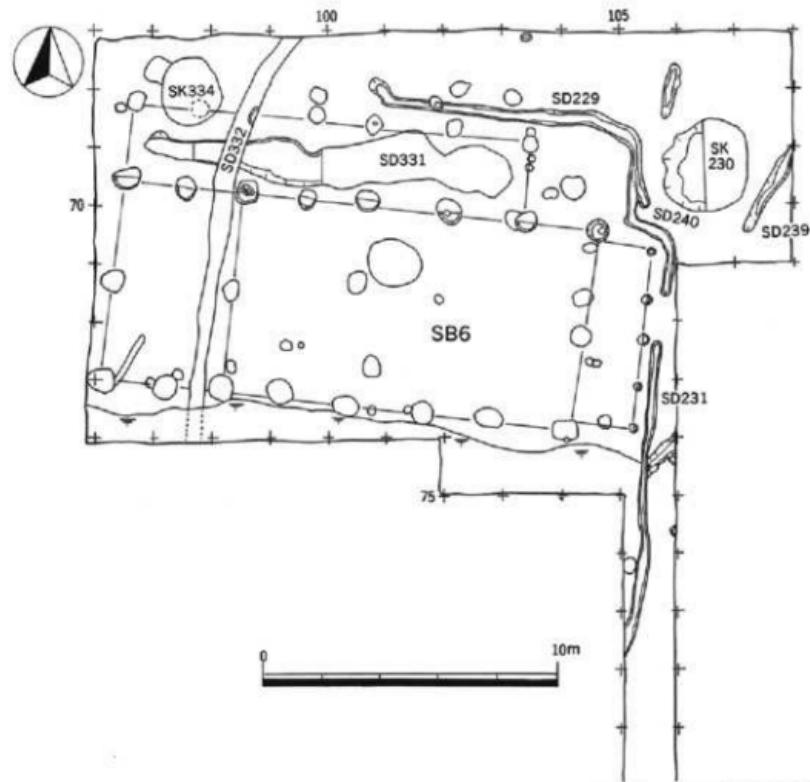


第9図 S B5建物跡

砥石などである。種子は、桃、胡桃等の堅実植物の種子である。土器片の種別の内訳は内黒土師器が49片、黒色土師器1片、須恵器23片、赤焼土器765片となる。赤焼土器片が出土総数の90%以上を占める。柱穴の中で最も多く出土している部分は、身舎中央部の北面桁行E B 246・278柱穴、底部のE B 248柱穴などである。身舎西半部の柱穴掘り方からの出土土器は少ない。

本建物跡の時期は、出土土器や、建物跡が礎板を有する柱穴と柱根だけの建築方法などから考えるに、平安時代11世紀前半頃と考えられる。

E区で検出された遺構は掘立柱建物跡1棟、土壙3基、溝状遺構6条、ピット多数などである(第10図)。本区は、本遺跡の北限を探るため、あらかじめ設定していたグリッドの、



第10図 E区遺構配置図

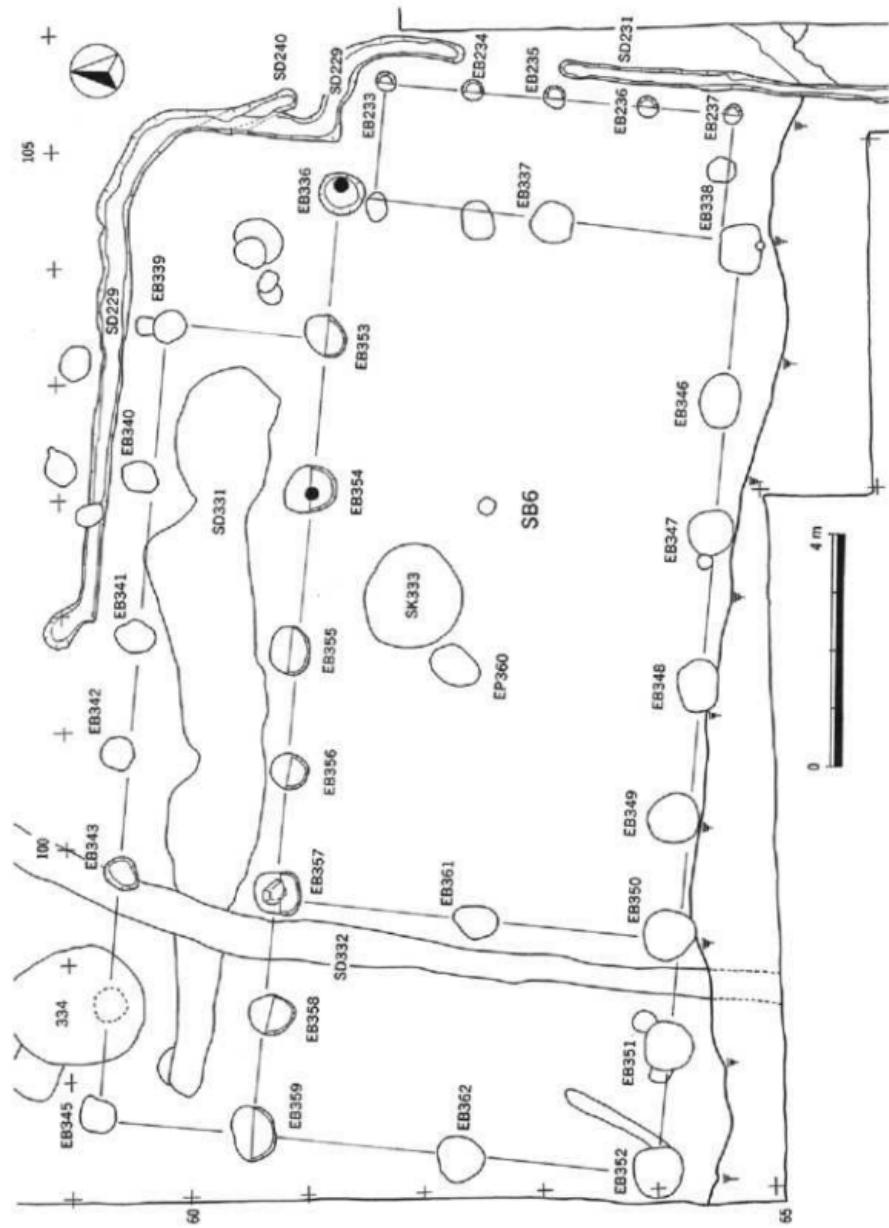
105-60~75グリッドの南北ラインをトレント調査で溝状遺構と、井戸跡を思わせる黒色の有機物を含む円形の落ち込み部を確認し、拡張精査した区である。拡張した結果、溝状遺構は、建物跡を囲む雨落ち溝に、建物跡を構成すると考えられた柱列は、さらに西側に存在する大規模な建物跡の底部に、井戸跡と思われた落ち込みは神社等の屋根を葺く際に使用される木端材が充満しており井戸跡とはならなかった。ここでは建物跡を詳述する。

#### S B 6 建物跡（第11図、図版18）

E区96~105-67~77グリッドIII層中位で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の規模は、梁行2間、桁行7間の身舎に北面と東面に縁束ないし底部が付属し、建物跡全体を囲むように雨落ち溝がめぐる大規模な建物跡である。しかし、建物跡南半部は、水田耕作による整地が昭和20年代に実施されており、精査区南部が盤下げにより破壊されている。本建物跡が更に南部へのびる可能性について後述する。

身舎の柱間距離は、西面梁行北からE B359・362・352柱穴は360cm（12尺）等間、東面梁行E B336・337・338柱穴も同様である。北面桁行西からE B359・358・357・356・355・354・353・336柱穴は、210・210・210・210・270・270・270cm（7・7・7・7・9・9・9尺）となり、南面桁行西から352・351・350・349・348・347・346・338柱穴も同様な柱間距離を測る。底部は、北面桁行部に並行し桁間との柱間距離を270cm（9尺）にもちながら同じ柱間距離をもつ。E B番号は339から345柱穴である。もう一面の縁束ないし底部は、身舎車面に存在する。トレント調査の際検出された柱列である。東面梁間からの距離が210cm（7尺）を測るE B232~236柱穴である。柱間距離は150cm（5尺）等間を測り、身舎の柱穴より一回り小さな柱穴である。身舎の規模は梁行長720cm（24尺）、桁行長1,540cm（55尺）となり、西面梁行部では底部を入れ、990cm（33尺）、南面梁行部では1,750cm（62尺）となる。本建物跡の主軸方向は、真北を基準にしてN-6°40'~Eである。

柱穴掘り方は、身舎部で径60~80cm、深さ50~80cmの円形ないし隅丸方形を呈する。北面底部の柱穴掘り方は径50~70cmであるが柱穴の立割りを調査することが出来ず、深さは不明である。東面底部は径20~30cm、深さ20~30cmと浅い。身舎柱穴19個の柱穴のうち、柱根が残存しているものが3個（E B336・354・346柱穴）、自然石が柱穴上位に埋め込まれているもの1個（E B357柱穴）であり、他の柱穴は、柱が抜きとられたり、朽ちて残っているものはなかった。掘り方の面整理では、径30cm前後の円柱を使用していたことが判り、残存しているE B336・354柱穴の立ち割りでは径33cm、長さ60cmの円柱が使用されていた。掘り方の埋土は3層に分かれ、底面部分には青灰色砂質土を固くつめ、その上に柱を置き、柱の周囲は暗褐色粘質土と茶褐色砂質土を混入した土質の土を踏み固め、柱が倒



第11図 S B 6建物跡

れないようにしている。柱根が残っていない柱穴のアタリ部の土質は黒褐色粘質土となっている。

身舎の北側と東側には、S D229・231溝状遺構が存在する。建物を囲むような状態を呈しており、雨落ち溝と考えられる。S D229溝状遺構は幅25~30cm、深さ20~25cmを測り、溝覆土中には約30~40個体の須恵器、赤焼土器の壺・壺・皿が多量に出土した。なかでも須恵器底面には「王」と墨書きされた土器や、「王」と刻印された土器が出土した。またS D231溝状遺構は、身舎東面梁行部と並行して南部へ続いている。南側桁行部より南方650cmの部分で、西方に曲がる状態を示しているため本建物跡は更に南部へ梁行部が伸びる様相を呈している。

本遺物跡の時期は、柱穴掘り方内からの出土遺物は少ないが、本建物跡に付属するS D229溝状遺構内出土の土器がヘラ切り無調整の底部切り離し技法をもつものが多いことなどから平安時代9世紀後半頃と考えられる。また、特筆すべき遺物の出土では、本建物跡西半部、E B361柱穴の南方2mの地点で鉄斧（第40図358）が出土したことである。平安時代の集落跡、しかも建物跡内から出土したことは貴重な発見といえる。

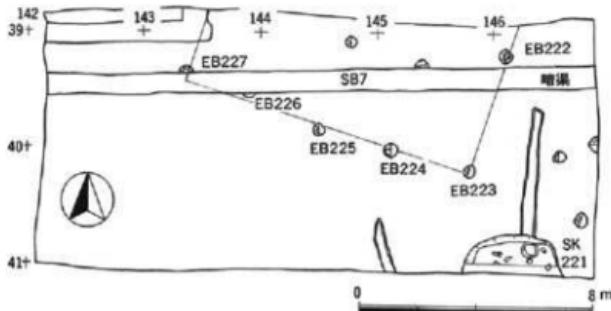
その他建物跡については、C区とした調査トレンチ内で、1棟の建物跡を構成する柱穴群が検出されている。

C区は本遺跡北東部142~146-39・40グリッドに設定した調査区である。この地区は工事における仮道路が設置されることになり、B区と同時に調査を進めたものである。

### S B 7 建物跡（第12図、図版25）

調査区域内に検出されたピットを組合せによって構成した東西棟の掘立柱建物跡である。梁行1間以上、桁行5間以上の建物で、北側と西側に延びる部分は未調査区域となり全容は不明である。柱間距離は、東面梁行となるE B222からE B223柱穴が210cm（7尺）を測り南面桁行となるE B223・224・225・226・227柱穴は130cm（約4尺）等間を測る。

柱穴掘り方は径14~18cm、深さ20~25cmの円形を呈し、柱アタリ部の観察では径約12cm前後の円柱を使用していたことが判る。柱は朽ちて残っているものはないが、直線的、規則的に並んでいる。柱穴掘り方の埋土は、炭化物粒子を多く含む暗褐色粘質土と濁青灰色砂質土を交互に踏みかためており、柱の倒壊を防ぐ埋め方を施している。本建物跡の主軸方向は、真北を基準としてN-18°-Eである。柱穴掘り方内からの出土土器は検出されなかった。本建物跡の時期は、C区内で検出されたS K221土器と本建物跡の柱穴掘り込みが同一層となることから、概略して平安時代10世紀後半と位置付け出来る。



第12図 S B 7建物跡

### 3 大溝・矢板列（第8図、図版20）

沼田遺跡では溝状遺構として登録された遺構は86条にのぼる。しかしこれらは幅が20~30cm、深さ15~30cm、長さ7~10mという小さな溝状遺構が大半である。ここで取り上げる大溝とは、集落ないし居住する建物等を区分すると考えられる幅が広く、深さも他に比べて深い溝跡を指す。本遺跡では、G区で矢板列と並行して検出されたS D42溝状遺構がある。ここでは、矢板列としたS A41矢板列と併記して詳述する。

### S D42大溝（第8図、図版20）

G区北西部95~101-85~95グリッドIII層上面で確認されて長さ23m、幅400~500cm、深さ30~60cmを測る。断面形はやや船底状を呈するが、溝中央部で大きく盛り上がり、2条の溝が重なり合った底面を呈する。断面の観察では2条が重複した痕跡は見られず、同時に掘り込まれたものである。底面は植物の根による破壊が著しく凸凹が激しい。壁面は堀り込み面よりゆるやかに底面に至り、部分部分で内側に張り出す部分もある。覆土は2層に分かれ、F1層が黒褐色粘土層で、炭化物粒子や、遺物を含む。F2層は濁青灰色シルト層で、炭化物粒子、植物の有機物を多量に含む。覆土中からは、F1層より第45図355の花文字平瓦片や、内面を炭素吸着による黑色化処理された内黒土器や、赤焼土器が出土した。瓦は、本遺跡北西1kmに所在する城輪柵跡の出土瓦と類似し、その分類によれば城輪第I期の瓦として位置付けられる。本遺跡はこれにより平安時代9世紀後半と考える。

本溝跡の方位は、真北に対して約40°東に振れる（N-40°-E）。

#### SA41矢板列（第8図、図版20）

G区北西部95～107—85～98グリッドIII層上面で確認された長さ23m、幅20～25cm、深さ20～30cmの掘り方内に矢板列が打ち込まれた状態で検出されたものである。S D43大溝と約2mの間隔を保ちながら並行している。矢板は、幅10～15cm、厚さ2～3cmで、打ち込まれた先端を尖がらせている。横1列に打ち込まれた矢板は約80cm毎に直角に打ち込んだ矢板で仕切り、調査で確認された縦の矢板は13枚確認出来た。これら矢板列は土塀としての築地基礎とも考えられる。

本矢板列は、中央部で、SK43・44土壤により破壊を受けておりSK43・44土壤よりやや時期が下がるものと考えられる。

矢板列の埋土から若干の赤焼土器・須恵器片が出土しているが、明確な時期を示すものはない。北側に並列するSD42大溝と同一方向を示していることから、その時期もSD42大溝と同時期の平安時代9世紀後半と推測される。

#### 4 井戸跡（第13図、図版8・9）

本遺跡のA区中央部やや東寄りで1基確認された。検出グリッドは56—163・164グリッドIII層上面よりその掘り込みが始まる井戸跡で、S E 10井戸跡と呼称した遺構である。

#### S E 10井戸跡（第13図、図版8・9）

A区S B 2建物跡東方8mで確認された井戸跡である。井戸跡は、長径180cm、短径160cmの不整橢円形を呈した掘り込みを呈し、内部に縦板・横桟・井戸眼を井戸形態として組み入れられたものである。掘り方はIII層上面より120cmを測る。掘り方周囲のIII層上面には上屋を形成する柱穴は確認出来なかった。内部には遺存状態がやや良の板材が方形に一辺4～5枚を縦に打ち込まれ、板は幅13～22cm、厚さ1.5～3cm、長さ110～120cmを呈する。板材の下部外側には一辺5～7cm、長さ70cm前後の角材を外側から縦板をおさえていたと思われる角材が1本検出され、横桟として機能されるものと考えられる。角材の両端部は正四角となっているため、他の3本中2本はD部を作り出す角材があるものと考えられるが井戸内からは検出されなかった。縦に打ち込まれた板材の内側には、径46cm、高さ40cmの曲物が井戸眼として設置されており、板材はこの曲物をおさえるように打ち込まれている。方形に打ち込まれた板材（井側）は内々で48cm四方となる。井戸の埋土は5層に分かれ、堀り方の埋土、井戸内の埋土、立割りによる周囲の土層の観察は下記の通りである。

##### （1）掘り方の層序

F①層 濁黄褐色シルト層（遺物少量出土）

F②層 明褐色粘質土層

F③層 暗褐色粘質砂層（遺物多量に出土）

F④層 濁青灰色シルト層

F⑤層 暗青灰色粘質土層（有機物を含む）

##### （2）井戸内覆土

F 1層 暗黄褐色砂質土層

F 2層 暗灰褐色粘質土層（遺物多量に出土）

F 3層 暗褐色粘質土層

##### （3）立割による周囲の土層

III層 黄褐色シルト層

IV層 明青灰色粘質土層

Va層 青灰色シルト層

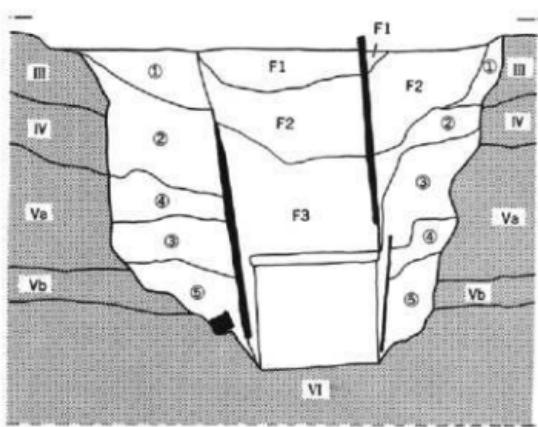
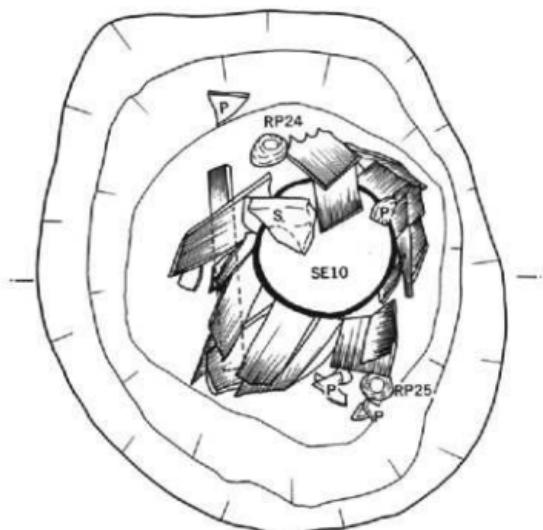
Vb層 暗青灰色シルト層

VI層 濁青灰色細砂層

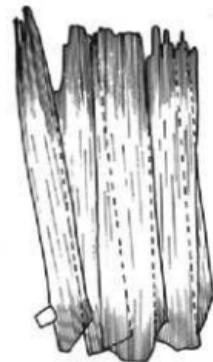
立割りによる第V b層が帶水層となり、井戸水の使用となったものと考えられる。

出土遺物は井戸掘り方①・③層より、第20図38・39の須恵器壺片や②層からは赤焼土器壺が出土した。また井戸眼として使用された曲物は、杉材を材質にして、曲げやすく縦の線を刻み、内側では斜目に刻んだ格子状の線刻がある。

本井戸跡の時期は出土土器により、平安時代10世紀前半頃と推測される。



南面縦板設置状況



0 1 m

第13図 S E 10井戸跡

## 5 土壌（第14図、図版10・11）

沼田遺跡で検出された土壌は遺構台帳に登録記載され、精査が行なわれたものだけで47基を数える。庄内地方の平安時代の土壌を分類し研究されたものは発見例が多いわりに少ない。井戸跡についてはその形態で、時期的な設置方法等を加味した分類基準を示しているが（註1），本遺跡の土壌は形状等にばらつきがあり、その内容も多種になることから一概にタイプ別に分類することは不可能と考えられるが、ここでは酒田市庭田遺跡（註2）で分類タイプ別に区分した資料を参考に、ある程度類似している土壌を概要する。なお、出土遺物や時期については後章で記述するため、ここでは分類した土壌の特徴だけを述べる。

47基の検出土壌を平面図や断面図を参考に、平面形と断面形で類似点があるものをA～E類に類別し、それぞれの特徴を述べる。

A類 円形を呈し、断面形が円筒状、丸底状、皿状の3形態がある。それぞれをa・b・cに記号化し、最も特徴を示す土壌を記述する。

A-a類 A区SK39・156土壌等がこの類となる。覆土は3～5層に分かれ、上面の土色が暗褐色の粘質土である。炭化粒子や赤色粒子を含みかたい。径1.5～2m。

A-b類 G区SK43土壌、E区SK230土壌がこの類に入る。覆土は2～3層で比較的あさい。土色は黒色または黒褐色を呈する。SK230土壌は径320～300cmの大きな径をもつ。

A～C類 A区SK57・86土壌、G区SK288・299土壌がこの類に入る。径100～150cm、深さ30～40cmと比較的あさい。土色は茶褐色を呈し、やや粘性をもつ。

B類 不整梢円形を呈し、断面形が丸底を呈する。細かな形態に分けることは出来ない。A区のSK36・152がこの類となる。覆土はあさく、土色も明褐色を呈する。

C類 楕円形を呈し、断面形が皿状・丸底状・円錐状を呈する。それぞれにa・b・cと記号化する。

C-a類 A区SK74土壌、C区のSK221土壌、G区のSK291土壌があげられる。覆土上層の土色は暗褐色で粘性をもち、炭化物粒子や、赤色粒子を含む。遺物の出土が多いことも特徴とされる。

C-b類 A区SK77土壌・G区SK287土壌がこの類となる。覆土は2～3層。

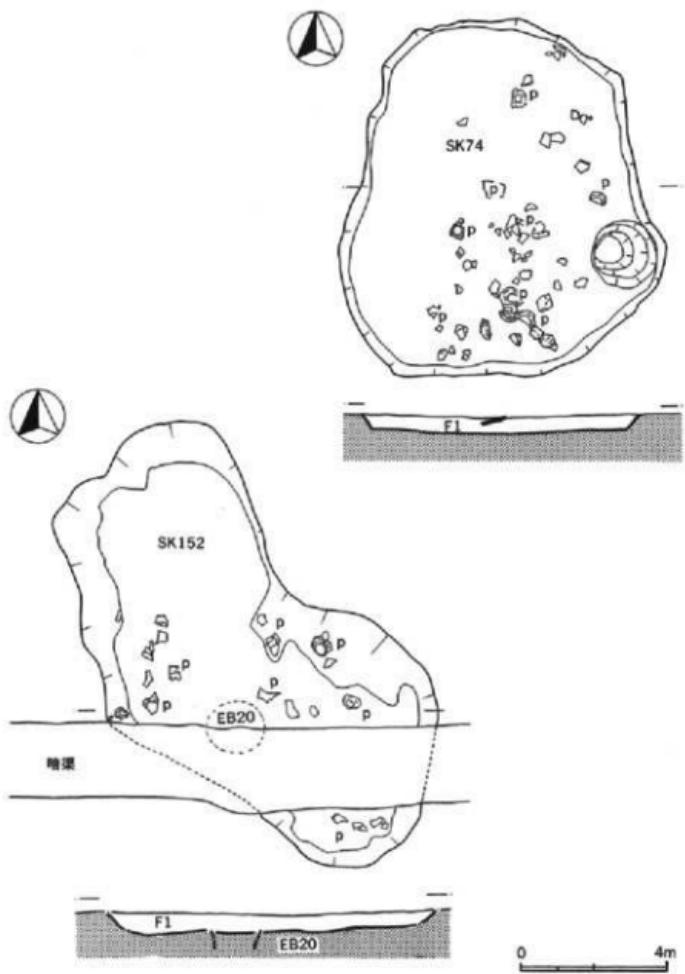
C-c類 G区262土壌がこれに入る。小さいが、出土遺物が多いことで類別した。

D類 不整長梢円形を呈し、断面形が丸底状を呈するものである。

A区SK75土壌、G区SK44土壌がこの類となり、細分はできない。覆土は1層で暗褐色を呈する。出土遺物が多い。

E類 四角形を呈し、断面形が皿状を呈する。

A区SK40・215土壌がこの類となる。覆土は1層で、明褐色土に炭化物粒子が混る。



第14図 土壌

## 6 溝状遺構 (第15・16図)

本遺跡で確認された溝状遺構は99条を数える。これらを類別すれば、その様相で4つの類に分けることができる。A類としたものは、建物に付属して掘り込まれているSD290・301・297(SB5), SD229・231(SB6)などがあげられる。B類とした河のような大きな幅をもつもの。C類は、ある一定の方向を向き、その長さもほぼ同じ位の長さで掘り込まれ、各々がある一定の間隔を保ちながらグループをなすもの。D類は3者の溝跡に属しないものとに分けた。A類とした建物跡に併うものとした溝状遺構については、各建物跡の項で詳述している。またB類とした大きな幅をもつものはSD42大溝と呼称して先述している。ここではC類とした溝状遺構を詳述する。

本遺跡の調査区でC類が数多く検出した区はA・G区である。A区では、調査区の西半に数箇条の溝状遺構が検出されている(第15

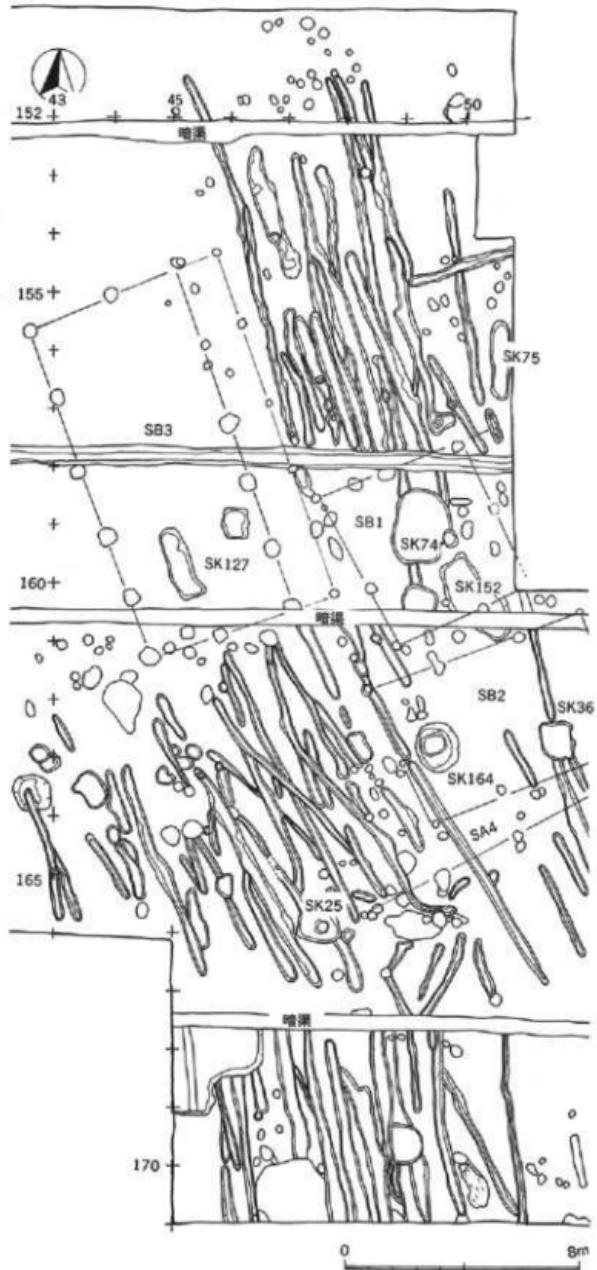


図)。これらをみると、長さ8~10mを有し、同一方向に傾きを示しながら、15~18m単位に各ブロックが分かれ、ブロック間は5m程離れている。そして更にもう一つのブロックを作り出している。溝状遺構の傾きからいえば、2つの方向が見える。真北を基準にしてN-15°-WとN-5°-Wのグループである。更に言えば30°位の傾きをもつものもあるが、これは3~5条位をまとまりとし、長さや方向が不ぞろいである。また遺構間の切り合い関係でも、前者の溝状遺構を切っていることや、遺物がほとんど出土しないことなどから、平安時代でも前者とは時期差の大きなものといえるため割愛し、前者の2例をもとに記述している。

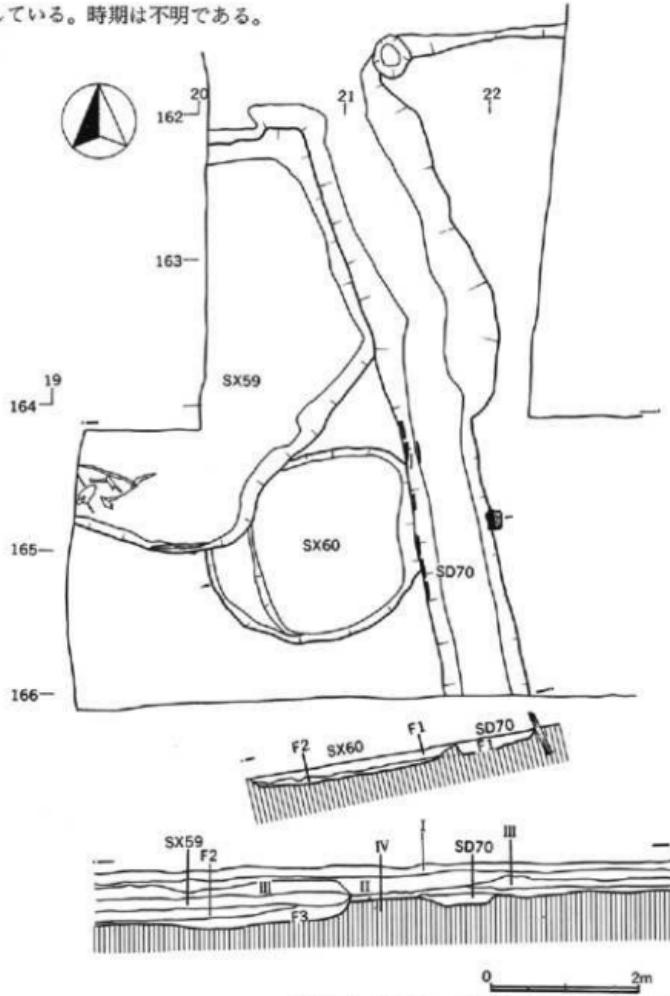
約15°の傾きをもつグループは、長さ8m前後、各々の間は30~40cmを離しながら12~15条のグループでまとまりを作る。深さは平均して5~10cmと浅い。覆土中からは第27図146の赤焼土器が出土しているが、上部からの流れ込みによる感を受ける。もう一つのグループは真北方向に近い傾きをもつグループで、長さ10~13m前後、各々の間は20~30cmを離しながら5~6条のグループでまとまりを作る。深さは平均して10~15cmとやや深い。覆土中からは比較的完形に近い赤焼土器壺や、須恵器壺片を出土する。これらも前者と同様上部からの流れ込みが多い。G区でも軸方向はちがうが2カ所に存在する。前述と同様である。以上溝状遺構を2つのグループに分け、その違いを述べた。しかしこれらに共通していることは、建物跡が存在する部分にのびていかないことや、溝状遺構の軸方向が建物跡の主軸方向と同一に示しているところに特徴がある。推測ではあるが、建物跡とつながりをもつ畠の畠状遺構と考えることが出来る。

## 7 性格不明の遺構（第16図、図版14）

A区より西方60mの地点、工事による排水溝を設置したい旨を土地改良事務所から受け、ただちに調査に入った地区でA'区と呼称した。粗掘り後面精査を行うと、矢板が3枚III層中まで達した状態で検出、付近を拡張精査した区域である。グリッドは19~22-159~165グリッドである。全域の面精査を行うと、不整の楕円形を呈した落ち込み2基や、北方へのびる溝状遺構が1条検出された。不整楕円形を呈した遺構は木の枝や、木片が多く混入し底面もあさいため性格不明の遺構として取り上げた。S D70溝状遺構は、幅110~180cm、深さ20cmを測り、北方では幅が広がり東西に曲がる。覆土はF1層明褐色粘質土の單一層である。矢板は、溝の東壁際に2枚やや斜めに打ち込まれ、幅22cm、長さ60cm、厚さ4cmの一枚板である。西壁に打ち込まれた板は幅15cm、長さ45cm、厚さ2cmである。これら3枚の板は、溝状遺構の壁際にあることから、土留めとして打ち込まれたものと考えられる。覆土中からは、須恵器壺（第28・29図142・143・159）、同高台付壺（第29図155・157）、同壺（同図163・165）、赤焼土器壺（第28・29図142・150・152・153・159・167・168）が

出土している。本溝状遺構の時期は出土土器により、平安時代10世紀頃に比定出来る。

S X60遺構はS D70溝状遺構の西側に接して検出された。平面形は不整梢円形を呈し、長径255cm、短径225cm、深さ18cmを測る。底面はやや平坦である。覆土は2層に分かれ、F<sub>1</sub>層は暗褐色粘質土層、F<sub>2</sub>層濁青灰色砂質土層である。覆土中からは、第27図の赤焼土器が出土している。S X59遺構はS X60遺構の北西およびS D70溝状遺構と接し、遺構の西半は未調査区に入る。覆土は3層に分かれ。土器の出土はないが、第44図398の木鉗が出土している。時期は不明である。



第16図 S X59・60遺構・S D70溝状遺構

### III 遺 物

沼田遺跡で出土した遺物は土器が整理箱にして111箱、木製品(礎板・木端等を含む)が17箱、井戸枠組27枚、瓦2点、鉄斧1点、その他、硯、古銭、磁石など金属・石製品の遺物がある。

遺物は精査区としたA、A'、G、E区から多く出土しており、分布状況は遺構のそれと軸を同一とする。本章では遺構内出土の遺物を中心に記述し、包含層出土のものについては、重要遺物とみなされるものについてだけ記述し、他は大部分を割愛した。

遺構内出土の土器点数は全部で7,728片を数える。内訳は、土師器371片、須恵器456片、赤焼土器2,632片で、その他は自然遺物である。赤焼土器が全体の35%を占める。土師器はすべて内面ないし外外面に炭素吸着による黒色化処理が施されているものである。須恵器は环・高台坏・蓋など小形の日常汁器類や、甕・壺・長頸壺・鉢など、貯蔵形態を示す大形のものが認められる。小形の坏には双耳坏(第40図344)もあり、破片でも2点出土している。大形の甕や壺には須恵器特有の条線間に短かい細少の条が入る叩き目や、格子目状の叩き目などを施こし、内面に同心円、または青海波や条線で叩き目の痕跡を残すものがある。

もっともよく特色を把握できるのが坏である。底部の切離し技法が箇切りによるものと、糸切りによるものがあり、前者が主体を占める。

赤焼土器は概して細片が多いが、坏片がもっとも多く、甕・壺・高台付坏がある。すべて酸化焰焼成で、赤褐色を呈するものが多い。坏にあたっては底部切り離しがすべて回転糸切りである。甕は、口縁部が「く」の字状に屈曲し、口唇部がやや内傾するものと直立するものがあり、後者が多い。概して内・外面に煤が付着しているものが多い。その他には壺・小皿などがある。

陶磁器類では、灰釉陶器・綠釉陶器・青花が出土した。第40図346は灰釉陶器の三脚盤形土器である。G区包含層中より出土した愛知県篠岡系の灰釉陶器である。347は中国産の染付の青花である。中国元の時代、14世紀頃と考えられる。包含層上部で検出された。348~351の綠釉陶器はA区包含層III層上面で検出されたが、磨滅が著しく釉がうすれている。器形は碗または鉢形と思われる。

その他の遺物では花文字瓦1点、鉄斧1点、磁石等がある。花文字瓦はG区のS D42大溝中より出土し、瓦の編年では城輪標跡第I期の瓦と考えられている。鉄斧は、E区 S B 6建物跡西半部第III層の包含層中より出土。集落または建物跡内からの出土例はこれが初例である。磁石は大小検出されているが、全面に漆付着のものがあり、漆工人が使用していたものと考えられる。木製品では第43図398の木歛がS X60遺構より出土している。

## 1 建物跡出土の遺物（第17・18図、表1、図版31～33）

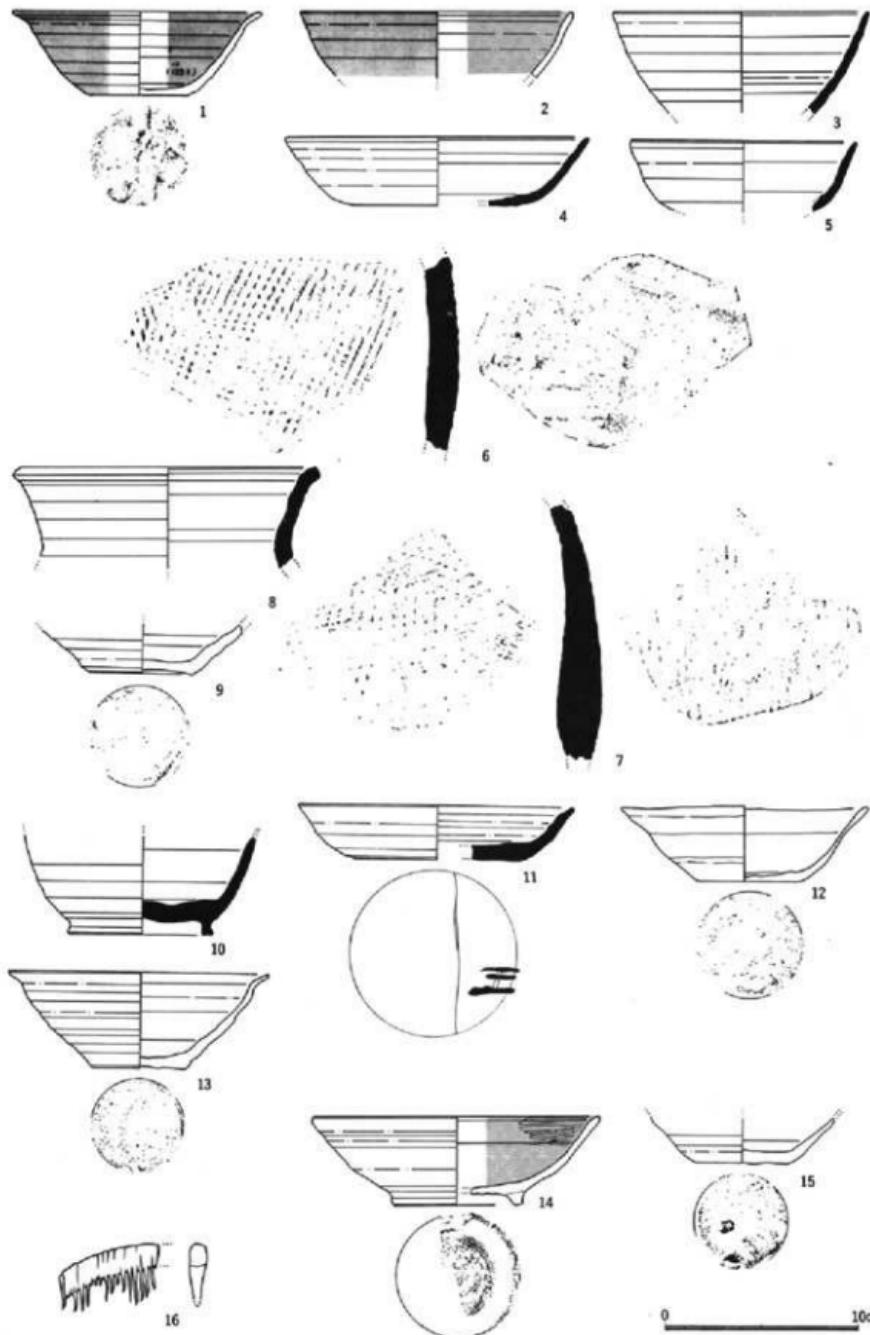
7棟の建物跡の柱穴掘り方から土器片が出土している。また土器以外では、柱根や礎板・櫛などが出土している。土器は総計1,398片を数え、その内訳は、内面を炭素吸着による黒色化処理された内黒土師器63片、内外面黒色化処理された黒色土師器3片、須恵器56片、赤焼土器1,276片を数える。赤焼土器が全体の92%弱を占め、柱穴掘り方以外では、建物跡に付属する雨落ち溝からも土器・木片等が出土している。とくにSB6建物跡のSD229溝状遺構からは、須恵器壊や、赤焼土器壊の完形品が多量に出土した。またSB5建物跡EB323柱穴掘り方からは木櫛が出土している。

出土土器における器形の特徴では、壊形土器は、口径および底径も大きく、器高がひくく皿状を呈するものや、付高台となるものがみられる。その他の器種では、壺・甕がある。赤焼土器では、壊は口径と底径の比率が1:0.5前後で、器高も高い。器内はうすいものが多く、ロクロ整形が不良で歪な器形が多い。赤焼土器甕類は、ロクロ整形後叩き調整の手法を用いる須恵器の甕類とその手法を共有する。底部は平底と丸底があり、甕面に煤等が付着しているものが多い。

各建物跡柱穴掘り方出土土器の内訳は、SB1建物跡はA区中央部で検出された梁行2間、桁行2間の身舎に東側に庇をもつ東西棟で、内黒土師器1片、須恵器8片、赤焼土器36片の計45片検出された。しかしいずれも細片で図示出来るものはなかった。

SB2建物跡はA区SB1建物跡のすぐ南側に接して検出された梁行2間、桁行3間の東西棟で、柱穴掘り方からは須恵器10片、赤焼土器16片の計26片出土した。赤焼土器は細片で図示出来るものはなかったが、須恵器では、第17図5の壊形土器と同図8の壺形土器は口縁部片が出土した。壊は、南面桁行部のEB16柱穴から出土し、図上復元の口径は115%を測る。底部付近からやや丸味をもちながら立ち上がり、器面に明瞭なロクロ痕を残す。外面には灰かぶりによる自然釉が付着している。壺は南東隅のEB23柱穴から出土している。口縁部だけの破片で、図上復元による口径は112%を測る。頭部からやや外反するように立ち上がり、口唇部には布などによって丸味を作っている。器壁は厚く、暗灰色を呈する。本建物跡の時期は、出土土器により平安時代10世紀前半頃と考えられる。

SB3建物跡はA区SB1建物跡のすぐ西側に接して検出された梁行2間、桁行5間の身舎に東面庇をもつ南北棟で、柱穴掘り方からは、内黒土師器4片、黒色土師器1片、須恵器16片、赤焼土器278片の計299片出土している。土師器は細片で磨滅が著しく、図示出来るものはなかった。須恵器では、第17図3の壊形土器がある。EB38柱穴から出土したもので図上復元による口径は132%を測る。器内外面にロクロ痕を残し、胎土に粗砂を混入し、焼成は堅い。色調は明灰色を呈する。赤焼土器では壊形土器・甕形土器が出土している。



第17図 建物跡出土遺物（1）

坏は、底部付近の、破片で、底部が回転糸切りにより切り離され、やや底部が上げ底となる。胎土に粗砂を含み、焼成は軟かく色調は明赤褐色を呈する。甕は、E B190柱穴から出土したもので口縁部が「く」の字状にやや外反し、口唇部で端部が直立するものと、底部が丸底になるもので、第18図29・30に図示した。29は胴部がやや膨らみをもち、下半には条線上の叩き痕、上半にはロクロナデ痕を残す。同図30は、甕の底部下半である。底部は丸底を呈し、外面に縦位の条線状叩き、内面に横位の条線状叩き痕を残す。29・30は同一個体と考えられたが図上でも復元出来ず、別々に図示したものである。両者共に内外面に煤が付着し、煮沸に用いられたものである。本建物跡の時期は、出土土器により10世紀後半と推測される。

S B 5 建物跡は、G 区で検出された本遺跡最大規模を有する梁行 4 間、桁行 10 間の身舎に北面東半軒間に 1 間の庇をもつ建物で、庇部以外には雨落ち溝がめぐる。柱穴掘り方からの

表一 1 建物跡出土遺物観察表

編	遺物番号	種類	計測値(cm)			色調	胎土	焼成	底切	性質	調査技法・備考	出土地点・層位	
			寸	厘	毫								
第	1	非焼土器	坏	118	54	43	暗褐色	良	回	系	内外面漆付	EB248 (SB5)	F <sub>1</sub>
	2	土器		(140)			暗褐色	混	#		内面ヘラミガキ→黑色化	EB315 (SB5)	F <sub>1</sub>
	3			(132)			暗褐色	混	#		内外面ロクロ痕	EB358 (SB3)	F <sub>1</sub>
	4			(156)			灰色	粗砂混	#	ヘラ切	内外面ロクロ痕	EB353 (SB6)	F <sub>1</sub>
	5		甕	(115)			暗褐色	混	#		外表面カブリ	EB316 (SB2)	F <sub>1</sub>
	6						灰 色	粗 砂 混	#		内面ガラテ痕 外表面ガラテ目鉄叩き	EB304 (SB5)	F <sub>1</sub>
	7						灰 色	疏 密	#		内面ガラテ痕 外表面ガラテ目鉄叩き	EB246 (SB5)	F <sub>1</sub>
	8			(112)			暗灰 色	粗 砂 混	#		外表面ロクロ痕	EB223 (SB2)	F <sub>1</sub>
第	9	赤褐色土器	坏	52			赤褐色	粗 砂 混	#	回 余		EB191 (SB3)	F <sub>1</sub>
	10	灰褐色土器	高台付坏	(120)	(76)	52	赤褐色	粗 砂 混	#	ヘラ切	内外面ロクロ痕	EB353 (SB6)	F <sub>1</sub>
	11			(142)	(94)	28	暗灰褐色	粗 砂 混	#	#	高脚足書「王?」	EB353 (SB6)	F <sub>1</sub>
	12	赤褐色土器	坏	128	55	39	赤褐色	粗 砂 混	#	回 余		EB275 (SB5)	F <sub>1</sub>
	13			(134)	49	50	赤褐色	粗 砂 混	#	#		EB315 (SB5)	F <sub>1</sub>
	14	土器		(148)	64	48	灰褐色	石英砂混	#	#	内面ヘラミガキ→黑色化	EB346 (SB5)	F <sub>1</sub>
	15	赤褐色土器					褐 色	石英砂混	#	#		EB344 (SB5)	F <sub>1</sub>
	16	木製品	柵	長さ51・幅5.9								EB323 (SB5)	F <sub>1</sub>
第	17	土器	高台付坏	(156)					#		内面漆付着・黑色化	EB303 (SB6)	F <sub>1</sub>
	18			(224)	(61)	29	赤褐色	粗 砂 混	#	#	内外面漆著なロクロ痕	EB315 (SB5)	F <sub>1</sub>
	24			(226)			暗赤褐色	粗 砂 混	#		内外面漆著なロクロ痕	EB307 (SB6)	F <sub>1</sub>
	25			(146)			暗褐色	粗 砂 混	#		内外面漆著なロクロ痕	EB307 (SB6)	F <sub>1</sub>
	26			(136)			褐 色		#		内面スス付着 内面漆著なロクロ痕	EB244 (SB5)	F <sub>1</sub>
	27			(137)			褐 色	石英砂混	#		内面スス付着 内面漆著なロクロ痕	EB315 (SB5)	F <sub>1</sub>
	28			(146)			褐 色	石英砂混	#		内面スス付着	EB276 (SB5)	F <sub>1</sub>
	29			(227)			明褐色	粗 砂 混	#		外表面漆付着印跡・柵付着 内面ロクロ痕	EB190 (SB3)	F <sub>1</sub>
	30			(140)			白褐色	粗 砂 混	#		外表面漆付着印跡・柵付着 内面ロクロ痕	EB190 (SB3)	F <sub>1</sub>
	31			100.7							内面ロクロ痕 内面スス付着	EB267 (SB5)	F <sub>1</sub>

(1) 計測値( )内の数値は、図上復元又は現高である。

(2) 底部切り離しの記号は回転糸切り離し、ヘラ切は、回転ヘラ切り離しである。

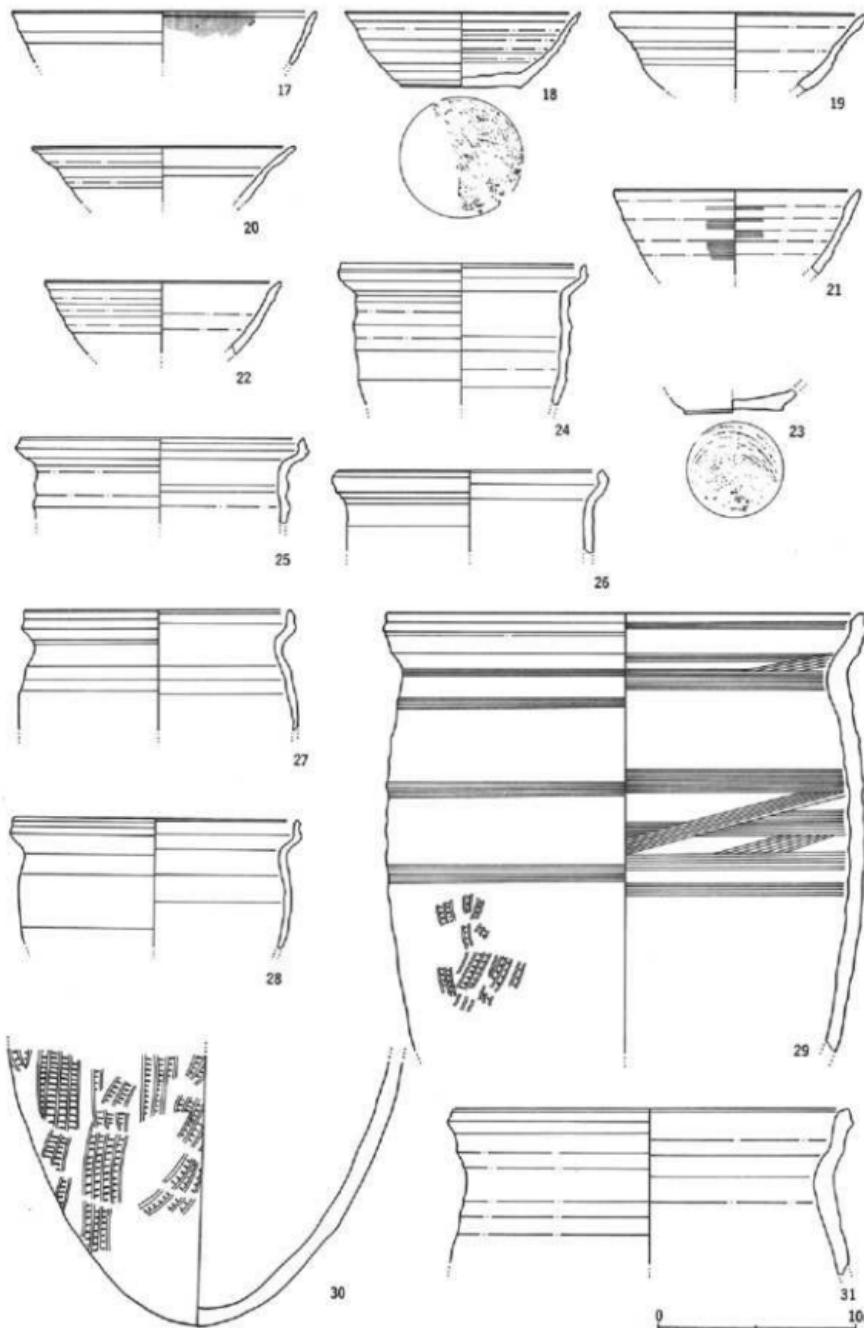
(3) 調整技法の黑色化は、内面を黒色処理を表わす。

出土土器は、本遺跡で検出された建物跡柱穴掘り方のなかで最多の出土量である。その内訳は、内黒土師器59片、黒色土師器2片、須恵器22片、赤焼土器946片の計1,029片の出土量である。その他本建物跡を巡る雨落ち溝としたS D290・297・301溝状遺構の覆土中より、内黒土師器・黒色土師器・須恵器・赤焼土器の破片が256片出土し、赤焼土器が大半を占める。内黒土師器ではE B315柱穴から第17図2とE B244柱穴から同図14が出土している。内面を簞ミガキ後炭素呼着による黒色化処理が施され、2は口縁部のみである。外面に漆が付着している。測図復元による口径は140%を測る。14は高台付壺である。底部の切り離しは回転糸切り手法による。内外面共に煤が付着している。黒色土師器は細片で測図出来るものはなかったため割愛する。須恵器では壺・甕片が出土している。壺片には測図されるものはない。甕は、第17図6・7が上げられる。大型の甕形土器で、6はE B304柱穴から出土し、外面に格子目状の叩き目、内面には簞状のアテ痕を明瞭にのこしている。7はE B246柱穴から出土している。外面に格子目状の叩き目、内面は同アテ痕が施される。胎土は緻密で、焼成は堅いが、7は胎土中に空気が混入し、焼成時で膨張し爆発している。赤焼土器では壺・甕等の器種がある。壺はE B246・315・275柱穴等から出土した。口唇部が大きく外反し、口径に比べて底径がやや小さい。底部切り離しはすべて回転糸切り離し技法で、器厚がうすい。器面に明瞭なロクロ痕をのこしている。歪つになるものが多い。甕形土器は、E B244・276・287・315柱穴から出土している。第18図24~28は小形の甕で、口縁部が「く」字状に外反し、口唇部がやや内湾するもの(26)と、直立するもの(27・28)がある。器面にロクロ痕を残し、器厚がうすい。第18図31はE B287柱穴から出土した大形の甕で、口縁部がわずかに外反し、口唇部が直立するものである。その他の柱穴からは、E B323柱穴から木製の櫛が出土した(第17図6)。現存長51%、同高さ30%で、身部は高さ12%，厚さ9%を測る。頂部は角を丸味をもたせ水平になる。櫛歯部は逆三角錐となり身部からすぼまるようにならびとなる。全体の色調は黒っぽいが、漆等の塗布はみられなかった。またE B251柱穴からは第41図374の砥石が出土した。長さ108%，幅34~57%，重量320gを測る大きな砥石である。

本建物跡の時期は、出土土器の検討により庄内地方の土器編年(註1)第IV期11世紀前半頃に比定される。

S B 6 建物跡はE区で検出された梁行2間、桁行7間の身舎に、北面と東面に庇ないし縁東をもつ大きな建物で、周囲にはS D231・229・240溝状遺構の雨落ち溝をもつ。

本建物跡の柱穴は、身舎北面桁行のE B336・353~359柱穴にかけての掘り方内精査と雨落ち溝の3条だけを精査し、他の柱穴は確認面での精査に終った建物跡である。しかしE B336柱穴とE B354柱穴には径30cm、長さ80cmの円柱が据えられ、他の柱穴の確認でも同



第18図 建物跡出土遺物 (2)

様なアカリ部を呈している。精査されたE B353柱穴の掘り方内には、第17図4・10・11の須恵器が出土した。4・11は壺形土器で口径部と底径が広く、器高が30%という底径に比して口径が大きく、器高が低いものである。底部の切り離しはヘラ切りで11の底部には墨書による「王」の字が書かれている。器面にはロクロ痕を明瞭に残し、器厚はやや厚く、焼成は堅い。色調は灰色を呈する。10は高台付壺である。底径に比して口径が小さく器高も高い。口唇部の器厚はうすく、底部から体部にかけては厚くなる。高台部は、壺底部の外側に布ナデ後付着させ、端部でやや外反する。胎土は粗砂を混入し、焼成は堅い。色調は暗赤褐色を呈する。

雨落ち溝としたS D229溝状遺構の覆土中からは須恵器壺・蓋・壺・赤焼土器壺・甕・壺が多量に出土し、重要遺物として取り上げたものだけでも24点を数える。壺は平底のものと高台付のものもあり、底部の切り離し技法はすべてヘラ切りによる。これらの土器については、溝状遺構の出土土器の項や、重要遺物の項で詳述しているが、重要遺物では須恵器の壺底部や体部、同蓋の内面等に墨書銘が書かれているものがある。墨書銘は「王」・「申」・「○？」である。「王」と書かれた土器については後節で述べている。S D240溝状遺構からも須恵器壺・蓋など20点の重要な遺物が出土している。S D231溝状遺構から重要遺物に上げられる土器片はみられなかった。

本建物跡の時期は、柱穴出土の須恵器や、雨落ち溝としたS D229・240溝状遺構の出土土器により、庄内地方の土器編年により第II期9世紀後半頃に比定される。

S B 7建物跡は、C区で検出された梁行2間以上、桁行4間の東西棟で6個の柱穴が確認された。しかしこれらの柱穴掘り方内からは出土遺物がみられず、その時期を検討するには難かしい。強いて建物の柱間距離や、推定規模、柱穴の大きさ等を勘案すれば、前述している建物群より更にその時期は新しいものと考えられ、周辺の遺構や上層より出土した土器などにより、平安時代11世紀前半頃に推測される。

## 2 大溝・矢板列出土の遺物 (第19・27・28・40図, 表2, 図版41・42)

G区の中央やや北西寄りには、SB5・SB6建物跡を取り囲むようにSD42大溝とSA41矢板列が走る。SA41矢板列はG区の南西隅で南東方向に屈折しており、またG区の南東部にもさらに遺構の存在が予測されることから両遺構は団続施設の一部と考えられる。

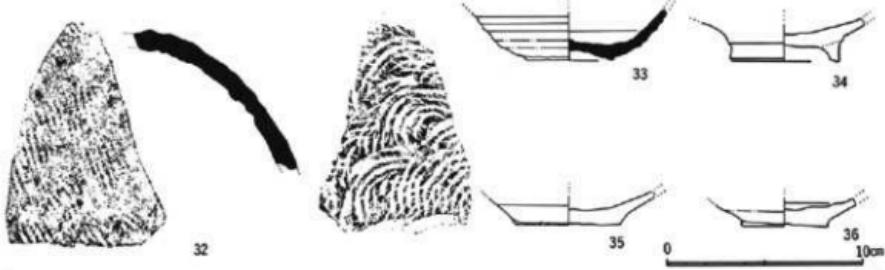
このうちSD42大溝の覆土は2層に分けられ、両層中から土師器106片、須恵器79片、赤焼土器964片、木製品20点、種子類2点の計1,183点の遺物が出土している。土師器の器種は、内面ないし内外面に黒色化処理が施されている壺類のみである(第27図133~136)。いずれも底部に軽い高台が付く。須恵器は、壺・高台付壺・壺の器種がある。壺類はすべて底部の切り離しが回転糸切りによるもの(第27図141・第28図156), 壺類も同様である(第27図139・140)。赤焼土器は、壺・甕などの器種がある。壺は平底無調整で、底部の切り離しは回転糸切りである(第27図147・148・153・154, 第28図160・161)。

これらの土器群は、全体として庄内地方の平安時代土器編年(註1)の第VI期に比定されるもので、時期は11世紀前半頃と推定される。このほかSD42大溝の覆土1層からは、花文字瓦(第41図355)が1点出土している。

SA41矢板列の覆土は濁青灰色シルトの単一層である。覆土中からは土師器8片、須恵

表-2 矢板列出土遺物観察表

件目	遺物番号	器種	寸法( cm/m )			色調	胎土	焼成	表面	測定法・備考	出土地点・層位
			口	底	高						
第II 系	19	壺	(132)		(40)	灰赤褐色	粗砂質	良		内面えぐ付蓋 内外面繊維質なロクロ質	SH41 F1
	20		(137)		(29)	赤褐色	粗砂質	好		外面部繊維質なロクロ質	
	17		(127)		(44)	灰赤褐色	粗	良		内外面繊維質なロクロ質	
	21		(121)		(38)	暗赤褐色	粗	密		内外面繊維質なロクロ質	
	22				50	灰赤褐色	石英質	好	圓角		
	23										
第III 系	32	甕					粗砂質	好		外面部繊維質なロクロ質	F2
	33				26	(45)	明灰色	粗砂質	圓角	内面青釉放文	
	34	高台付壺			54		明褐色	白質	粗砂質	×	手切り後布ナデ
	35				54			粗砂質	×	×	
	36	壺			44		暗赤褐色	石英質	×	×	



第19図 SA41矢板列出土遺物

器10片、赤焼土器96片の計114片の土器が出土している。土師器は細片であるが、内面黒色化処理された高台付坏が認められる。須恵器は坏(第19図33)・臺(同図28)の器種があり、坏の底部切り離しは回転糸切りである。赤焼土器は坏類(同図34~36)・臺などの器種がある。時期はS D42大溝と同じく、11世紀前半頃と推定される。

註1 安部 実他「新青波遺跡第1次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第67集 1983年

### 3 井戸跡出土の遺物(第20図、表3、図版34)

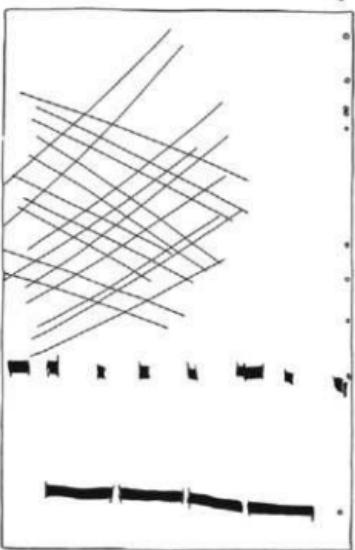
本井戸跡の掘り方埋土は5層に分けられ、井戸内は3層に分けられる。土器のほとんどは掘り方埋土①・②層より出土している。木製品は井戸内覆土のF 3層中から出土している。曲物は井戸底面に据えられているもので井戸眼として地下水の涌水を集めたものと考えられる。第20図37は、内面をヘラミガキ後炭素吸着による黒色化処理された内黒土師器で①層からの出土である。器種は高台付坏で底部の切り離しは回転糸切りである。高台部は低く、器外面は布ナデによる調整が施されている。器肉は厚く、胎土に細砂を混入させ、焼成は良好である。31は須恵器の大型壺形土器肩部である。外面に条線状の叩き痕、内面に青海波のアテ痕をのこす。外面には灰かぶりによる自然釉となっている。器肉は15%と厚く、胎土は緻密で焼成は堅い。色調は灰色を呈する。39は須恵器高台付坏の底部である。底部は糸切り離し後布ナデされ、高台が付けられたものと思われる。器肉は厚く、胎土は緻密で焼成は堅い。色調は灰色を呈する。40~44は赤焼土器の坏・堀(44)である。坏は、体部がやや丸味をもつものと(40~42)、直立するもの(43)がある。また40・43は器形が歪つである。器面には明瞭なロクロ痕をのこし、40の体部には「万」カの墨書き文字が描かれている。44は復元口径412%を測る堀形土器である。内外面横位のハケ目が上半部に

表-3 井戸跡出土遺物観察表

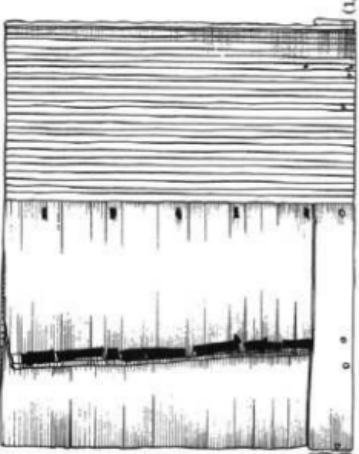
番号	遺物名	器種	寸法(直径/高さ/厚さ)			色調	胎土	焼成	透切	断面	調査技法・備考	出土地点・層位
			外	内	壁							
37	土器	高台付坏	142	65	57	灰赤褐色	粗砂質	良	圓	直	クロ板・外表面ナデ 内面ヘラミガキ→黒色化	SE10 I
	38	堀				灰色	繊維質	+			外表面漆抜タタキ・白灰無 内面青白無文	
	39	高台付坏		80		灰色	繊維質	+	ヘラ切			
	40		130	59	46	赤褐色	粗砂質	+	III	直	墨書き「右」+	
41		坏	(146)	53	52	灰赤褐色	繊維質	+	+		内外面ロクロ板	III
	42		(160)	54	55	灰赤褐色	繊維質	+	+		内外面ロクロ板	
	43		128	52	48	赤褐色	石英質	+	圓	直	内外面ロクロ板	
	44		(412)			赤褐色	粗砂質	+			外表面ハゲ目・タネ目 内表面ハゲ目	
45		木製品	長さ282・巾6・厚7									F <sub>2</sub>
	46		長さ286・巾6・厚7									
	47		長さ195・巾5									
	48		曲物 長さ359・径4,400									

第20図 井戸出土遺物

48

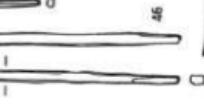


(1/6)

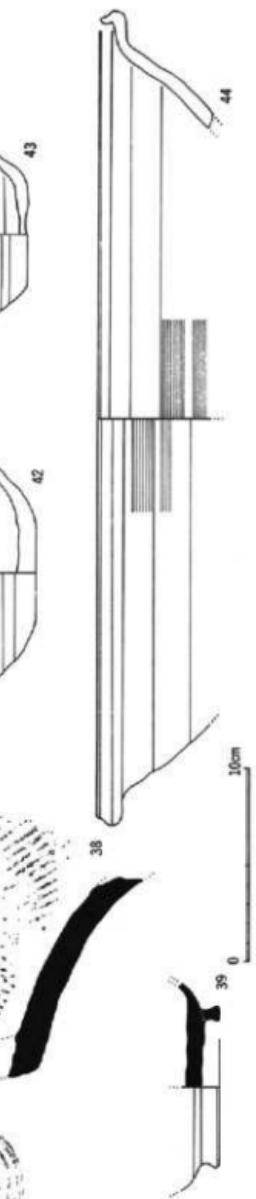


(1/6)

47



46



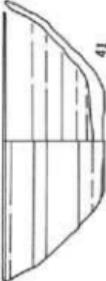
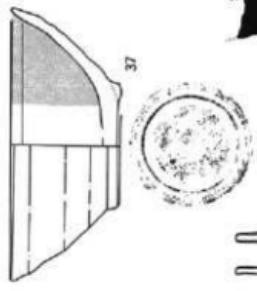
39



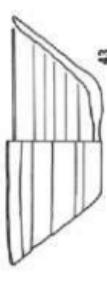
38



37



41



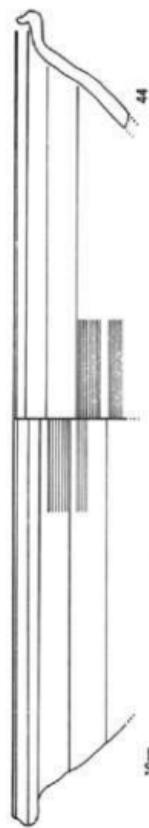
43



40



42



44

施され、下半に条線上の叩き目がわずかにのこる。口縁部は大きく外反し、口唇部で急激に内湾する。器肉は厚く、胎土に粗砂を混入し焼成は良好である。器外面には煤が付着している。

45~48は木製品である。45~47は箸状の加工木である。柾目の板を縦に割り、全面に鋭利な工具によるケズリ痕を残し、両先端は尖らすようにケズられている。48は曲物である。高さ359%，径440%で、厚さ5%の板を一回転させ先端を桜の皮で留めている。曲物下端には幅40%，厚さ5%の板をたがとして曲されている。

本井戸跡の時期は山上土器により庄内地方土器編年の第V期10世紀後葉頃に比定出来る。

#### 4 土壤出土の遺物（第20~25図、図版35~39）

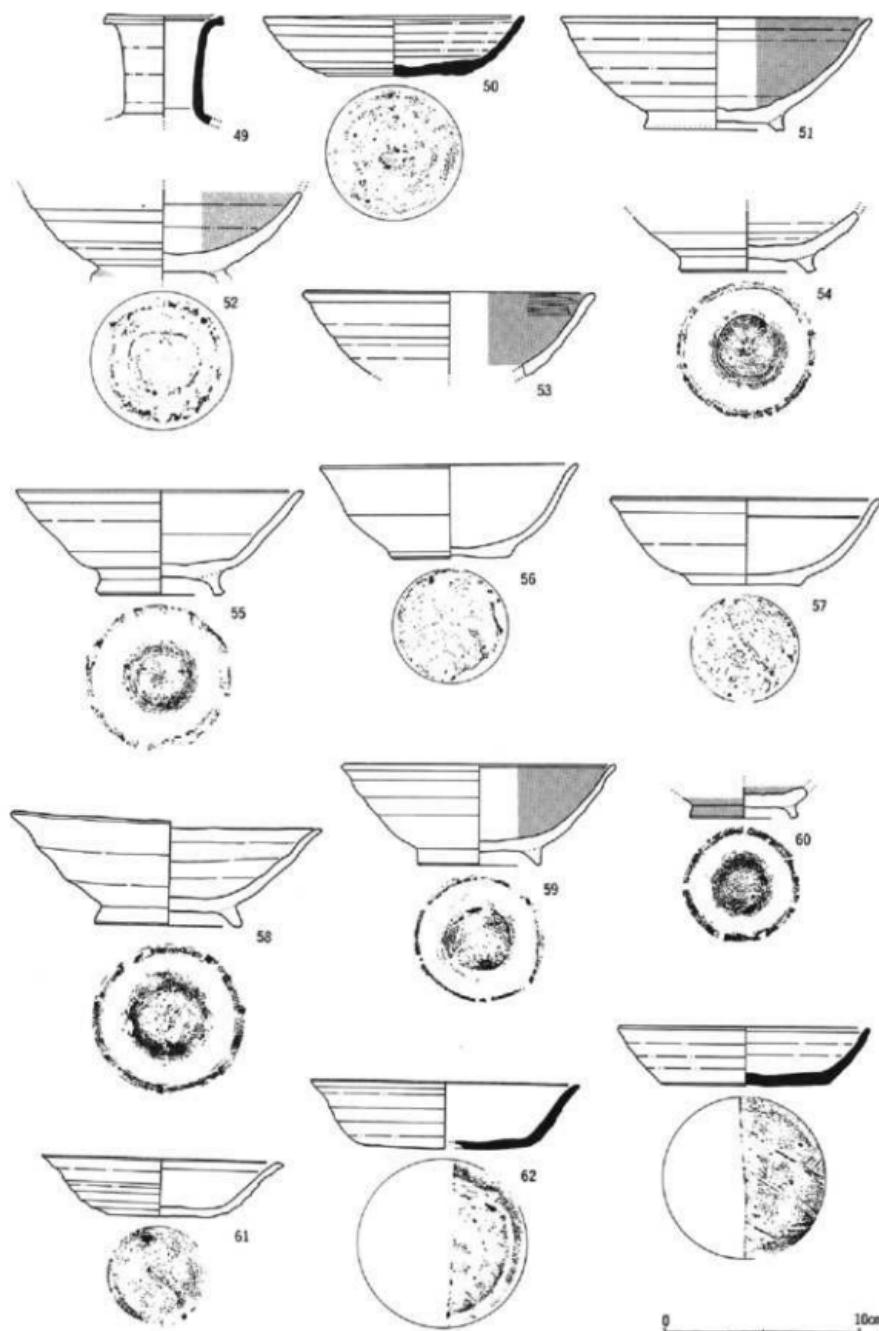
本遺跡で検出された遺構台帳に登録記載され、精査が行なわれた土壤だけで47基を数える。これら精査された土壤からは土器片を中心として、木製品や木片、石製品、炭、植物の種子等が出土している。木製品のそのほとんどは自然木であるが、なかには加工された板や棒状の木製品がある。なかでもSK230土壤の覆土中には、神社等の屋根を葺く際に使用される木端材が充満して出土している。古代の建築物に使われる材料と考えるが、土壤内に充満していることに疑問が残る。今後の資料増加を待ちたい。

前章5節では、本遺跡で検出された47基を平面形や、断面形でA~E類に類別し、それぞれの類の特徴を記述している。本項では、A~E類に分けられた特徴ある土壤のうち、顕著に時期的特徴を示すものをとり上げ、図示したものを記述するものである。土壤はA・G区に多く検出されている。その他の調査区からも検出されてはいるが、調査区自体大きく拡張していないため少ない検出例である。しかしC区とE区には、その時期を明確に示される土器の出土もあり、類別された形状に当てはまる土壤がある。

47基の土壤覆土中からは総計2,668片の土器が出土している。その内訳は、内面を炭素吸着による内黒土師器148片、内外面を炭素吸着による黒色土師器、須恵器289片、赤焼土器222片である。総じて赤焼土器が全体の83%をこえる出土量である。

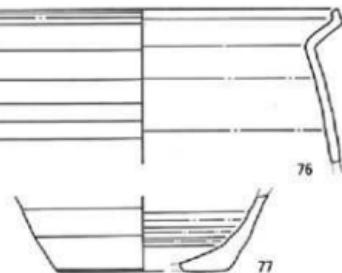
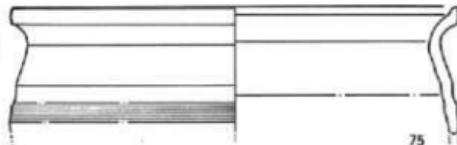
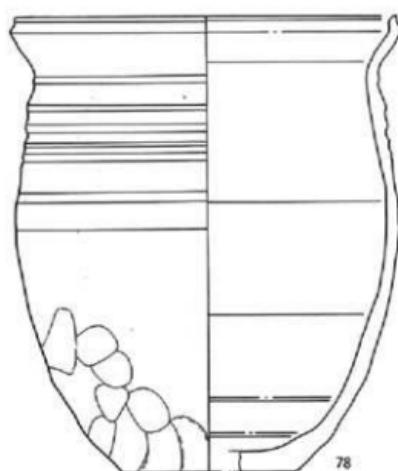
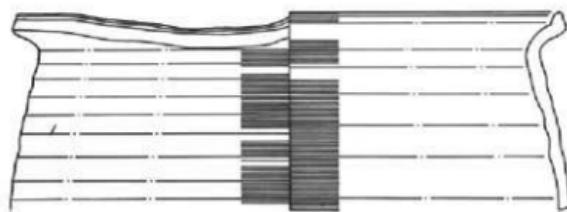
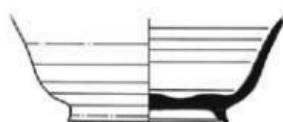
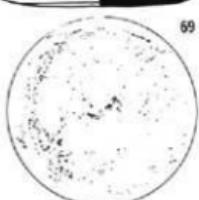
類別毎に記述するが、図に示した遺物は遺構番号の若い順に示しているため必ずしも類別毎の遺物とはかぎらない。また土器の時期は庄内地方平安時代土器編年図（註1）をもとに推測した。

A類の土壤は、平面形が円形を呈し、断面形が円筒状、丸底状、皿状となる3つの形状を示すものを類としたものである。平面の径は、100~150cm前後のものと、300cm前後を測るものがあるが、確認された形状が円であることで同じ類に入れ、断面形の違いで更にa（円筒状）、b（丸底状）、c（皿状）とに細分した。A-a類とした断面形が同筒状を呈



第21図 土壌出土遺物 (1)

0 10cm



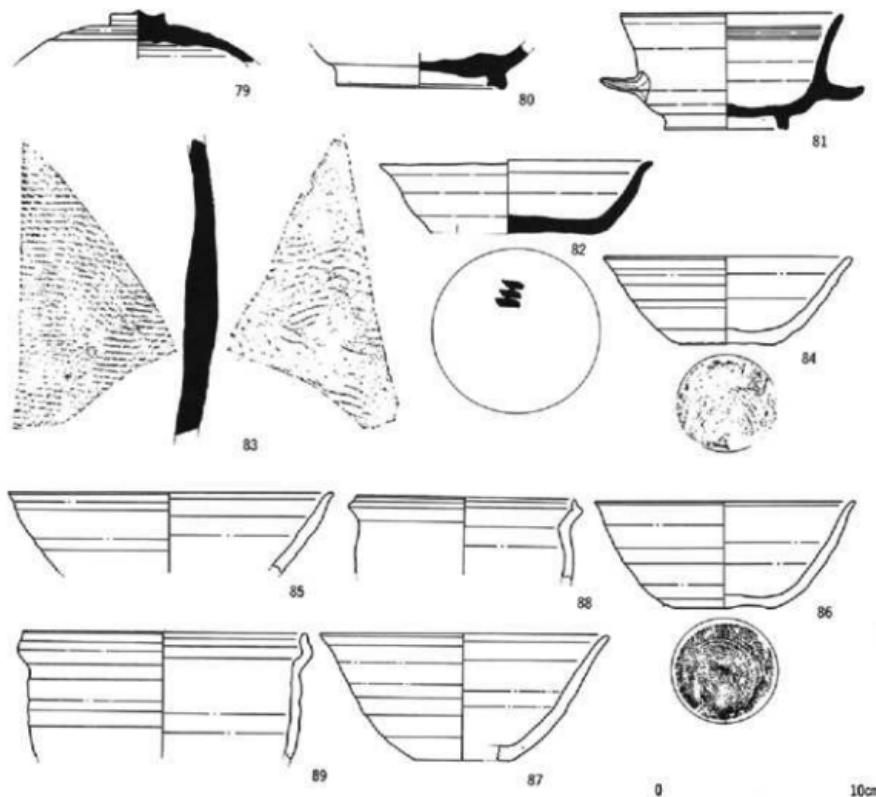
0 10cm

第22図 土壤出土遺物 (2)

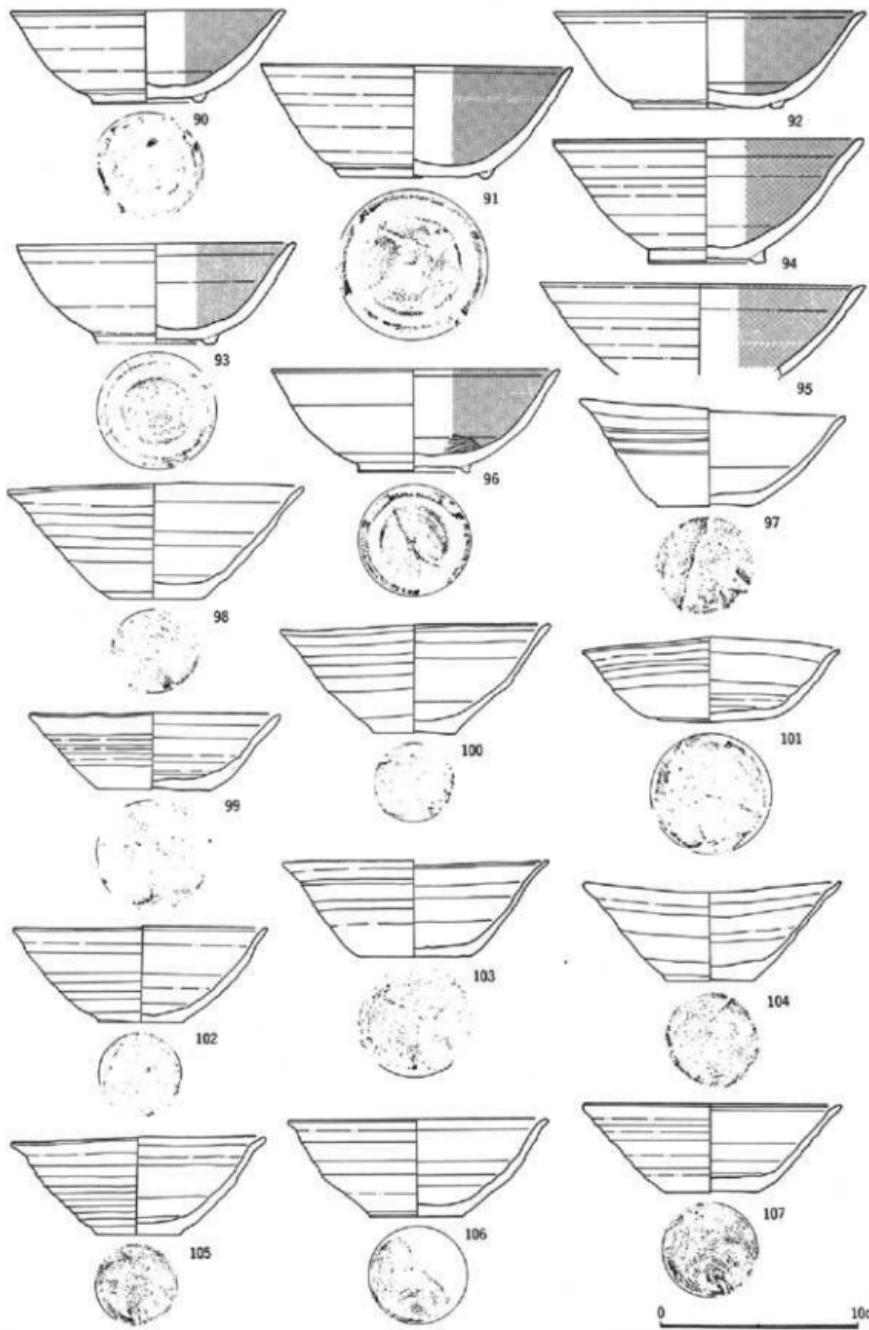
表一4 土壤出土遺物觀察表 (1)

探因	遺物 番号	器 種	計測値(cm/m)			色調	胎 土	焼成	断 面	調査技 法・備 考	出土地点・層位		
			口径	底径	厚高								
第1群	49	須恵器	蓋	58			砂 混	良		ロクロ窓・布カブリ	SK39	F <sub>1</sub>	
	50		坏	134	70	31	灰 色	粗 密	#	ヘラ切			
	51	高台付坏		160	(70)	58			#	内面ミガキ→黒色化 外面部ロクロ窓	SK43	F <sub>1</sub>	
	52			144	65	42	暗 褐色	粗 密	#	回 余			
	53			(150)		43	灰 褐色	粗 砂混	#	内面ヘラ削り→黒色化 外面部ロクロ窓			
	54				67	(32)	暗 褐色	粗 砂混	#	回 余			
	55			(146)	65	44	灰 褐色	石英砂混	#	#			
	56	赤燒土器		(130)	59	49	灰 褐色	石英砂混	#	#	SK44	F <sub>1</sub>	
	57			(136)	55	45	明 茶色	粗 砂混	#	#			
	58			160	76	53~58	赤 褐色		#	ヘラ切			
	59			140	62	52	赤 褐色	粗 砂混	#				
第2群	60	土器			54		黑 色	粗 砂混	#	回 余	黒色化・内面2次焼成	SK74	F <sub>1</sub>
	61			124	50	29	赤 褐色	粗 砂混	#	#	スズ付管 外面部ロクロ窓		
	62			137	88	34	灰 色	疏 密	#	ヘラ切	外面部管状ロクロ窓		
	63	高台付坏		128	84	30		石英砂混	#	#	外面部ロクロ窓		
	64			134	80	35	暗 灰色	粗 砂混	#	#	外面部ロクロ窓	SK75	F <sub>1</sub>
	65			130	87	34	明 灰色	粗 砂混	#	#	外面部ロクロ窓		
	66			133	83	35	灰 色	疏 密	#	#			
	67			80	(47)	暗 灰色	砂 粒混		#	外面部ロクロ窓	SK77	F <sub>1</sub>	
第3群	68	坏		113	67	48	灰 色	疏 密	#	#	外面部ロクロ窓	SK75	F <sub>1</sub>
	69			138	80	40	灰 白色	石英砂混	#	#	外面部ロクロ窓		
	70		蓋	149		25	暗 灰色	疏 密	#		外面部ロクロ窓		
	71	高台付坏			82	(55)	暗 灰色	粗 砂混	#	ヘラ切	外面部ロクロ窓	SK75	F <sub>1</sub>
	72			105	62	54	灰 色	粗 砂混	#	#	外面部ロクロ窓		
	73			136	80	34	灰 白色	粗 砂混	#	#	外面部ロクロ窓		
第4群	74	甕		(280)		102	褐 色	粗 砂混	#		ロクロによるハケ目	SK74	F <sub>1</sub>
	75			230		(65)	褐 色	石英 砂混	#		外面部ロクロ窓		
	76			(202)		(36)	赤 褐色	粗 砂混	#	回 余	外面部ロクロ窓		
	77			195		(90)	白 褐色	粗 砂混	#		外面部管		
第5群	79	須恵器	蓋				灰 色	疏 密	#		外面部ロクロ窓	SK230	F <sub>1</sub>
	80		蓋		86		明 灰色	疏 密	#	ヘラ切	内面部粗 粒混		
	81		双耳坏	(114)	62	60	暗 灰色	石英 砂混	#	#	外面部自然縫・高台付 内面部ロクロ窓		
	82		坏	(137)	85	37	白 灰色	石英 砂混	#	#	底部墨書「王」		
	83	赤燒土器	蓋				暗 灰色	石英 砂混	#		外面部条状叩き 内面部叩き	SK156	F <sub>1</sub>
	84			(127)	47	45	褐 色	石英 砂混	#	回 余	外面部ロクロ窓		
	85			(167)		(42)	赤 褐色	石英 砂混	#		外面部ロクロ窓		
	86			133	59	55	赤 褐色	粗 砂混	#	回 余	外面部朱塗布	SK215	F <sub>1</sub>

する土壤はA区のSK39・156土壤がある。SK39土壤からは第21図49・50の須恵器が出土している。49は小形の長頸部で、器面にロクロ痕を残し、灰かぶりによる自然釉が付着している。50は口径に比して底径が大きく、器高もひくい。底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。SK156土壤からは、第23図83の壺形土器片が出土している。外面を溝幅の小さい条線状の叩き、内面には条線の雜なあて痕を残している。A区で本類に入る土壤はSK57・86土壤などが皿状を呈するA-C類としてあげられる。G区では丸底状を呈するA-b類としたSK43土壤がある。本土壤からは、多量の土器が出土しており、そのうち7点(第21図51~57)を図示した。51・53は内黒土師器で、底部に低い高台が付くものである。器内面にヘラミガキ痕を明瞭に残し、底部はヘラ切り離しによる。52・54~57は、赤焼土器である。器外面に煤が付着しているものもある。器形は内黒土師器と類似している。G区



第23図 土壤出土遺物 (3)



第24図 土壌出土遺物（4）

ではその他この類としてc類に上げた皿状を呈するSK288・299土壙がある。E区からはb類とした平面形の大きな土壙が検出されている(SK230)。覆土中からは神社を基く際の木端と共に第23図79～82の須恵器が出土している。79は宝珠状の紐部をもつ蓋で、体部部分が丸味をもつ。80は壺形土器の底部で、底部の切り離しは糸切りである。81は双耳坏である。高台をもち、急激に口縁部へ立ち上がり、体部下半に耳を付けている。体部外面は灰かぶりによる自然釉が付着している。本類の時期は9世紀後半頃に比定される。

B類の土壙は、不整梢円形を呈し、断面形が丸味をもつ土壙を類としたが、覆土があさく、出土遺物が少ない。SK36・152土壙等があげられる。SK152土壙からは赤焼土器坏、甕が出土したが、紙面の関係から割愛した。本類の時期は、10世紀末葉と推定される。

c類の土壙は、梢円形を呈し、断面形が皿状(a)、丸底状(b)、円錐状(c)を呈す。A区からは、C—a類としたSK74土壙がある。覆土中からは多量の土器が出土しており、第21図62・63、第22図64～67・74の土器を図示した。62～66は須恵器坏で、器面にロクロ痕を残すものが多い。また器形が歪な64・66がある。底部の切り離しはすべてヘラ切り離技法による。時期は10世紀後葉に比定される。A—b類に類別されるSK77土壙もA区で検出されている。第22図78は赤焼土器壺形土器のほぼ完形になるものである。体部に明瞭なロクロ痕を残し、底部の切り離しは不明である。器形は胴部中央部がやや丸味をもって膨らみ、口縁部が「く」字状に外反し、口唇部で直立する。時期は10世紀末葉と推測される。C区ではSK221土壙がC—a類となる。覆土からの出土で、第23図84・85・88・89の土器片が図示される。すべて赤焼土器で、84・85は坏形土器である。器面にロクロ痕をのこし、底部の切り離しは84が糸切りで、85は口縁部破片のため不明である。88・89は小形の壺形土器で、口縁部だけの破片である。口縁でやや外反し、口唇部で大きく内湾する。口径が110%、154%と小さく、内外面ともロクロ整形痕が明瞭に残っている。刷毛目やヘラミガキなどの再調整は認められない。時期は11世紀前半頃に比定される。G区ではC—a類に入るものが1基、(SK291土壙)、C—b類が1基(SK287土壙)、C—c類が2基(SK261・262)存在する。このなかでもC—c類としたSK262土壙からは第24図に図示したものと、第25図の109・116・122の3点をのぞいたほかは、本土より集中して出土したものである。器種別にすれば、内面を黒色化処理された内黒土師器が7点、須恵器1点、赤焼土器24点である。内黒土師器は、口径に比して器高がひくく、底部をのこしているものはすべて底い高台をもつものである。体部はやや丸味をもしながら外反する。内面を範ミガキ後黒色化処理され、底部の切り離しはヘラ切りの91・92・94で、他は回転糸切り離しによる。須恵器の壺形土器底部片である。体部にロクロ痕を残し、底部はヘラ切り離しである。器肉は厚く、焼成は堅い。赤焼土器は、すべて坏形土器である。底径に比して口径が

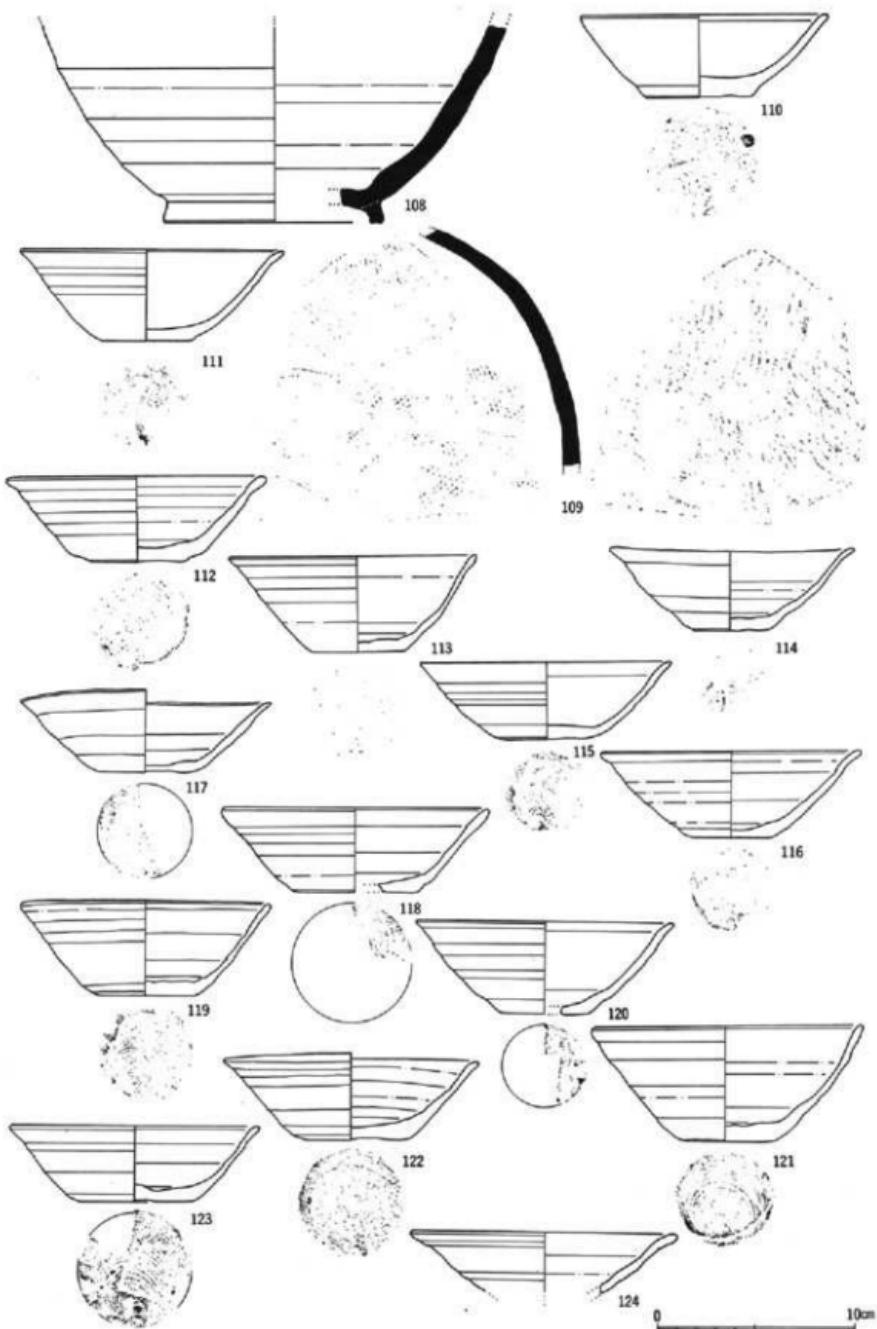
表-5 土壤出土遺物観察表(2)

探区	遺物番号	器種	計測値(m/m)			色調	鉛土	焼成	破切	部屋	調査技法・備考	出土地点・層位	
			口徑	底径	高さ								
第23 国	87	赤燒土器	环	(147)	(50)	65	赤褐色	粗砂混	良	圓切	内外面ロクロ窓	SK123	F <sub>2</sub>
	88			(110)			茶褐色	粗砂混	#		内外面縦封着	SK221	F <sub>1</sub>
	89			(154)			赤褐色	石英砂混	#		内外面ロクロ窓		
第9 国	90	内黒土器	高台付环	146	55	48	黄褐色	粗砂混	#	圓角	内面ミガキ→黒色化	SK262	
	91			160	75	58	白褐色	粗砂混	#	△切?	内面ミガキ→黒色化		
	92			(160)	(75)	50	白褐色	粗砂混	#	△ラ切	内面ミガキ→黒色化		
	93			142	59	51	白灰燒	粗砂粒混	#	圓角	内面ミガキ→黒色化		
	94			(156)	60	64	褐色	粗砂混	#	△ラ切	内面ミガキ→黒色化		
	95		高台付环	(164)		47	褐色	粗砂混	#		内面ミガキ→黒色化	SK265	
	96			(154)	57	53	黄褐色	鐵密	#	圓角	内面ミガキ→黒色化		
第24 国	97	赤燒土器	环	136	50	56	赤褐色	粗砂混	#	#	内外面ロクロ窓	SK262	
	98			151	45	60	赤褐色	粗砂混	#	#	内外面ロクロ窓		
	99			129	60	40	赤褐色	沙粒混	#	#	内外面ロクロ窓		
	100			138	42	53~57	赤褐色	石英砂混	#	#	内外面ロクロ窓		
	101			122	61	44	赤褐色	粗砂混	#	#	内外面ロクロ窓		
	102			132	43	51	赤褐色	砂粒混	#	#	内外面ロクロ窓		
	103			135	58	50	赤褐色	粗砂混	#		内外面ロクロ窓		
	104			132	47	51	赤褐色	粗砂混	#	圓角	内外面ロクロ窓		
	105			130	43	51	赤褐色	粗砂混	#	#	内外面ロクロ窓		
	106			134	48	50	赤褐色	粗砂混	#	#	内外面ロクロ窓		
	107			131	48	46	赤褐色	石英砂混	#	#	内外面ロクロ窓		
第25 国	108	須恵器	壺	(114)	(104)	暗灰色			#	△ラ切			
	109					男灰色	小礫砂混	密	#		体部タテキ・あて抜	SK263	
	110	赤燒土器	环	125	54	43	赤褐色	粗砂混	#	圓角		SK262	
	111			134	49	47	赤褐色	粗砂混	#	#	内外面ロクロ窓		
	112			132	52	44	赤褐色	粗砂混	#	#	内外面ロクロ窓		
	113			125	49	50	赤褐色	石英砂混	#	#	内外面ロクロ窓		
	114			126	40	43	赤褐色	鐵密	#	#	内外面ロクロ窓		
	115			(128)	48	40	赤褐色	鐵砂	#	#	内外面ロクロ窓		
	116			134	43	45	灰赤褐色	鐵密	#	#	内外面ロクロ窓	SK269	
	117			127	50	43	赤褐色	石英砂混	#	#	内外面ロクロ窓	SK262	
	118			138	62	44	赤褐色	粗砂混	#	#	内外面ロクロ窓		
	119			128	48	49	灰赤褐色	石英砂混	#	#	内外面ロクロ窓		
	120			(131)	(44)	48		石英砂混	#	#	内外面ロクロ窓		
	121			140	48	50	赤褐色	粗砂混	#	#	内外面ロクロ窓		
	122			130	53	45	灰赤褐色	粗砂混	#	#	内外面ロクロ窓	SK269	
	123			134	58	40	赤褐色	粗砂混	#	#	内外面ロクロ窓	SK262	
	124			139		(31)	赤褐色	粗砂混	#		内外面ロクロ窓		

大きく、底部からの立ち上がりが大きく外反するもの（第24図100・104・第25図114・116・120・124）や、やや丸味をもちながら立ち上がる第24図102・105・106第25図113・121がある。器内外面に明瞭なロクロ痕をのこし、歪な器形のものが多い。本類の時期は平安時代10世紀後葉と推測される。

D類の土壙は、不整長楕円形を呈し、断面形が丸底状となるものである。A区ではSK75土壙がこの類となる。覆土中からは、第22図68・73・75～77の土器が出土している。68・70～73はすべて須恵器である。68・71・72は高台付坏で、ロクロ痕を明瞭にのこし、底部はヘラ切りによる切り離し技法を用い、高台と底部には布ナデ整形が施されている。坏部底面は平坦ではない。68は器肉がうすく、底部から体部にかけてやや丸味をもちながら立ち上がる。71は体部から口縁にかけてやや外反する。器内はうすい。72は体部で直立するように立ち上がり、器肉は68・71に比してやや厚い。口唇部を布ナデ調整されている。73は坏形土器である。底径に対して口径が小さく、器高も低い。底部はヘラ切りによる切り離し技法で、器内外面にロクロ痕を明瞭にのこす。器肉は厚く、底部内面中部が最大厚を測る。70は蓋である。天井部が平坦になり、口唇部が大きく外反し、さらに端部へ垂直にまがる。鉢部は、径26%・高さ7%を測り、中心部がわずかにもりあがる。胎土は緻密で焼成は良好である。75～77は赤焼土器壺である。口縁部が「く」字状に外反し、75は口唇部で立ち上がり、76はさらに「く」字状に内傾する。口縁部から胴部にかけてはハの字状に広がり、胴中位で最大径をもつものと考えられる。77は同底部である。底部の切り離しは糸切り痕をわずかにのこしている。ロクロ痕を明瞭にのこしている。本土壙の時期は、編年表の第V期10世紀末葉に比定される。G区ではSK44土壙がこの類に入る。覆土中からは第21図58～61の土器が出土している。58は赤焼土器高台坏である。胎土・焼成共に不明で、器形も歪である。底部の切り離しは不明であるが、布ナデによる調整が施されている。器内外面にロクロ痕をのこす。59は内黒土師器である。底部は糸切り離し後高台を付けているが、難な付け方である。高台部には指頭痕が残る。60は黒色土師器の底部である。底部の切り離しは糸切りである。61は赤焼土器坏である。底部からゆるやかな立ち上がり、口唇部で大きく外反する。器内外面に明瞭なロクロ痕を残す。本土壙の時期は編年表第四期11世紀前半と考える。

E類は隅丸方形を呈し、断面形が皿状となすもので、A区からSK40・215土壙がこの類に入る。SK40土壙からは出土遺物はみられなかった。SK215土壙からは9片の土器片が出土しており、測図に堪えた土器が第23図86の赤焼土器坏である。器形は丸味をもちながら立ち上がり、口唇部でわずかに外反する。底部は糸切り離しで、器内外面にロクロ痕をのこす。時期は編年表第IV期10世紀中葉と考えられる。



第25図 土壤出土遺物 (5)

### その他の遺構出土遺物（第26図、図版40）

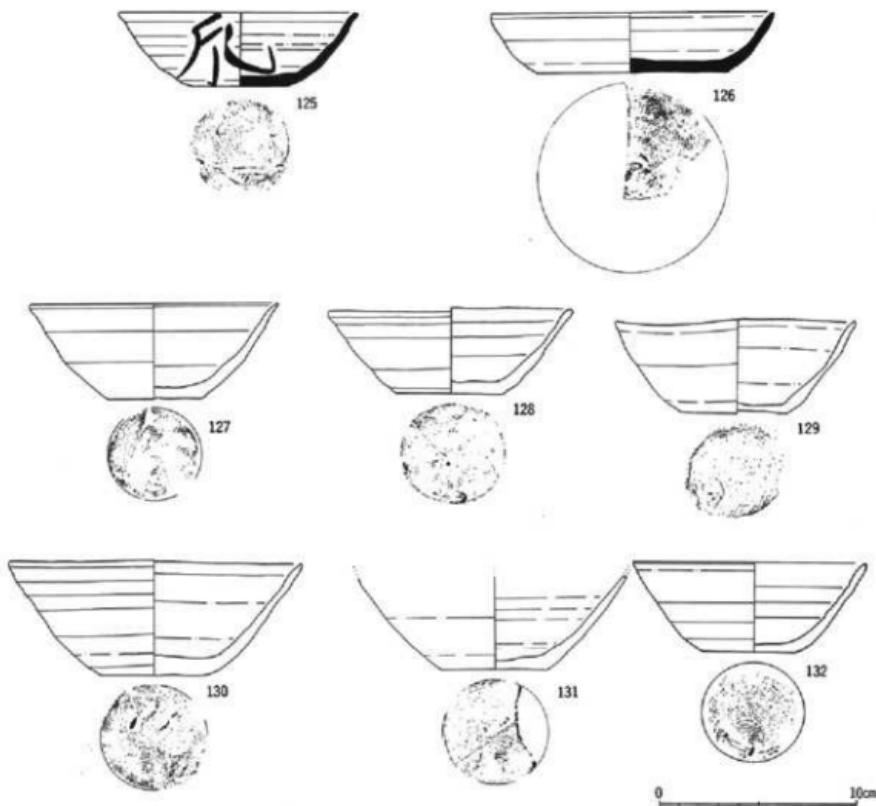
A区西方80mの地点で、現排水溝と併列するように設置される排水溝部分で確認された落ち込みがS X 60遺構である。検出された遺構は、矢板列をもつ溝状遺構と性格不明の落ち込みである。第26図に図示した土器は、そのなかの性格不明の落ち込みとした部分から出土したものである。土壤として登録されてもよかつたが、覆土や壁面が非常に複雑なことや、覆土中に木葉等の有機質物が多く混在し、性格がつかめなかつたものである。その中で出土遺物は216点を数え、その内訳は、内黒土師器4片、須恵器32片、赤焼土器170片、木片10点である。その中で測図に堪える土器を示した。

125は須恵器壺形土器である。底部から口縁にかけて丸味をもちながらゆるやかに立ち上がる。底部は回転糸切り離し技法で、器内外面に明瞭なロクロ痕を残す。口唇部内側には布ナデ痕がみえる。器外面体部には「爪」の墨書痕が読みとれる。127～132は赤焼土器壺である。129・130は覆土1層から出土した。129は底部が糸切りで、底部から急激に立ち上がる。器肉は体部中央でうすくなり、ロクロ痕をのこす。全体的に歪である。130は、底部が糸切り離しされ、底部から口縁にかけて丸味をもちながら立ち上がる。底径に対して器高が高い。器内外面もロクロ痕が明瞭である。やや歪である。127・131・132はF2層中より出土した壺である。底部は糸切り離し、底部から口縁までゆるやかに立ち上がり、体中下半でやや丸味をもつ。底径に比して器高が高い。131は底部からハの字状に立ち上がり、器面にロクロ痕が明瞭に残す。器肉はうすく、焼成はあまり。132は底部を糸切り離され、底部からハの字状に立ち上がる。胎土・焼成共に良好である。128は全体的に歪な器形を呈する。他と同様底部は糸切り離し技法で、器面にロクロ痕をのこす。

本遺構の時期は、庄内地方平安時代土器編年により11世紀前半と推測される。

第26図126は須恵器の壺である。出土地点は本遺跡南東部H区で確認されたS G 65河跡F2層中より検出されたものである。

器形は底径に比して口径が小さく、器高に低い。器面にロクロ痕をみせ、底部は回転ヘラ切り離し技法である。器肉は厚く、内面底部中心部が最厚部となる。本土器の時期は、10世紀後半と考えられる。



第26図 S X60遺構出土遺物

表一-6 SX60遺構出土遺物観察表

種別	器物番号	器 物	寸法(φ mm)			色 調	胎 土	燒成	剥 落	調査技法・備考	出土地点・層位
			口 径	深 度	底 直 径						
第	125	環 壺	(124)	50	36	暗灰色	緻 密	良	粗 砂	外圓墨書「系」△	SX60
	126		(146)	38	21	灰 色	緻 密	#	~ハラ切	内外面墨ロクロ紙	SG65
26	127		(126)	47	49	赤褐色	石英砂混	#	圓 扁	内外圓ロクロ紙	SX60 F <sub>2</sub>
	128		(126)	54	42~44	褐 色	石英砂混	#	#	指紋あり	F <sub>2</sub>
回	129		(123)	52	45	赤褐色	石英砂混	#	#	全體的にゆがみあり	F <sub>1</sub>
	130		(151)	54	57	赤褐色	石英砂混	#	#	内外圓ロクロ紙	#
131			(54)	(48)	赤褐色	石英砂混	#	#	底部に難割あり	F <sub>2</sub>	
	132		119	48	46	赤褐色	粗 砂 混	#	#	内外圓ロクロ紙	#

## 5 溝状遺構出土の遺物（第27～35図、表5、図版41～51）

溝状遺構について前章では、遺構の形態や埋土などから幾つかの類型分類を行った。これらの分類はある程度遺構の性格や時期をも反映している。ここでは溝状遺構から出土した遺物について各類毎に記述し、あわせて遺構の時期について推察する。

A類は、遺構を群として区画するような溝状遺構で、先述したG区のS D42大溝の他にA'区のS D70溝状遺構がこれにあたる。

**S D 70溝状遺構**（第27・28図、図版41・42） 覆土は暗褐色粘質土の單一層で、土師器50片、須恵器270片、赤焼土器1,468片の土器片が出土している。このほか木片60片、種子4点などの遺物も発見された。土師器の器種は、内面に黒色化処理が施されている壺類のみである。すべて小片で図示し得るものはないが、底部は平底のものと軽い高台が付くものがある。須恵器は、壺・高台付壺・壺などの器種がある。壺類は口径に比して底径が小さく、体部がやや緩やかに立上るものである。底部の切り離しは回転糸切りを主体とする（第27図142・143、第28図157）が、1点ヘラ切りのもの（第28図155）もみられる。壺は口縁端が直角に張り出するもの（第28図163）がある。赤焼土器は、壺・甕などの器種がある。壺は平底無調整で、底部の切り離しはすべて回転糸切りによる（第27図146・150・152、第28図159）。底径に比して口径が小さく、口縁部の反りが弱い。

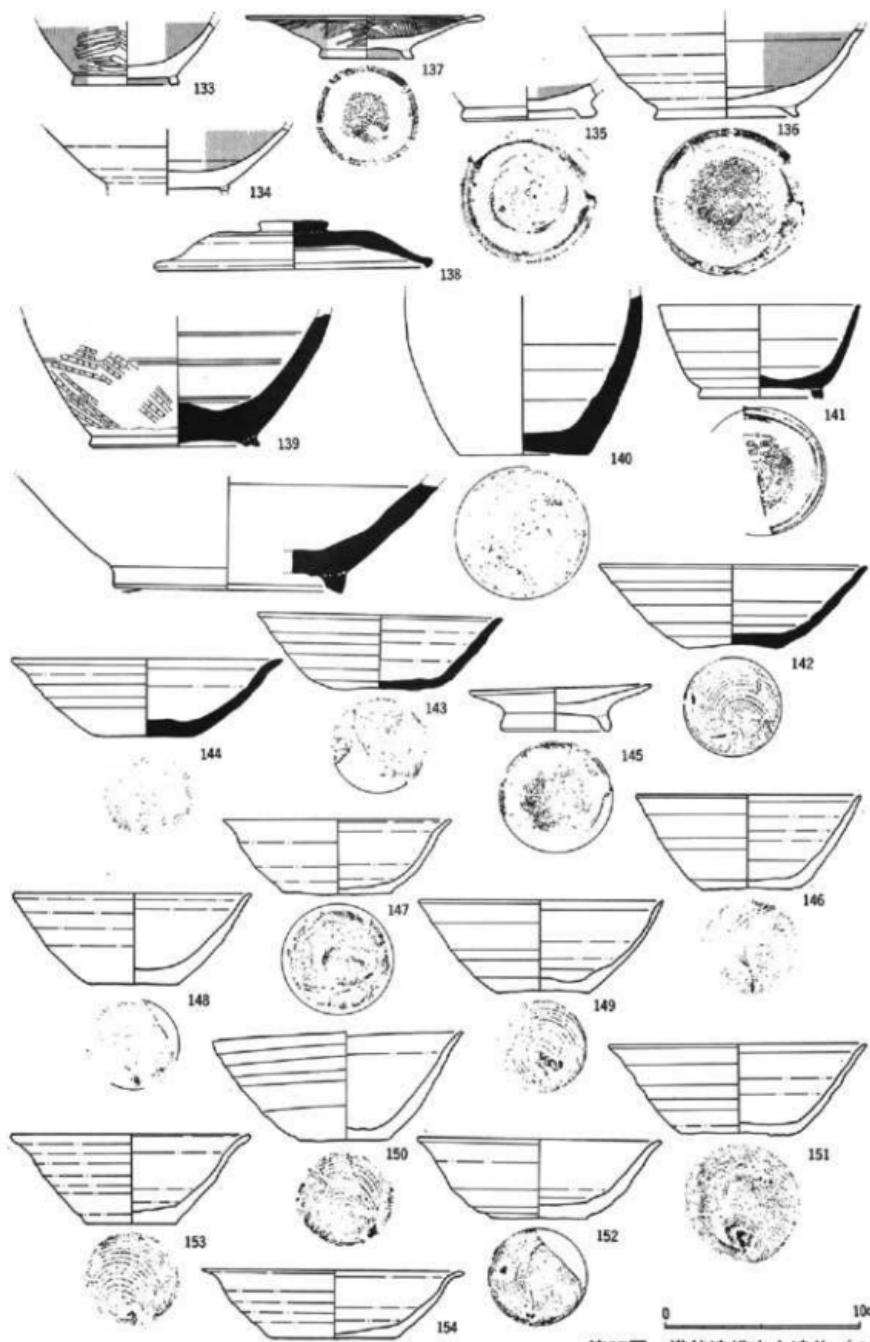
これらの土器群は、全体として庄内地方の平安時代土器編年（註1）の第IV期に比定されるもので、時期は10世紀中葉頃と推定される。

B類は、掘立柱建物跡の周囲を巡る溝状遺構で、建物の雨落溝的なものである。

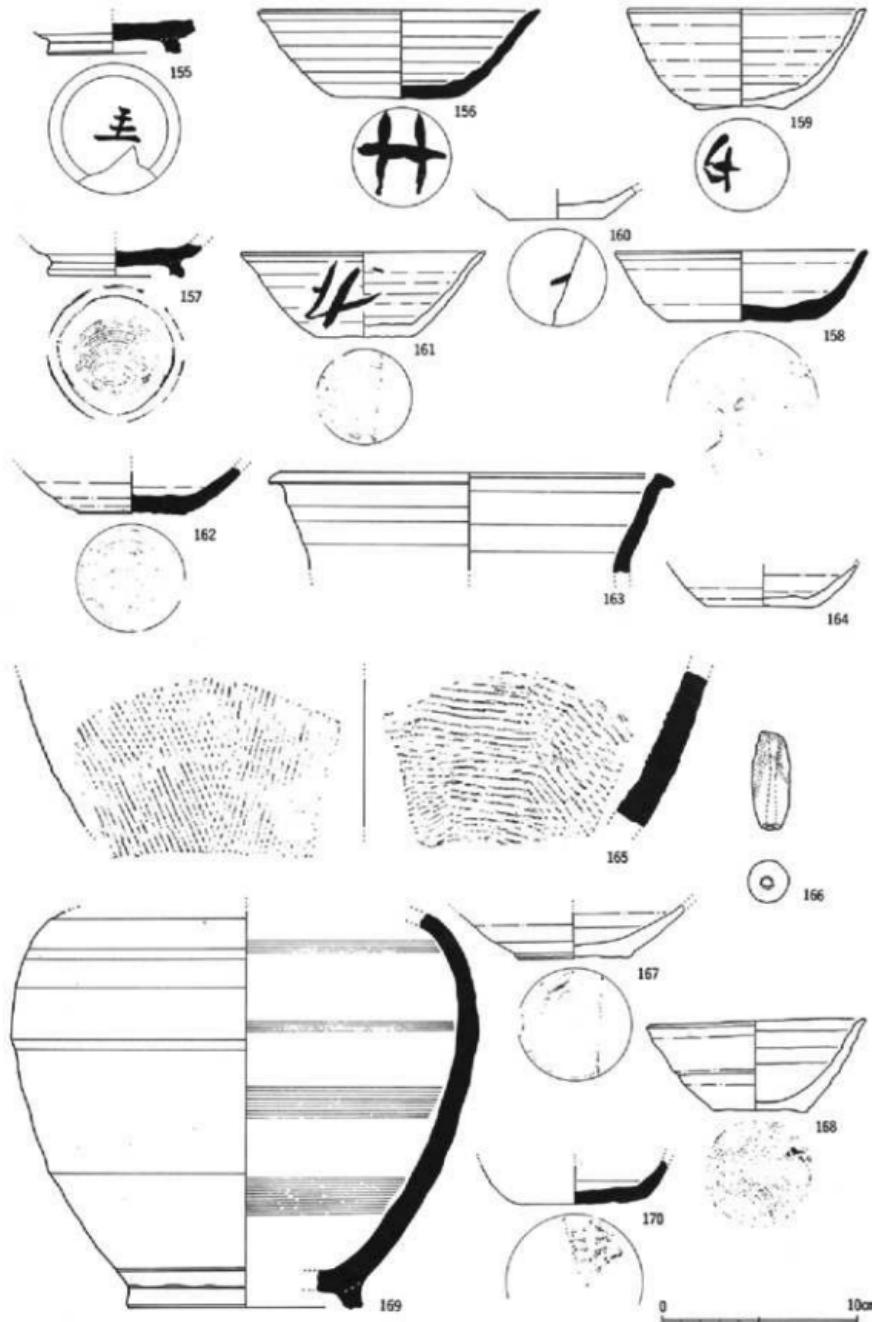
**S D 290・297・301溝状遺構** S B 5 建物跡の四周を巡る溝状遺構で、S D290からは183片、S D297からは73片の土器が出土している。S D301からは遺物は認められなかった。細片がほとんどで図示し得るものはないが、量的には赤焼土器が大半を占め、土師器・須恵器は各々9片・7片と極端に少ない。

土師器の器種は、内面ないし内外面に黒色化処理が施されている壺類のみである。底部は軽い高台が付くもので、切り離しはすべて回転糸切りによる。須恵器は、壺・壺・甕の器種があるが、細片であるため詳細は不明である。赤焼土器は、壺・甕・壠などの器種がある。壺は平底無調整のもので、切り離しはすべて回転糸切りによる。口径に比して底径が小さく、体部は直線的に立上る。甕は口縁部がやや丸味を持つもので、体部下半に条線状の叩き目および同心円状のアテ痕が施されている。

これらの土器群は、全体として庄内地方の平安時代土器編年の第IV期に比定されるもので、時期は11世紀前半頃と推定される。S D290・297溝状遺構出土の土器は、先述したS B 5 建物跡柱穴内出土の土器の時期と共通する。



第27図 溝状遺構出土遺物（1）



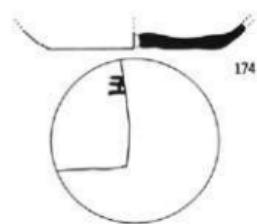
第28図 溝状遺構出土遺物（2）



171



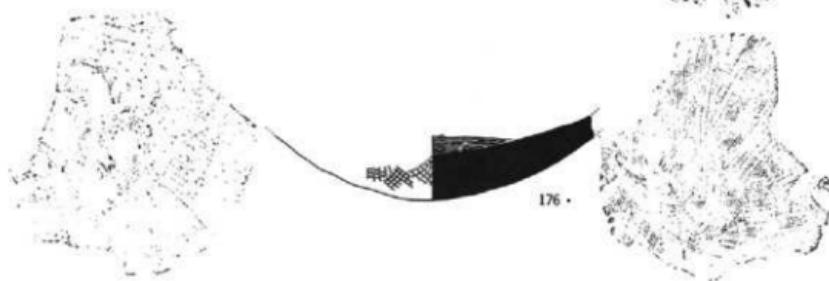
172



174



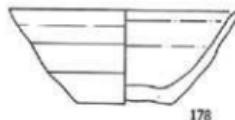
175



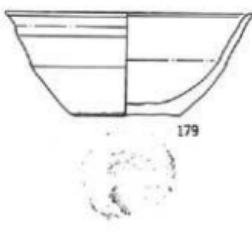
176



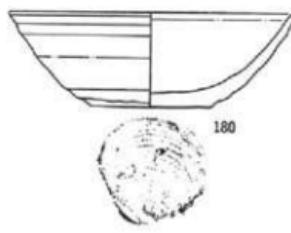
177



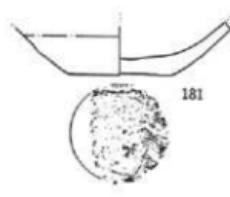
178



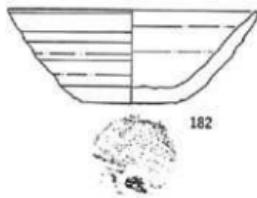
179



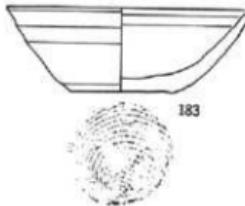
180



181



182



183

0 10cm

第29図 溝状遺構出土遺物（3）

表一7 溝状遺構出土遺物觀察表（1）

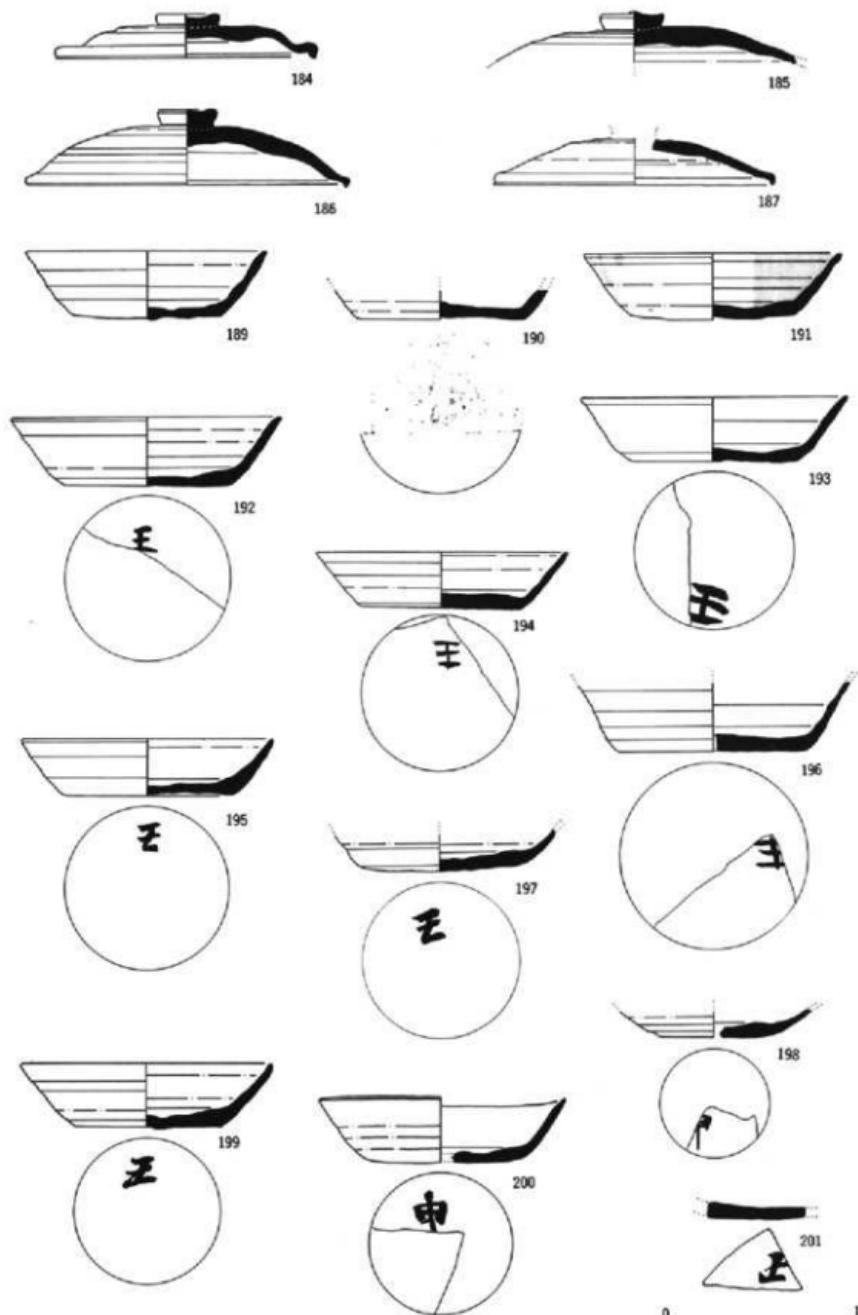
辨認 遺物 番号	器 種	計測値 (m/m)				色 調	胎 土	焼成 度	底 切 面	調 整 法	備 考	出土地點・層位	
		口 径	底 径	厚 さ	高 さ								
第 133	土器 類	高台付环		32	55	黒 色	緻 密	良	圓 角	内外面ミガキ→黒色化		SD42 F <sub>1</sub>	
			124	63	31	明 褐色			x	内面ミガキ→黒色化		# F <sub>1</sub>	
				70		黄 褐 色	粗 砂 混	x	圓 角	内面ミガキ→黒色化		# #	
				74	45	黄 褐 色	粗 砂 混	x	x	内面ミガキ→黒色化		#	
			124	50	22	黒 色	粗 砂 混	x	x	内外面ミガキ→黒色化		SD43 F <sub>1</sub>	
				144		暗 灰 色	石 英 砂 混	x		内外面ロクロ底		SD63 Y	
第 138	陶 器	高台付环		92	68	灰 褐 色	石英砂混	x		外側底部タクノ目→ナメ 内側底部カキ目		SD42 F <sub>1</sub>	
				65	82		緻 密	x	圓 角	底部に「王」印		# F <sub>1</sub>	
			1040	64	48	暗 灰 色	石英砂混	x		内外面ロクロ底		SD70	
			140	56	43	灰 色	緻 密	x	圓 角	内外面ロクロ底		F <sub>1</sub>	
			126	49	38	灰 白色		x	x	内外面ロクロ底			
			140	48	40	灰 褐 色	緻 密	x	x	内外面ロクロ底		SD42 F <sub>1</sub>	
第 27	漆 器	高台付环	96~100	59	22	赤 褐 色	粗 砂 混	x	x			#	
			116	50	48	赤 褐 色		x	x	内外面ロクロ底		SD70	
			(117)	54	39	白 褐 色		x	x	内外面ロクロ底		SD42 F <sub>1</sub>	
			121	44	47	赤 褐 色	粗 砂 混	x	x	内外面ロクロ底		#	
			125	46	47	明 褐色		x	圓 角	内外面ロクロ底		SD70 F <sub>1</sub>	
			125	48	51~56	黄 褐 色	粗 砂 混	x	x	内外面ロクロ底		SD90 F <sub>1</sub>	
			132	61	46	暗 褐 色		x	x	内外面ロクロ底		SD70 F <sub>1</sub>	
			(126)	50	41	赤 褐 色	粗 砂 混	x	x	内外面ロクロ底			
			(122)	49	45	明 褐色		x	x	内外面ロクロ底		SD42 F <sub>1</sub>	
				71		暗 灰 色	緻 密	x	ヘラ切	底部墨書き「主」#		SD70 F <sub>1</sub>	
			(143)	58	45	白 灰 色	緻 密	x	圓 角	底部墨書き「升」#		SD42 F <sub>2</sub>	
				78		白 灰 色	緻 密	x	x			SD70 F <sub>1</sub>	
			(120)	80	36	灰 色	緻 密	x	ヘラ切	内外面ロクロ底		SD72 F <sub>1</sub>	
			125	48	51	暗 褐 色	粗 砂 混	x	圓 角	底部墨書き「手」#		SD70 F <sub>1</sub>	
第 28	赤 陶 器	环	(78)	49	(16)	黄 褐 色		x	x	内外面ロクロ底		SD42 F <sub>1</sub>	
			(126)	48	46	赤 褐 色	粗 砂 混	x	x	底部墨書き「北」#			
				55		白 灰 色	緻 密	x				56~70 F <sub>1</sub>	
			(226)			暗 灰 色	緻 密	x		内外面自然釉		SD70 F <sub>1</sub>	
			57			白 褐 色		x	圓 角	内外面ロクロ底		SD29 F <sub>1</sub>	
			122	55	47	黄 褐 色	粗 砂 混	x	x	内外面ロクロ底			
			(118)			暗 灰 色	石英砂混	x		外側自然釉			
			(70)			白 褐 色	石英砂混	x		底部墨書き「王」#		SD73 F <sub>1</sub>	
			(130)				緻 密	x				SD152 F <sub>1</sub>	
						灰 色	緻 密	x	ヘラ切	底部墨書き「八」#		SD199 F <sub>1</sub>	

S D 229・231・240溝状遺構（第29～33図、第43図、図版43～48） S B 6 建物跡の東辺と北辺を巡る溝状遺構で、S D 229からは515片、S D 231からは79片、S D 240からは87片の土器が出土している。量的には須恵器が近くを占め、次いで赤焼土器で土師器は0.5%と極端に少ない。

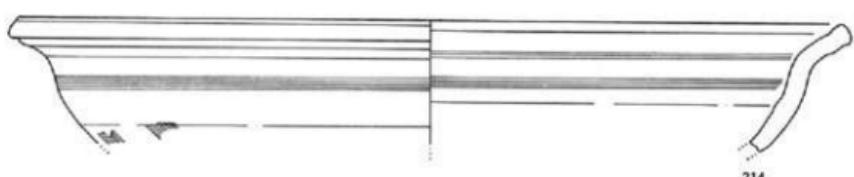
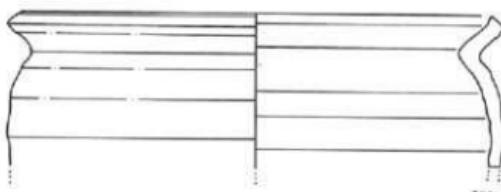
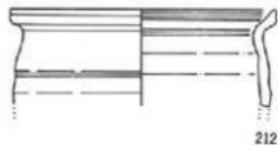
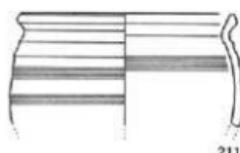
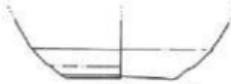
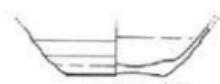
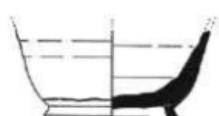
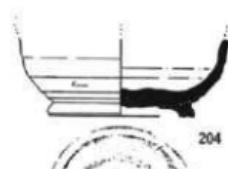
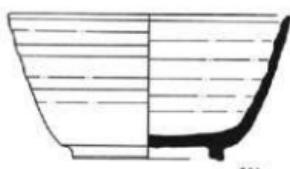
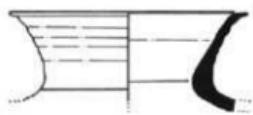
土師器の器種は、内面に黒色化処理が施されている壺のみである。平底を呈すると思われるが、小片であるため詳細は不明である。須恵器は、蓋・壺・高台付壺・壺・甕の器種がある。蓋は口縁端が楔状になるもので、つまみ部に宝珠形の名残が残るもの（第30図185、第32図216・218）と、凹面状に窪むもの（第30図184・186、第32図215・217）がある。壺類はほとんどが底部をヘラ切り離したもの（第29図174、第30図189～201、第31図203～205・207、第32図219～223・225～227、第33図231～239）であるが、1点回転糸切り離しによるもの（第33図240）も認められる。須恵器の蓋および壺類には天井部および底部にはかなりの割合で「王」の墨書銘が認められ、書体からみて少なくとも三種類の筆跡がある。蓋は口縁部片が1点（第31図202）出土している。赤焼土器は、壺・甕・壠の器種がある。壺は底径に比して口径の小さいもので、体部の反りは弱い（第31図209・210、第33図241）。甕は小形のもの（第31図211・212）と丸底長胴形を呈すると思われるやや大形のも（同図213）がある。壠は口縁部「く」字状に外反するものが1点（同図214）出土している。

これらの土器群は、全体として庄内地方の平安時代土器編年の第II期に比定されるもので、時期は9世紀後半頃と推定される。また3条の溝状遺構の覆土中からは、土器の他に箸（第43図403・404）・木端などの木製品やマメ科類の種子なども出土している。

C類は、建物跡等とは直接関係を持たずに、土壤のように単独に存する溝状遺構である。  
S D 331溝状遺構（第34・35図、図版50・51） E区北辺部でS B 6 建物跡と重複して検出された幅約1.4m、長さ12.5cmの溝状遺構である。覆土は茶褐色砂質土の单一層である。遺物は、土師器4片、須恵器95片、赤焼土器の104片、箸等の木製品13点、種子11点の計227点が出土している。ただし土器のうち個体別の点数に換算した場合は、須恵器が赤焼土器よりはるかに多くなる。土師器の器種は、内面に黒色化処理が施されている壺のみである。須恵器は、蓋・壺・高台付壺・甕などの器種がある。蓋はつまみ部が宝珠形ないしその名残りのあるもので、天井部に「子」の刻印が施されている例もある（第34図243～246）。壺類は底部がすべてヘラ切り無調整のもので、底部から体部下端にかけてやや丸味を有する（第34図247～261、第35図262～267・269～271）。高台付壺にも1点「子」と思われる刻印が施されているものがある（第34図259）。赤焼土器は、壺・甕・壠の器種がある。壺は底径に比して口径が小さく、体部の反りが弱いものである（第35図268）。甕は小形のもので、口縁部が「く」字状に外反し、さらに口縁端が直立する（第35図272・273）。壠は口縁部が



第30図 满状遺構出土遺物 (4)

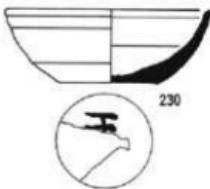
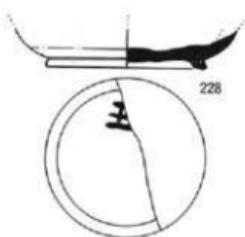
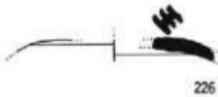
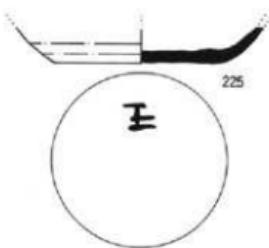
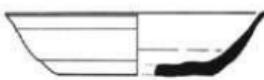
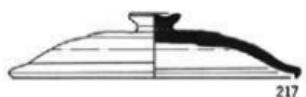
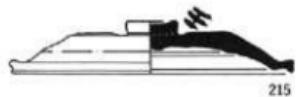


0 10cm

第31図 溝状遺構出土遺物（5）

表一-8 溝状遺構出土遺物觀察表(2)

探区	遺物 番号	器 種	計測値(m/m)			色 調	胎 土	焼成 度	底 部 切 削	底 部 磨 擦	調 査 技 法・備 考	出土地点・層位	
			口径	底径	厚さ								
第 29	173	赤燒土器	甕			褐色	粗砂泥	良		外側条線状印き	SD73	F <sub>1</sub>	
	174	須恵器	壺		85	暗灰色	粗砂泥	#	へ少切	底部墨書「王」#	SD229	F <sub>1</sub>	
	175	土師器		(120)		白褐色	粗砂泥	#		外側り寸目・煤付着	SD122	F <sub>1</sub>	
	176	須恵器	甕			白灰色	胎密	#		外側叩き・内面ハケ目	SD110	F <sub>1</sub>	
第 30	177	赤燒土器	壺	(168)	54	68	赤褐色	粗砂泥	#			SD125	
	178			(120)	50	48	明褐色	粗砂泥	#	回 余		SD203	
	179			(126)	55	52	赤褐色	胎密	#	#		SD78	F <sub>1</sub>
	180			(148)	60	48	赤褐色	胎密	#	#	内外面クロロ痕	SD188	F <sub>1</sub>
	181	内黒土器			50		白褐色	粗砂泥	#	#	内面ミガキ→黒褐色	SD203	F <sub>1</sub>
	182	赤燒土器		(123)	46	47	赤褐色	粗砂泥	#	#	内外面クロロ痕	SD181	F <sub>1</sub>
	183			(125)	53	43	赤褐色	胎密	#	#	内外面クロロ痕	SD188	F <sub>1</sub>
	184	甕		134		24	灰 色		#			SD229	F <sub>1</sub>
	185					27	白灰 色		#				
	186			(164)		39	灰 色		#				
	187			(143)		23	明灰 色	胎密	#				
第 31	188	須 恵 器	壺	125	73	35	灰白色	粗砂泥	#	へ少切	内外面クロロ痕		
	189				85		灰 色	胎密	#	#	底部墨印「×」#		
	190			132	86	34	黑灰 色		#	#	内面漆付着		
	191			(138)	84	35	黑灰 色		#	#	底部墨書「王」#		
	192			(132)	86	33	灰 色		#	#	底部墨書「王」#		
	193			123	81	38	灰 色		#	#	底部墨書「王」#		
	194			129	84	29	灰白色	胎密	#	#	底部墨書「王」#		
	195			(98)	(35)	灰 色			#	#	底部墨書「王」#		
	196			83	(29)	白灰 色			#	#	底部墨書「毛」#		
	197			(56)		灰 色			#	#	底部墨書「甲」#		
	198			128	76	34	灰 色		#	#	底部墨書「王」#		
	199			125	74	33	暗灰 色	胎密	#	#	底部墨書「申」#		
	200					白灰 色			#	#	底部墨書「王」#		
第 32	201	甕		123			綠 色	胎密	#		外側研磨・内面民輪		
	202	高 台 付 壺		200	79	75	暗灰 色	胎密	#	へ少切	内外面クロロ痕		
	203				71	39	黃灰 色	粗砂泥	#	#	下半にヘラ削り 底部墨痕		
	204			89			暗灰 色	胎密	#	#		SD229	F <sub>1</sub>
	205			70	(45)	灰 色	胎密	#	#			SE230	F <sub>1</sub>
	206			125	58	57	灰 色	粗砂泥	#	#	底部墨書「王」#	SD229	F <sub>1</sub>
	207			62	(35)	灰 色	胎密	#	#			SE230	F <sub>1</sub>
	208			56	(25)	赤褐色	粗砂泥	#	回 余	内外面クロロ痕	SD229	F <sub>1</sub>	
	209	赤 燒 土 器	壺	55	(30)	暗褐色	粗砂泥	#	#	内外面クロロ痕			
	210			(106)		褐色			#		外側漆付着		
	211		甕	(137)		灰褐色	粗砂泥	#		内外面墨痕着			
	212												



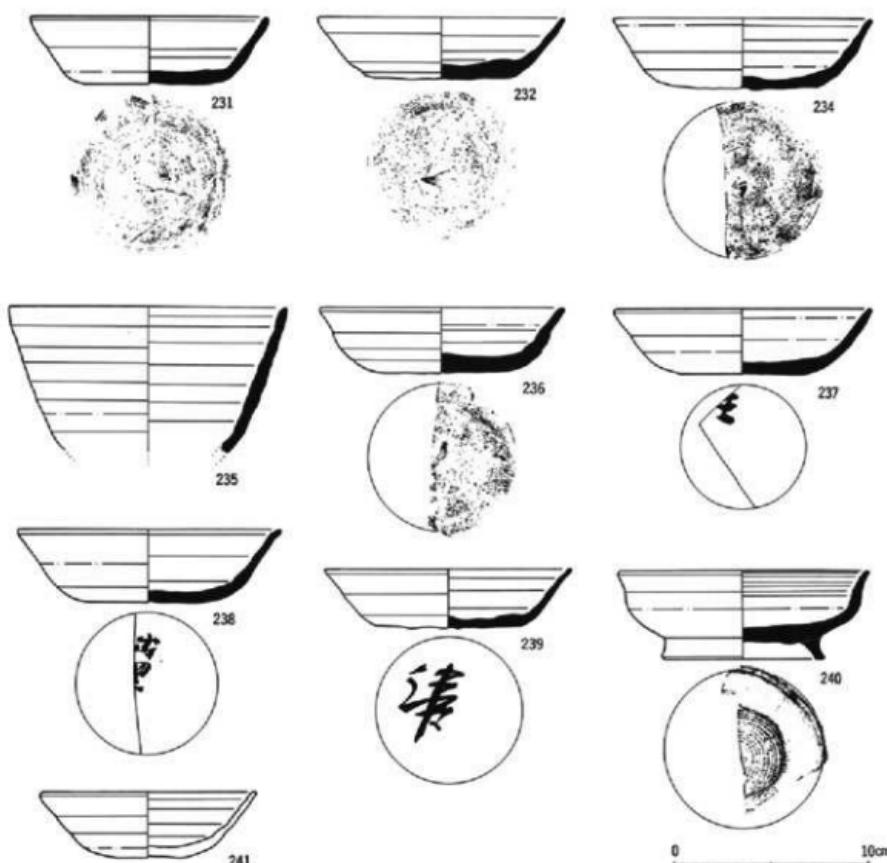
0 10cm

第32図 满状遺構出土遺物 (6)

大きく外側に屈折し、さらに口縁端が直立するもの（同図274）で、体部下半に条線状の叩き目および同心円状のアテ痕を有するもの（同図275）もある。木製品は、箸4点の他に棒状のものや板状のもの（第43図404）も出土している。

これらの土器群は、全体として庄内地方の平安時代土器編年の第Ⅰ期から第Ⅱ期に比定され、時期は9世紀中葉頃と推定される。

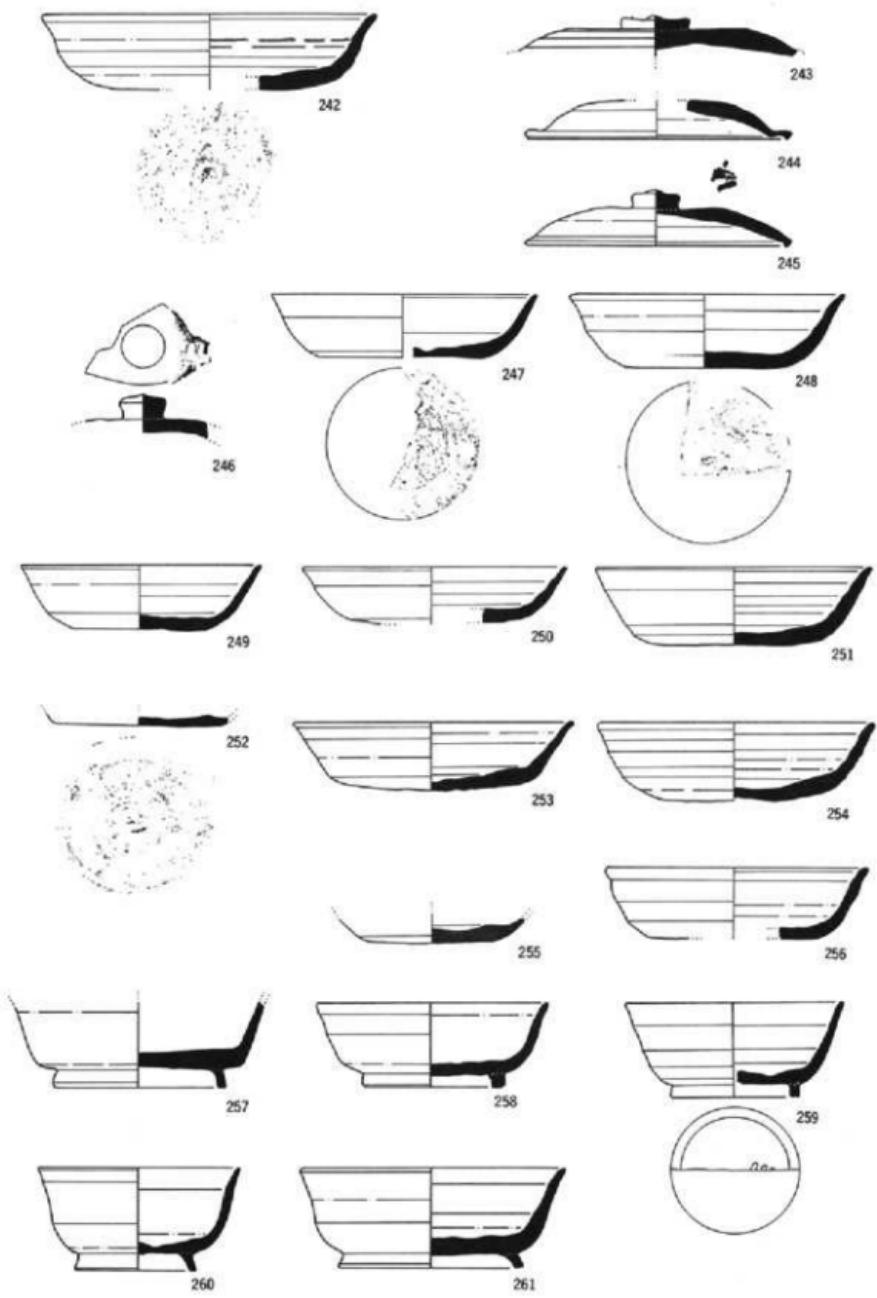
その他の溝状遺構（第27～34図） 沼田遺跡で遺物の多少を問わなければ87条の溝状遺構から遺物が出土している。ここではその他の溝状遺構のうち比較的遺物が多く出土しており、時期がある程度把握できるものについて、一括して記述する。



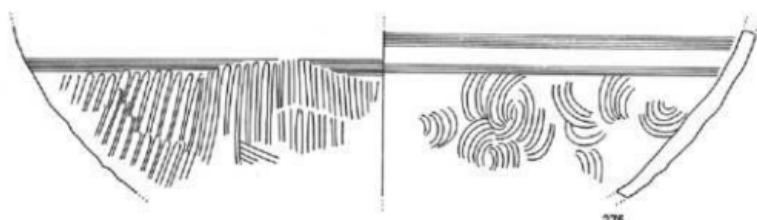
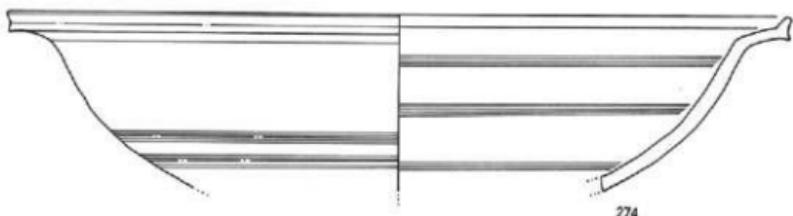
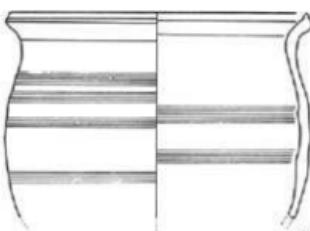
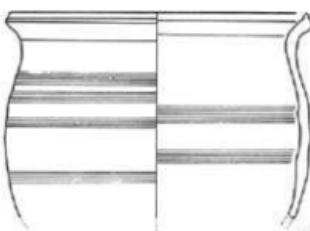
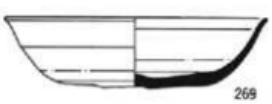
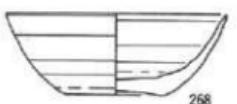
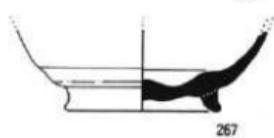
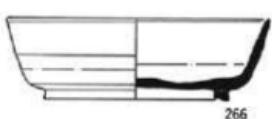
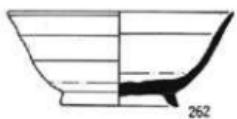
第33図 溝状遺構出土遺物 (7)

表一9 溝状遺構出土遺物観察表（3）

網番	遺物 番号	器 種		計測値(m/m)	色 調	胎 土	焼成 度	底 切	厚 度	調査 技 法・備 考	出土地点・層位		
		甕	壺										
第 31 回	213	赤燒土器	甕	(240)	赤褐色	粗砂混	良				SD229 F <sub>1</sub>		
	214		壺	(422)	灰褐色	粗砂混	#			外側を墨書き・塗付有			
第 32 回	215	調 悪 器	蓋	145	29	明灰色	緻密	#	へラ切	体部墨書き「王」a	SD229 F <sub>1</sub>		
	216			(146)	20	灰 色	粗砂混	#	#	外側灰かぶり			
	217			(147)	34	赤灰色	緻密	#	#				
	218			(160)	29	明灰色	緻密	#	#				
	219		壺	(130)	80	灰 色	粗砂混	#	#	底面墨書き「王」a	SD229 F <sub>1</sub>		
	220			133	79	灰白色		#	#	底面墨書き「王」a			
	221			(130)	90	32	灰 色	緻密	#	#	底面墨書き「王」a		
	222			(134)	80	32	灰 色	粗砂混	#	#	底面墨書き「王」a		
	223			130	74	34	灰 色	粗砂混	#	#	底面墨書き「王」a		
	224			(84)		灰 色	粗砂混	#	#	底面墨書き「王」a	SD229 F <sub>1</sub>		
第 33 回	225		蓋	(90)		白灰色	粗砂混	#	#	底面墨書き「王」a	SD240		
	226		壺	(152)	87	35	灰 色	粗砂混	#	へラ切	底部墨書き「風川」a	SD240	
	227		高台村壺	(83)		灰 色	粗砂混	#	#	底部墨書き「王」a	SD239 F <sub>1</sub>		
	228		赤燒土器	壺	(168)	55	38	青 色	石英 粗砂混	#	縫合	内側円錐形布 底部墨書き「王」a	SD231 F <sub>1</sub>
	229					68	灰 色	緻密	#	へラ切	内側円錐形布 底部墨書き「王」a	SD229 F <sub>1</sub>	
第 34 回	231	酒 悪 器	壺	124	76	35	灰 色	緻密	#	#	内外面ロクロ底	SD240	
	232			(126)	77	32	灰 色		#	#	内外面ロクロ底		
	234			(133)	81	36	灰 色		#	#	内外面ロクロ底		
	235			144	(75)	暗灰色	緻密	#			内外面ロクロ底		
	236			(128)	79	34	黄褐色	粗砂混	#	へラ切	内外面ロクロ底		
	237			133	64	34	黄褐色	緻密	#	#	内外面ロクロ底		
	238			135	74	38	暗灰色	緻密	#	#	底部墨書き「出里」a		
	239			(126)	79	31	灰 色		#	#	底部墨書き「深」a		
	240		高台村壺	(130)	82	46		緻密	#	縫合	内外面ロクロ底		
第 35 回	241	酒 悪 器	壺	110	38	34	赤褐色	石英砂混	#	#	内外面ロクロ底		
	242		蓋	(195)	99	39	灰褐色	緻密	#	へラ切	へク状工具の留嵌痕	SD321 SD331	
	243				(21)	灰 色	粗砂混	#					
	244				(20)	灰褐色	粗砂混	#					
	245			138		29	灰 色	緻密	#		縫合痕・墨書き 品名「深」a		
	246		壺				灰褐色	緻密	#		縫合「王」a		
	247			137	80	32	明灰色	粗砂混	#	へラ切			
	248			(142)	87	38	灰褐色	粗砂混	#	#	内外面ロクロ底		
	249			(123)	79	34	灰 色		#	#	内外面ロクロ底		
	250			135	84	30	灰 色	粗砂混	#	#	内外面ロクロ底		
	251			141	83	40	白褐色	粗砂混	#	#	口縁部に塗付有		
	252					90		粗砂混	#	#			



第34図 満状遺構出土遺物（8）



0 10cm

第35図 遺構出土遺物 (9)

S D63溝状遺構はH区で検出されたもので、須恵器蓋（第27図138）・赤焼土器坏などが出土しており、時期は10世紀代と推定される。S D72・73溝状遺構はA区北辺部で検出されたもので、須恵器坏（第28図158・170）、赤焼土器壺（第29図73）などが出土している。「子」の刻印のあるヘラ切りの須恵器坏もあり、時期は9世紀代頃と推定される。S D238溝状遺構はE区のSK230土壤東側で検出されたもので、須恵器蓋（第32図215）・同坏（第32図224、第33図230）・同高台付坏（第32図228）などが出土している。図示したものの大半に「王」の墨書銘があり、時期は9世紀後半頃と推定される。

註1 安部 実他「新青渡遺跡第1次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第67集 1983年

表-10 溝状遺構出土遺物観察表（4）

探査 番号	遺物 番号	種 類	計測値(m/m)			色 調	胎 土	施 成	起 切 面 形	調 整 技 法	備 考	出土地点・層位
			口 径	底 径	高 さ							
第 233	坪		(144)	95	35	白灰色		良	ヘラ切	内外面ロクロ痕		SD631
			(142)	100	40	灰褐色	粗砂質	#	#	内外面ロクロ痕		
				66		黄灰色		#	#	内外面ロクロ痕		
			(139)	89	37	灰褐色	粗砂質	#	#	内外面ロクロ痕		
回 34	須 恵 器			87	42	灰 色	粗砂質	#	#	内外面ロクロ痕		
			118	73	38	灰 黑 色	致 密	#	#	内外面ロクロ痕		
			(110)	64	49	灰 色	致 密	#	#	底部刻印「王」#		
			103	61	53	灰 黑 色	致 密	#	#	内外面ロクロ痕		
			135	95	52	灰 色	致 密	#	#	内外面ロクロ痕		
			116	61	49	灰 色	致 密	#	#	内外面ロクロ痕		
第 35	高 台 付 坏		(97)	63	51	灰白色	致 密	#	#	内外面ロクロ痕		
			(143)	79	81	灰 色	致 密	#	#	内外面ロクロ痕		
			(116)	(77)	47	灰 色	致 密	#	#	内外面ロクロ痕		
			136	95	42	灰 色	致 密	#	ヘラ切	付高台		
				76	(42)	黄 灰 色	石英砂質	#	#	内外面ロクロ痕 付高台		
			113	48	42	赤褐色	粗砂質	#	圓 余	丹塗り		
			135	74	36	黄褐色		#	ヘラ切	内外面ロクロ痕		
回 36	須 恵 器		139	76	30	灰 色		#	#	内外面ロクロ痕		
			129	67	33	白褐色	粗砂質	#	#	底部削ナデ		
			(136)			暗褐色	粗砂質	#		体部内外面焼付着		
			(152)			褐 色	粗砂質	#		体部内外面焼付着		
回 37	赤 燒 土 器		(400)			白褐色	粗砂質	#		体部外面焼付着		
						褐 色	粗砂質	#		外腹多線状凹凸・焼付着 内面西海波文		

## 6 包含層出土の墨書・刻印土器（第36～40・42図、表6、図版52～54・58）

遺構の覆土内以外にも、各精査区の包含層とくにA・E・G区の包含層から重要な遺物が多く出土している。本節ではこのうちとくに包含層出土の墨書土器および刻印土器について触れる。

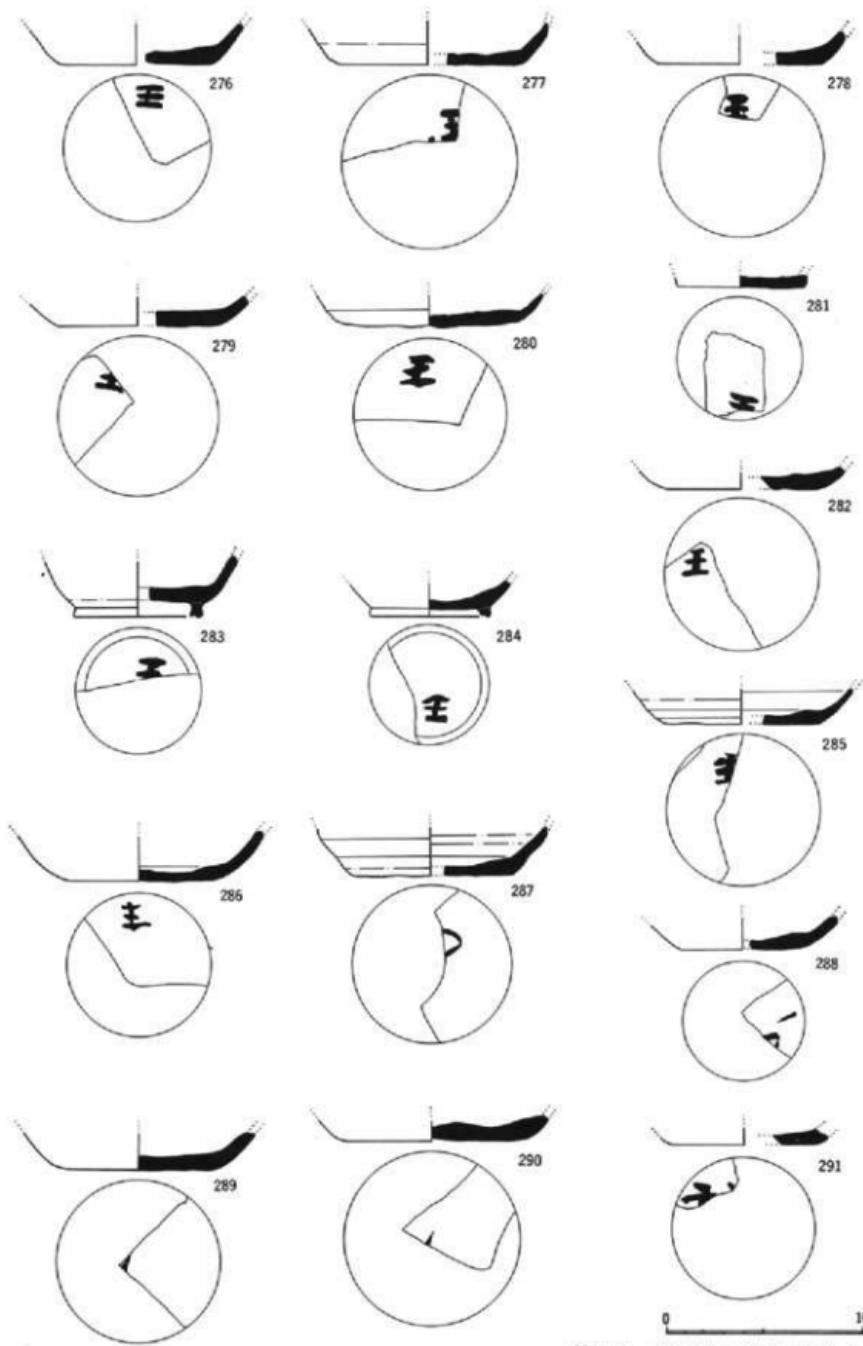
墨書銘には「山」、「申」、「区田」、「来」、「西」、「水」など幾つかの種類があるが、沼田遺跡でとくに注目されるのは「王」の墨書銘である。また刻印土器も「于」という共通したものが多く出土している。「王」の墨書土器と「于」の刻印土器は、字体に若干の違いこそあれ密接な関連性を有するものと思われるため、以下にその概要を述べる。

両者とも対象となる器種は須恵器の坏類と蓋にのみ限定される。またその部位は、坏類の場合は底部外面、蓋の場合はつまみ部の外面ないし天井部の外面上端に施される。これはその他の墨書銘が赤焼土器の坏に書かれたり、同じ須恵器坏でも体部外面に書かれている例があるので比べると著しい特徴といえる。

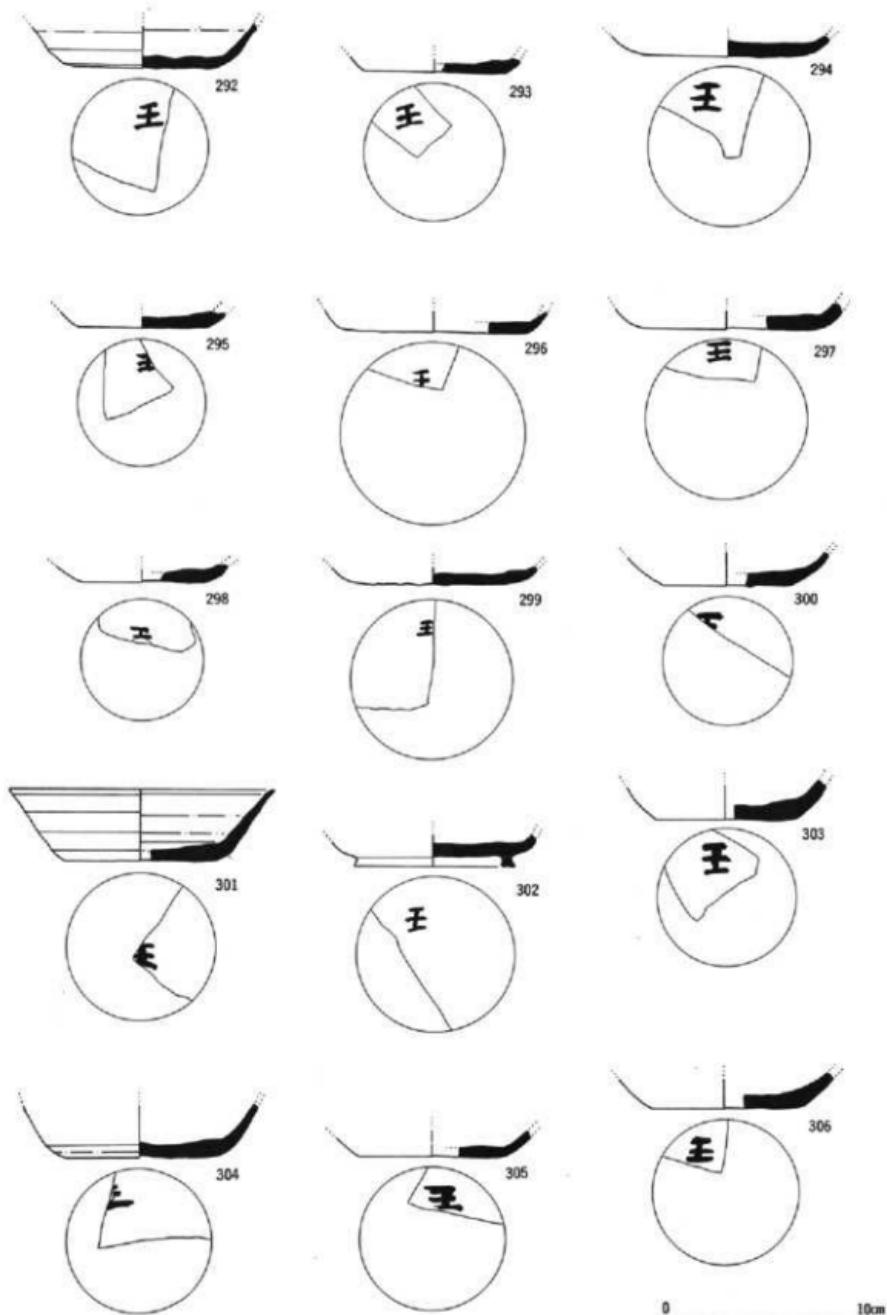
さらにこれらの時期は、土壌や溝状遺構の一括土器群としての検討から、「王」の墨書土器は平安時代9世紀後半頃、「于」の刻印土器は平安時代9世紀中葉から後半にかけての頃と推定された。時期的に「于」の刻印土器がやや先行する可能性はあるにしても、両者はほぼ同時期の所産ということになる訳である。

つぎに両者の分布状況についてみてみる。「王」の墨書銘の出土した遺構はS B 6建物跡、S K 230土壌、S D 229・231・239・240溝状遺構の6ヶ所（計23点）で、すべてE区に属する。また「于」の刻印土器は、E区のS K 230土壌、S D 331溝状遺構の他に、G区のS D 42大溝とA区のS D 73溝状遺構から（計6点）も出土している。このうち両者の土器を出土する遺構が木端等の塵拾穴と考えられるS K 230土壌を除いて認められないことも興味深い。

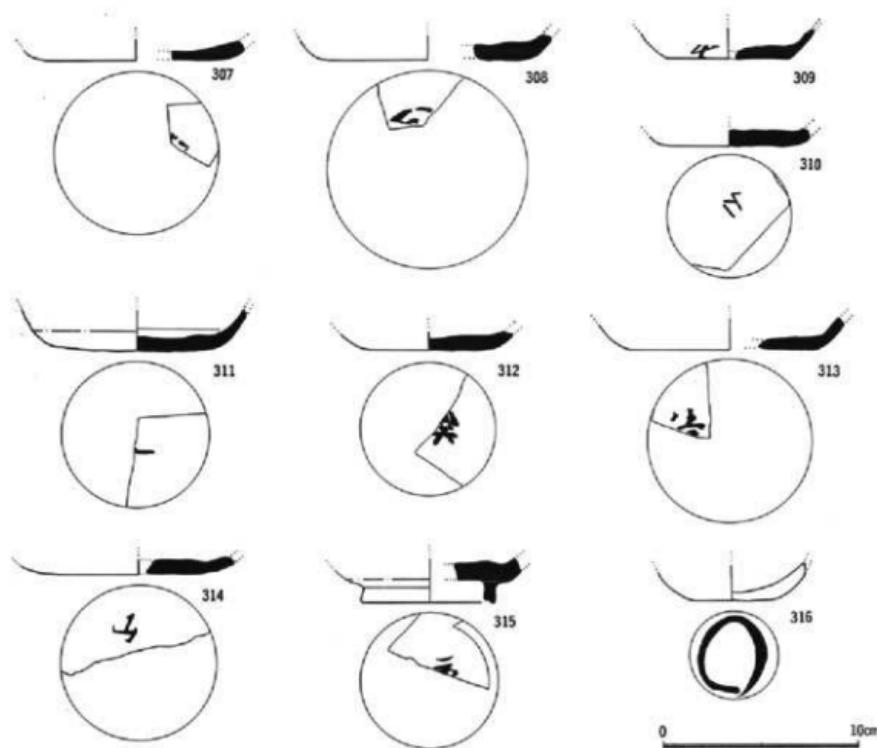
これに包含層出土の墨書・刻印土器の分布を加味してみると（表）。E区の包含層からは、「王」の墨書土器41点と「于」の刻印土器3点が出土している。土器のグリッド名からみる限り、前述したE区の遺構の位置とほぼ共通する。G区の包含層からは、両者の土器は出土していない。A区の包含層からは、「王」の墨書土器が1点と「于」の刻印土器が5点出土している。G区からは遺構内と包含層を含めて1点しか出土していないこととA区からは包含層で「王」の墨書土器1点出土していることについては、出土状況も含めてなお吟味の必要があり、両者の土器が沼田遺跡の各地区に広汎に分布するとは概に言えない。むしろ現時点では、「王」の墨書土器はE区を中心にして分布し、「于」の刻印土器はE区とA区に分布するとした方がより妥当なようである。ただし両者の土器が時期的に限定された遺構から出土するという点も考慮する必要はある。



第36図 包含層出土墨書き土器（1）



第37図 包含層出土墨書土器（2）



第38図 包含層出土墨書土器（3）

最後に「王」の墨書および「于」の刻印の意味についてみたい。「于」の刻印は出土地点や伴出関係からみて「王」の墨書土器と性格を共通にするもの、あるいは「王」の墨書の省略形とも推察することができる。そう解釈した場合この刻印は須恵器の一般的な製造者を意味する廟印とは違い、生産段階で使用者が特定されていたことになり、遺跡の住人の特殊な立場がうかがえる。

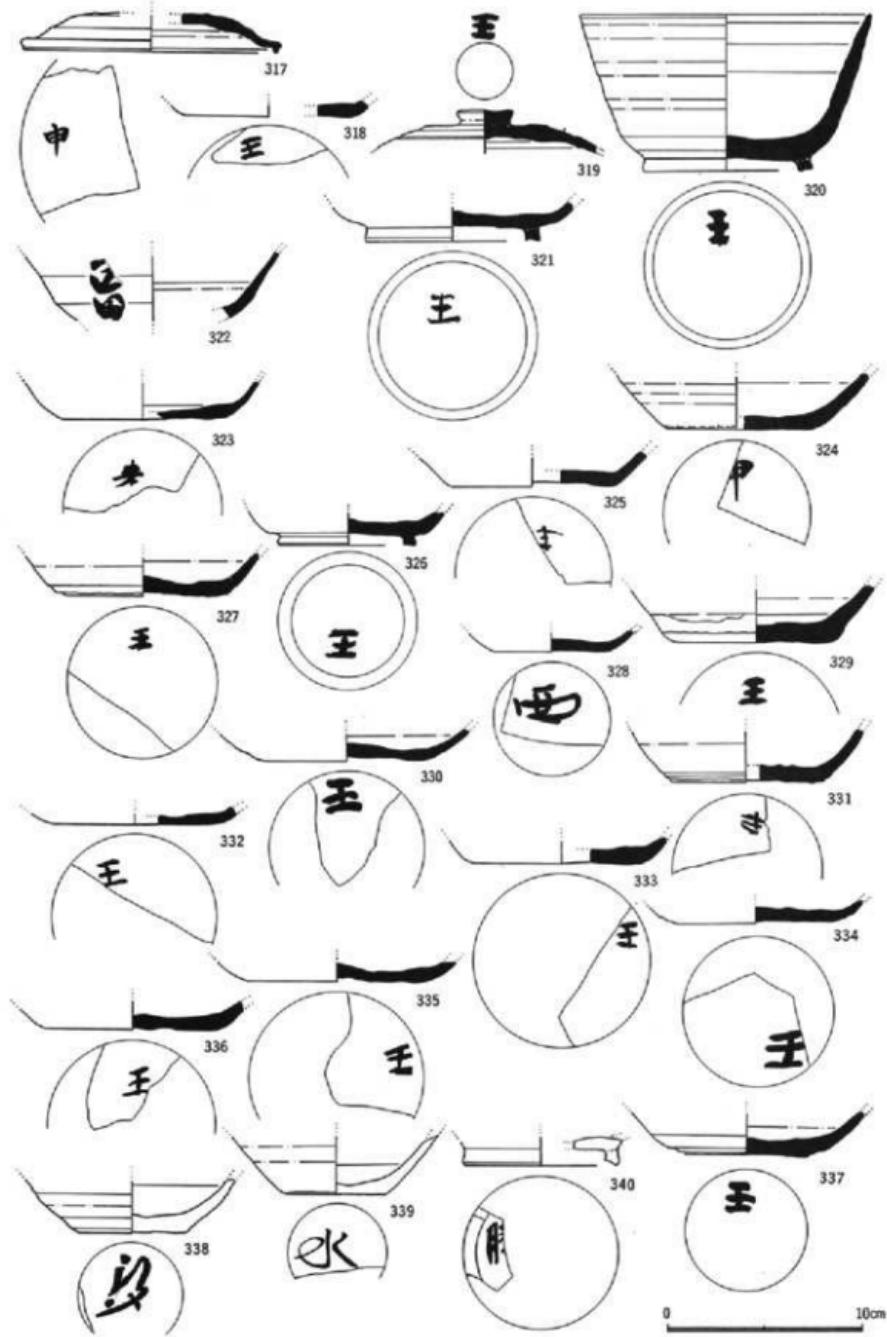
平安時代には官職名・人名などの墨書は単字に略されている傾向があり、「王」は人名の省略の可能性が考えられる。8世紀後半から9世紀初頭にかけて、出羽国司に百濟王の一族が派遣されており、その関連は検討に値する。

なお平城宮出土の墨書土器にも、単字ではないが「藤原部王」や「津守王」のように人名等の末字に「王」の字が用いられている例がある（註1）

註1 貝津一郎・立木 修 「平城宮出土墨書土器集成Ⅰ」 奈良国立文化財研究所 1983年

表-11 包含層墨書土器觀察表（1）

探因	遺物號	器種	計量值(m/m)		色調	胎土	燒成	器形	剖面	調整技術・備考	出土地點・層位
			口徑	底深							
高	276	壺	78		明灰色	致密	良	へラ切	底部墨書「王」△	140-60	II
	277		91		白灰色		好	好	底部墨書「王」△	98-60	II
	278		84		灰褐色	致密	好	好	底部墨書「王」△	107-58	F <sub>1</sub>
	279		83		灰褐色	致密	好	好	底部墨書「王」△	106-59	
	280		78		白灰色		好	好	底部墨書「王」△	105-59	III
	281	高台付壺	64		茶灰色		好	好	底部墨書「王」△	△	△
	282		79		灰褐色	致密	好	好	底部墨書「王」△	104-66	F <sub>2</sub>
	283		66		明灰色	致密	好	好	底部墨書「王」△	105-59	
	284		61		灰褐色	致密		好	底部墨書「王」△	79-59	
	285		(70)		灰色		好	好	底部墨書「王」△	104-61	II
回	286	壺	74		暗灰色	致密	好	好	底部墨書「王」△	104-59	
	287		(83)		白灰色		好	好	底部墨書「△」△	105-59	III
	288		(62)		白灰色		好	好	底部墨書	106-60	III
	289		82		灰褐色	粗砂混	好	好	底部墨書	105-60	
	290		90		暗灰色	致密	好	好	底部墨書	△	F <sub>2</sub>
	291		74		灰褐色	致密	好	好	底部墨書	50-166	
	292	氯化器	71		灰褐色		好	好	底部墨書「王」△	103-59	II
	293		(72)		灰褐色		好	好	底部墨書「王」△	53-168	II
	294		83		暗灰色	粗砂混	好	好	底部墨書「王」△	106-61	F <sub>2</sub>
	295		66		灰褐色	致密	好	好	底部墨書「王」△	120-67	
	296		69		灰色		好	好	底部墨書「王？」△	104-61	II
	297		83		灰褐色	致密	好	好	底部墨書「王」△	105-59	
	298		63		明灰色	致密	好	好	底部墨書「王？」△	107-59	
	299		83		白灰色		好	好	底部墨書「王」△	100-58	II
	300		(66)		暗灰色		好	好	底部墨書「王？」△	105-61	II
	301		(135) (77) 37	白灰色	粗砂混	△	へラ切	底部墨書「王」△	105-60	II	
國	302	高台付壺	82		灰褐色		好	好	底部墨書「王」△	105-59	III
	303		72		黃褐色	致密	好	好	底部墨書「王」△	105-64	F <sub>2</sub>
	304		74		灰褐色		好	好	底部墨書「王」△	97-60	II
	305		74		灰褐色	致密	好	圓余	底部墨書「王」△	104-64	F <sub>2</sub>
	306		76		灰褐色	致密	好	へラ切	底部墨書「王」△	103-59	F <sub>2</sub>
	307	壺	83		暗灰色	致密	好	好	底部墨書	105-59	
	308		102		黃褐色	致密	好	好	底部墨書	103-59	
	309		62		白灰色		好	圓余	底部墨書「千」△	48-163	II
	310		62		灰褐色	粗砂混	好	好	底部墨書「ケー」△	99-60	
	311		75		灰褐色		好	へラ切	底部墨書	98-59	
國	312	高台付壺	76		灰褐色	致密	好	好	底部墨書		
	313		84		灰褐色	致密	好	好	底部墨書	98-58	
	314		78		灰褐色	致密	好	好	底部墨書「山」△	144-177	



第39図 包含層出土墨書土器 (4)

表-12 包含層墨書土器(2)・その他の遺物観察表(1)

探査 番号	遺物 番号	器 種	計測値(m/m)			色 調	胎 土	焼成 度	鋸 切 面	墨 書	調 査 技 法	備 考	出土地点・層位
			口径	底径	高さ								
第 38 回	315	須 恵 器	高台付坏		69	灰 色	緻 密	良	へラ切	底部墨書	106-61	F <sub>2</sub>	
	316	赤褐色土器			45	赤褐色	石英砂混	#	回 余	底部墨書「〇」#	112-89		
第 39 回	317	蓋	須 恵 器	130		灰 色	緻 砂 混	#		墨書「申」#	106-60	III	
	318	坏		(88)		暗灰色	石英砂混	#	へラ切	底部墨書「王」#	129-68	II	
	319	蓋				灰 色	緻 密	#	#	墨書「王」#	104-59	II	
	320	高台付坏		(150)	87	灰 色	緻 砂 混	#	#	底部墨書「王」#	47-105	II	
	321				88	灰 色	緻 密	#	#	底部墨書「主」#	164-60	III	
	322					灰 色	緻 砂 混	#		体部墨書「区田」#	21-16	III	
	323					暗灰色	石英 混	#	へラ切	底部墨書「来」#	161-150	II	
	324					灰 色	緻 密	#	#	底部墨書「申」#	160-60	III	
	325					灰 色	緻 密	#	#	底部墨書「主」#	105-72	III	
	326					灰 色	石英 砂混	#	#	底部墨書「王」#	105-63	II	
	327					灰 色	緻 砂 混	#	#	底部墨書「王」#	105-67	II	
	328					明灰色	緻 密	#	回 余	底部墨書「西」#	105-72	III	
	329					灰 色	緻 砂 混	#	へラ切	底部墨書「王」#	97-59	II	
	330					白灰色	緻 密	#	#	底部墨書「王」#	104-60	II	
	331					灰 色	緻 砂 混	#	#	底部墨書「生」#	120-68	II	
	332					明灰色	緻 密	#	#	底部墨書「王」#	105-60	II	
第 40 回	333					白灰色	緻 砂 混	#	#	底部墨書「王」#	120-69	II	
	334					黄灰色	緻 密	#	#	底部墨書「土」#	97-59		
	335					灰 色	緻 砂 混	#	#	底部墨書「王」#	#		
	336					白灰色	緻 砂 混	#	#	底部墨書「王」#	105-59	III	
	337					暗灰色	石英 砂混	#	回 余	底部墨書「王」#	105-65	II	
	338	赤褐色土器				赤褐色	緻 砂 混	#	#	底部墨書「汲」#	59-161	II	
	339					明黄色	緻 砂 混	#	#	内面墨書「汲吊墨書「水」#	105-87	II	
	340	須 恵 器	高台付坏			明灰色	緻 密	#	#	付口墨書「月?」#	46-170	II	
第 41 回	341	土 筒 器	須 恵 器		(90)	褐 色	石英粉混	#			103-61	II	
	342	蓋		(48)	(1.8)	3.9	暗灰色	緻 密	#	内外面クロロ痕	105-98	II	
	343					(123)	暗灰色	砂 粒 混	#	内面青銅波文 内外面自然釉	97-58	II	
	344	双耳 盖			(64)	暗灰色	石英 粉混	#	へラ切	内面自然灰カブリ 付け高台	96-61	II	
	345	双耳 坏			(113)		灰 色	石英 砂混	#		106-59	II	
	346	灰陶陶器	三脚 盖	168		31	灰 色	緻 密	#	錫開系統の灰陶9℃未 ~10℃	111-97	II	
	347	柴 筒 (骨化)	高台付坏		(70)	明灰色	緻 密	#		内外面塗付15℃頃?	47-157	II	
	348	母陶陶器								内外面漆	46-164	II	
	349					53					50-158	II	
	350									内外面漆	42-154	II	
	351					60				内外面漆	48-156	II	
	352	須 恵 器	腹	長375・幅39		暗灰色	粗 砂 混	#		底部自然釉	57-161	II	
	353	石 製 品	石 筒	長537・厚6		青 黑 色	綠泥岩	#					

## 7 その他の遺物 (第40~43図, 表6, 図版55~57・59)

包含層出土のその他の遺物についても、触れるべき資料が多い。詳しい内容は遺物観察表をみていただくことにして、とくに注目すべき遺物について若干の記述を行う。図に示した遺物の種類は、陶磁器、土製品、石製品、木製品などがある。

陶磁器には、灰釉陶器（第40図346、第41図365）・綠釉陶器（同図348～351）・磁器（同図347）がある。このうち346は篠岡系統の灰釉三脚盤で、9世紀末から10世紀頃の時期が考えられる。また347は青花の高台付腕で、15・16世紀の明らかに移入品である。

土製品には、硯(第40図352)・瓦(同図354・355)・土鍤(同図356・357)などがある。このうち355は花文字瓦で、城輪柵跡出土の宇賀第I類(註1)に類似する。

石製品には、石帯（第40図353）・砥石（第41図370～375）などがある。石帯は青黒色をした37mm四方の巡方で、穿つ穴が4ヶ所に施されている。城輪柵跡周辺における石帯の出土遺構は、城輪柵跡・八幡町堂の前遺跡・酒田市闇B遺跡に次いで、これで4遺跡になる。砥石は6点出土しているが、このうち372は多方向からの擦痕が明瞭に認められる。

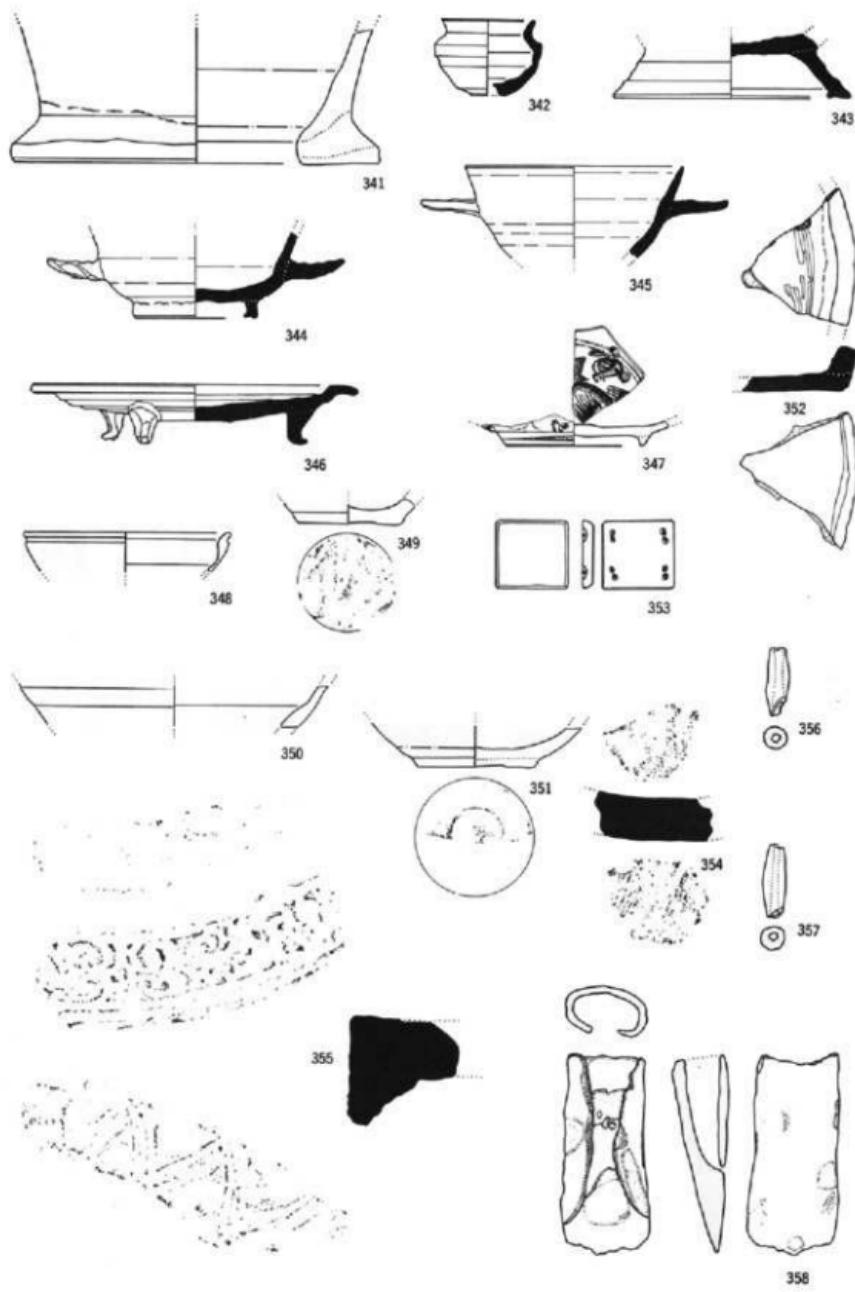
鉄製品には、鉄斧（第40図358）・古銭などがある。鉄斧はE区の西側、SB6建物跡の南西端第III層から出土したもので、時期的には平安時代前半に属する可能性が高い。庄内地方の平安時代から鉄斧が出土する例は稀であり、貴重な資料である。

木製品には、曲物（第43図395）・皿（同図396）・櫛（397）・鉄（398）・加工木（399～401）・下駄（402）・箸（403・404）・折敷（405）などがある。このうち遺構内出土の遺物については、前節までに触れてある。包含層の第II層から出土した櫛や下駄の時期については、近世以降の可能性も含めなお検討が必要である。

註1 柏倉亮吉・伊藤 忍 「平野山古窯跡群」 寒河江市教育委員会 1970年

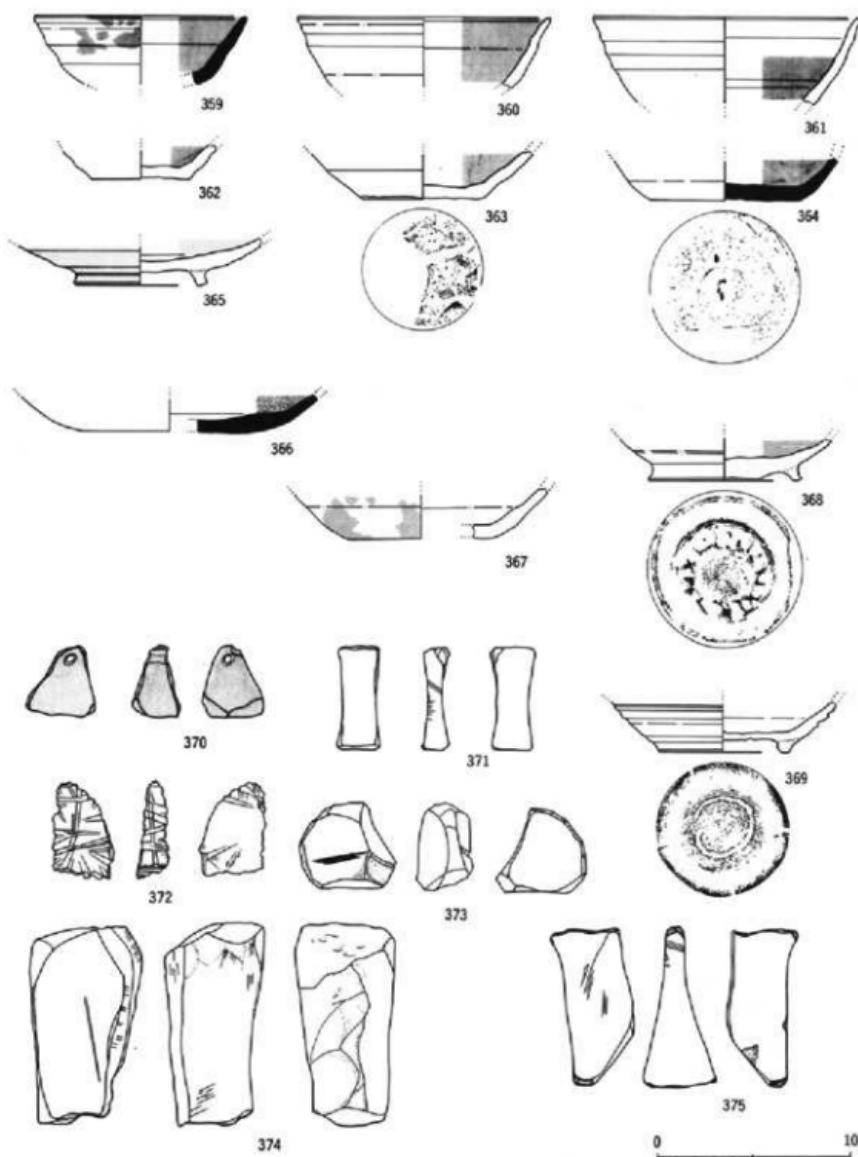
表-13 その他の遺物観察表（2）

部類	遺物 番号	器 種	寸法(高さ×幅×厚さ)		色 調	動 土	成 形	執 切	面 理	調 整 技 法	備 考	出土地點・層位
			高 さ	幅 さ								
表 面 凹 凸	354	土製品	瓦	長さ50・厚22~26	白灰色	緻密	良			凸面削り 凹面削り且	51~167	
	355			長さ380・厚28	灰色	緻密	*			凸面削り且	SD42	F <sub>1</sub>
	356	半焼製品	土 器	長さ35・径13	馬蹄色		*			全体的に削付着	119~96	II
	357			長さ29・径12	赤褐色		*				99~88	II
	358	铁製品	鍵	長さ140・刃厚0.44~ 重量25g							96~63	III
南 北 東 西	359	瓦窓器		(119)	白灰色	緻密	良				183~66	II
	360	赤土器		(130)	明褐色	粗砂混	*				185~63	II
	361	赤陶器	土 器	139	赤褐色	粗砂混	*			内面削付着	55~162	II
	362	土器		51	褐色	粗砂混	*	△	内面：ガモイ風色化	SK		
	363	赤土器		62	褐色	粗砂混	*	*		内面削付着	181~92	II
	364	瓦窓器	高台付坏	75	白灰色	緻密	*	*		内面削付着	183~59	II
	365	灰陶陶器		166	明褐色	緻密	*			面ナメ・内外面灰陶	112~94	II
	366	瓦窓器	三脚盤?	93	灰褐色	緻密	*	△	内面自然釉	183~61	II	

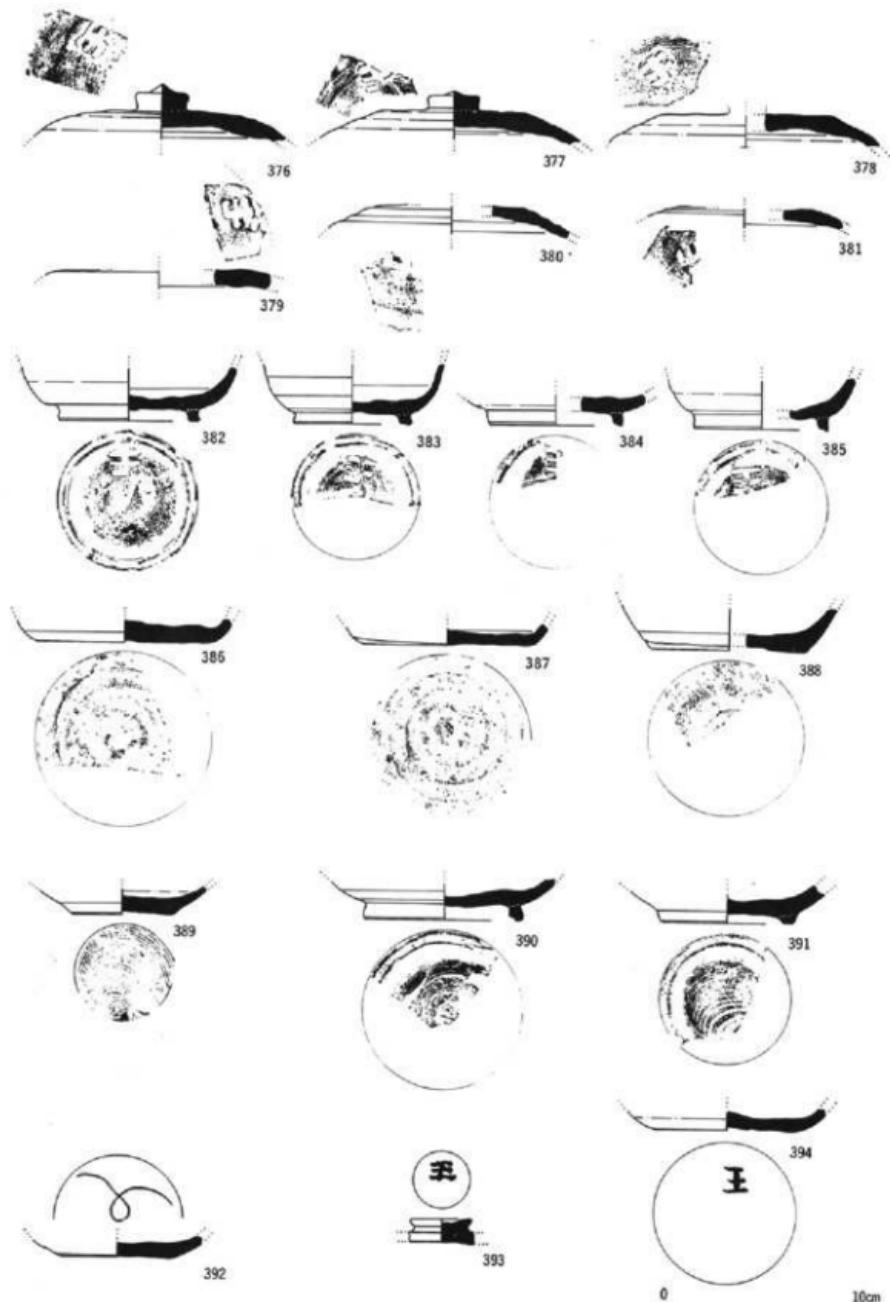


第40図 その他の遺物（1）

0 10cm



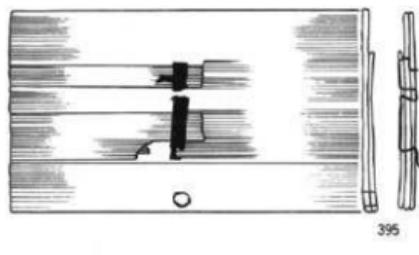
第41図 その他の遺物（2）



第42図 刻印・墨書き土器

表-14 その他の遺物観察表(3)

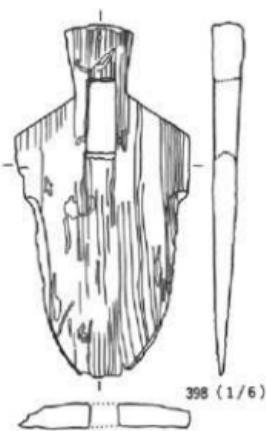
探査 部	遺物 番号	器 種	計測値(mm/mm)			色 調	胎 土	焼成 度	鉢 切 縁	調 整 法	備 考	出土地点・層位
			口 直 径	底 直 径	高 さ							
	367	赤燒土器	杯		(72)	明褐色	粗砂混	良	田 糸	外縁朱塗り	55-165	II
	368	両黒土器	高台付环		75	黑色	粗砂混	#	#	内外縁1/2を黒色化 へだてによる軽型底	111-96	II
第41号	369	赤燒土器			72	褐色	石英小颗粒 混	#	#	内外縁削り替 ヘラ彫き(○)	129-82	II
	370			長さ37・巾14-35・重量40g				#		全体的に鉛付着	36-165	II
	371			長さ53・巾17-22・重量24.4g				#			105-93	II
	372	石製品	砥石	長さ49・巾16-31				#			57-163	II
	373			長さ56・重量6.30g				#			47-159	II
	374			長さ108-034-57・重量320g				#			EBS34(SB59)	F <sub>1</sub>
	375			長さ84・巾9-26				#			103-92	
第42回	376					灰 色	粗砂混	#	へテ切	刻印	99-59	II
	377					暗 褐 色	石英砂混	#	#	刻印	60-165	II
	378					暗 褐 色	鐵 密	#		刻印	105-63	II
	379					明 褐 色	鐵 密	#	へテ切	刻印	57-160	II
	380					灰 色	鐵 密	#	#	刻印	49-155	II
	381					灰 色	鐵 密	#		刻印	48-163	II
	382		高台环	72		暗 褐 色	石英砂混	#	へテ切	底部刻印	102-65	II
	383			(58)		暗 褐 色	鐵 密	#	#	内外縁自刻印 底部刻印「子」	45-133	
	384			(77)		暗 褐 色	鐵 密	#	#	底部刻印		
	385	匣		(70)		灰 色	鐵 密	#	#	底部刻印「手」	47-163	II
	386			90		明 褐 色	粗砂混	#	#	底部鐵刻印「X」	57-166	II
	387			84		灰 色	鐵 密	#	#	底部鐵刻印「X」	101-58	II
	388			(80)		灰 色	粗砂混	#	#	底部鐵刻印「X」	102-61	II
	389			(32)		白 褐 色	鐵 密	#	田 糸	底部鐵刻印「X」	51-162	II
	390			(89)		灰 色	粗砂混	#	へテ切	底部鐵刻印	58-64	II
第43回	391		高台付环	(72)		暗 褐 色	粗砂混	#	田 糸	底部鐵刻印「X」	112-95	II
	392		环	55		鐵 密	鐵 密	#	#	底部へテ鉛「X」	146-61	II
	393		蓋			灰 色	鐵 密	#	へテ切	墨書「王」	105-59	III
	394		环	75		灰 色	鐵 密	#	#	底部墨書「王」	104-60	II
	395	木製品	曲物	長さ185・巾164・厚8							SK43	F <sub>1</sub>
	396		皿	98	90	11					SK43	F
	397		棒	長さ185・巾47・厚12								
第44回	398	木製品	棒	長さ344・巾181・丸28× 23								
	399	加工木	長さ383・直径210・上 幅12・下幅11								RW68	
	400	加工木	長さ425・巾123・厚23			先端を鋭く加工している。					SD63	Y
	401		長さ393・巾236・厚18			円形で2つの釘穴がある。					100-92	II
	402	下枝	長さ185・巾25-35・厚 16-25			左側で三つの穴が有し、1cm程度の瘤が残る。						
	403	著	長さ230・巾5			五角形に加工し、先端が丸みをおびている。					SD229	F <sub>1</sub>
	404		長さ232・巾6			五角形に加工し、先端が丸みをおびている。						
	405		長さ573・巾305・厚20								G地区	



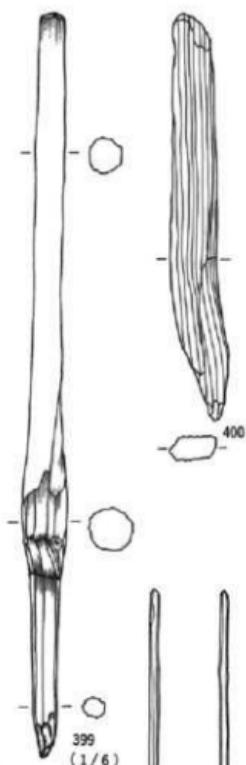
395



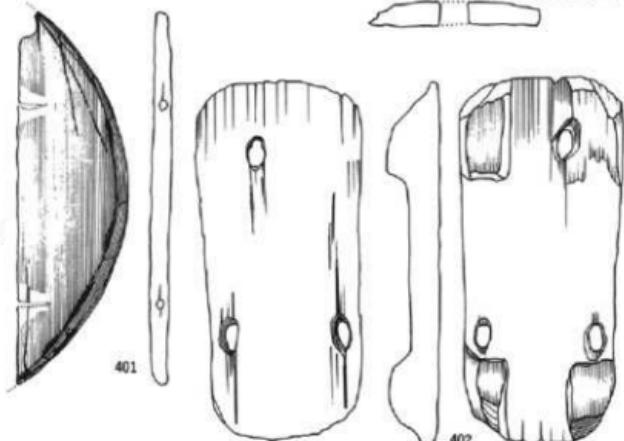
396



397



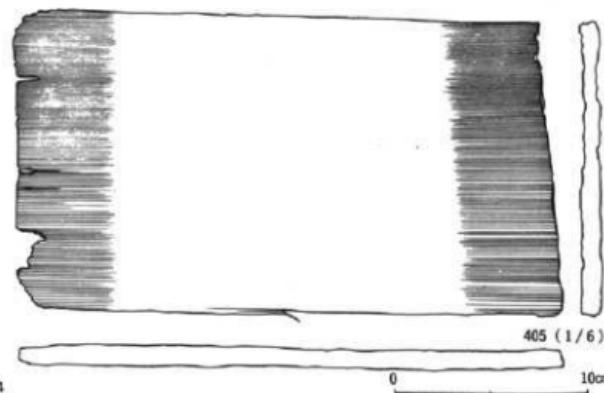
398 (1/6)



399  
(1/6)



400  
○



401 (1/6)

0 10cm

第43図 木製品

### III ま と め

#### 1 遺構の時期と変遷

今回の発掘調査によって検出された遺構には掘立柱建物跡6棟、井戸跡1基、土壙47基、溝状遺構99条、ピット、性格不明の遺構など数多く検出された。

本遺跡は総面積約45,000m<sup>2</sup>という広大な地域になる。調査前の試掘調査でも全域にわたり、遺構・遺物が検出されている。そのなかでも数多くの遺物が検出される地域に精査区域を設定したため、各精査区で検出された遺構の時期もわずかにちがう。また各精査区内の遺構もその内容や規模もちがい、時期的な隔りがあることを調査結果で得ている。建物跡はその検出区域からみて東区の3棟と、G区での1棟、E区での1棟、C区での1棟とに分けることができる。また出土遺物の検討結果から本遺跡の調査地区は9世紀後半から11世紀前半にかけて連綿と営なまれていたことが推測できる。建物跡はその他の遺構と密接なつながりをもつ。これらの遺構は、出土遺物や、埋土および遺構の重複関係から4つの時期に大別して遺構の変遷を考えてみたい。

第I期は平安時代9世紀後半頃の遺構で、E区のS B 6建物跡がこれにあたる。建物跡以外で明らかに本類にあたると推定出来る遺構ではA区のSK39・156土壙、G地区のSK43土壙、E地区の230土壙などの土壙類があげられる。溝状遺構では建物跡に付属する雨落ち溝としてのSD231・229溝状遺構は建物跡と同一の時期があてられ、本期に位置付けられよう。またこれら本期の遺構と重複関係にあるSD240溝状遺構や、SD331溝状遺構は、本期の遺構に切られていることが観察され、やや古い時期となる。

第II期は平安時代10世紀前半頃の遺構で、A区のSE10井戸跡やSB3建物跡がこれにあたる。井戸跡や建物跡の周辺には、SK36・152土壙等が本期の遺構として点在していることや、周辺に未調査区域を残していることから更に広がるものと考えられる。

第III期は平安時代10世紀後半頃の遺構で、A区のSB1・2建物跡やC区のSB7建物跡がこれにあたる。本遺跡で検出された遺構のなかでは本期のものが最も多く、その地域にも精査区として各地に広がっている。土壙ではSK74・77・C区のSK221、G区のSK261・262・287・291土壙が本期の遺構として把握できる。

第IV期は平安時代11世紀前半頃の遺構で、G区のSB5建物跡がこれにあたる。またこの建物を含む囲繞施設となるSD42大溝やSA41矢板列も本期となる。その他の遺構ではA区のSK75土壙や、G区のSK44土壙等も本類となる。

以上建物跡を中心に遺構の変遷をしたが、各区共に間断なく営なわれた集落といえる。

## 2 沼田遺跡周辺の官衙遺跡（第44図）

県教育委員会では、昭和49年以降これまで城輪柵跡周辺の酒田市東部から八幡町にかけての地域を、ほ場整備等の農林事業に関連して約20遺跡発掘調査を実施してきた。

平安時代の出羽国府と考えられる城輪柵跡の周辺には、これまでの発掘調査の成果や遺跡の分布状況等から一定の地割りの存在がうかがえ、その中に官衙・寺院や律令村落が計画的に配置されただろうことが予測される。概に東平田周辺の平安村落の地割りについて触れている（註1）が、本節では沼田遺跡周辺の官衙的な様相をもつ遺跡について基礎資料を提示し、一つの仮説を述べてみたい。

第44図は、城輪柵跡およびその東側地域について、これまでの調査で得られた官衙・寺院的な色彩の濃い遺跡の推定外郭線および中心となる建物等を1万分の1地図に記載したものである。外郭施設が明らかでない集落跡等のその他の遺跡については、発掘地区を黒塗りして記載している。なお調査がなされていない遺跡について、円でもってある程度の遺跡範囲を示すに止どまざるを得なかった。

つぎに城輪柵跡およびその東側地域の主要な遺跡について概況を述べる。

城輪柵跡は、酒田市街地の北東方約8kmにあり、行政上は大字城輪にその大半をおき、大字大豊田・同刈穂にもまたがる総面積約520,000m<sup>2</sup>の広大な遺跡である。遺跡の外郭は、ほぼ方形を呈するが、最も短い西辺で713m、最も長い東辺で739mとやや長さが異なる。城輪柵跡の時期は、調査者によって3期に分けられているが、最後の第III期の場合この外郭線に添って築地の土止めとも考えられる角材列が1列ないし3列に巡る。

遺跡の中心部に周囲の水田と1m前後の比高をもつ通称「オバタケ」と呼ばれる台地があり、その場所に120m方形の政庁域が確認されている。政庁域における主要な建物は、正殿・後殿・東西脇殿・付属建物などで、一本柱構列ないし築地で囲み、各辺のほぼ中央に門が開く。また南門の外に広場や道路があり、その東西にも建物が配置されている。とくに第II期の政庁域の配置は、細かな点は別にして、基本的には多賀城跡政府、近江国府政府などの遺構配置に類似している。このような遺構配置は、少なくとも国分寺などの寺院の伽藍配置とは異なり、また年代的には奈良時代まで遡り得ず「出羽柵」にはあたらない。これらのことから、城輪柵跡は調査担当者が言っているように、平安時代の出羽国府（註2）と考えてよいものと思われる。

城輪柵跡を出羽国府跡と考え、その始りを平安時代9世紀前半（城輪柵跡第I期）に想定した時、「日本三代実録」仁和3年（887）5月の条に出てくる記事が大きな意味をもってくることになる。仁和3年の記事によれば、当時出羽国府は出羽郡井口の地にあったことは明らかであり、年代的にも城輪柵跡はこの「井口国府」にあてることができる。

さらに仁和3年の5月条の後段の文章には、嘉祥3年(850)10月の出羽国大地震の影響を受けて、「井口国府」を最上郡に移転する問題を取りあげている。この国府を南に遷すことについて、朝廷は「便が悪い」として許さず、代りに現国府のある井口の近くの高敞の地を選び、しかも旧材を用いて早目に造るように命じている。また城輪柵跡のこれまでの調査によれば、I期(9世紀前半)とII期(10世紀後半)の間がやや長過ぎることも問題になる。これを解決すると考えられる遺跡が八幡町市条の台地上にある八森遺跡である。

遺跡の範囲は、東西約500m、南北100m程で、その東側から官衙的な遺構群が検出されている。礎石をもつ正殿風の建物(SB1)を中心として、その北側に後殿風の建物(SB2)を控え、南には八脚門(SB3)が開き、約90mを一辺とした方形にこれらを回る施設(SD7~9)が検出されている。東西と北の門跡は調査していないが、内部には東西の脇殿をもつスペースもある。これらは城輪柵跡の内郭より規模はやや小さいが、建物の配置や90m方形の区画施設など、よく似ている(註3)。

八森遺跡の遺構の時期は、建物の柱穴等を掘っていないため11世紀より古いということしかわからないが、90m四方の区画施設の西方からは9世紀代の遺構も認められており、仁和3年5月条の高敞の地に移転せよと命じられた国府の可能性がある。

城輪柵跡と八森遺跡に次いで、沼田遺跡周辺でもう一つ重要な遺跡が堂の前遺跡である。堂の前遺跡は、城輪柵跡と八森遺跡のほぼ中間にあり、以前から水田下に柱や斗などの建築部材が埋っていることで注目されていた遺跡である。昭和49年から54年までの8次に亘る発掘調査で、一辺約240mの方形の外郭線が想定されるに至り、その内部には重層塔などの存在も考えられる方形の基壇建物(SB003)や礎石建物(SB270)、八脚門(SB250・265)などが検出されている(註4)。平安時代の礎石建物跡が検出されているのは、飽海地方では城輪柵跡と八森遺跡および堂の前遺跡の三ヶ所だけである。

堂の前遺跡の遺構の時期は、平安時代のかなり長い期間に及び、また建物跡の配置関係も明らかではないが、南門や中門と思われるものが検出されており、塔の存在も予測されることから出羽国府に関連する寺院跡、それも出羽国府と擬定される城輪柵跡のすぐ近くにある大規模な寺院ということで国分僧寺の可能性が考えられる。本遺跡については、その重要性に比べて、今まで伽藍配置などの分析がなお去りにされてきた嫌いがあり、今後さらに検討を加えてゆく必要がある。

沼田遺跡周辺には、この他にも大溝や布掘り地業としての矢板列などの区画施設の一部が検出されているものとして、酒田市上ノ田遺跡(註5)と八幡町後田遺跡(註6)がある。上ノ田遺跡の場合は東西の大溝間の距離が外々で105mを測り、約1町四方による区画を想定させる。後田遺跡では西辺に77m以上の矢板列が検出されている。

つぎに、これらの遺跡の南北軸線の方位についてみてみる。城輪柵跡の外郭線は各辺によって若干の違いがあるにしても、南北軸線はほぼ真北方向を指す。これに対し八森遺跡の外郭線は真北に対し14度30分西に振れ、堂の前遺跡の推定外郭線の方位は真北に対し約10度西に振れる。また同様に後田遺跡のS A 204板列も真北に対し12度、上ノ田遺跡のS D 401大溝も真北に対し7度西に振れている。

このことは城輪柵跡の東半部にあたる各遺跡の掘立柱建物跡の南北軸についても同じ傾向がみられ、城輪柵跡の西半分にあたる各遺跡の掘立柱建物跡の南北軸が真北に対し逆に東に傾くものが多いことは極立った対照を示す(註7)。勿論平安時代の各時期によって建物跡等の軸線が変化するという把握もできるが、城輪柵跡の東半部と西半部では大きな傾向として向きが違う。言い方を換えれば外郭施設や建物跡が城輪柵跡に向って傾くことは、全体として確実に指摘できる。

最後に城輪柵跡周辺の地割りについて一つの仮説を述べる。まず城輪柵跡の政庁の東西門を結ぶ線をさらに東に延長させると、堂の前遺跡のすぐ北を通り、八森遺跡の南門に至る。この線上には元慶元年(887)を創建と伝える八幡町一条八幡宮があり、市条部落の東西道路もこれにほぼ一致する。一条という名称は、都城における一番北寄りの東西基準線の呼び方に共通し、城輪柵跡の政庁から西に延びる線上にも豊原遺跡や庭田遺跡が並んでいることを加味すると、これを一つの東西基準線とも考えることが可能である。また第44図の沼田遺跡周辺の平安時代遺跡分布にもみられるように、八幡町大島田から酒田市閑を通り大槻新田に至る南北の線上にも、沼田遺跡を初め俵田遺跡・境興野遺跡・北田遺跡・閑B遺跡などが並ぶ。さらに出羽丘陵の西山麓添いには一定の間隔をもって神社が分布し、北平沢付近には「大道東」という地名も残っていることから、一番東側の道とも考えることができる。私共は現在水田遺構や沼田遺跡にみられたような畠の畝様の溝状遺構を地図にプロットする作業を継続中であり、最終的には条里遺構も含めた地割りを復元したいと思っている。

註1 野尻 侃他 「閑B遺跡第2次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第68集 1983年

註2 柏倉亮吉・小野 泰 「城輪柵跡の内郭と性格について」 山形県民俗歴史論集2 1978年 城輪柵跡に関する記述と八森遺跡の一部に関する記述は大部分がこの論稿に依拠している。

註3 佐藤清宏 「八森遺跡第1次・第2次発掘調査報告」 八幡町教育委員会 1978年

註4 尾形與典他 「堂の前遺跡昭和53・54年度調査報告」 山形県埋蔵文化財調査報告書第30集 1980年

註5 佐藤庄一他 「農林・土木事業関係遺跡(2)発掘調査報告書 上ノ田遺跡」 山形県埋蔵文化財調査報告書第52集 1982年

註6 佐藤庄一他 「農林事業関係遺跡(2)発掘調査報告書 後田遺跡」 山形県埋蔵文化財調査報告書第64集 1983年

註7 野尻 侃他 「竪田遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第65集 1983年

# 図 版



遺跡遠景



遺跡遠景



遺跡近景



遺跡近景



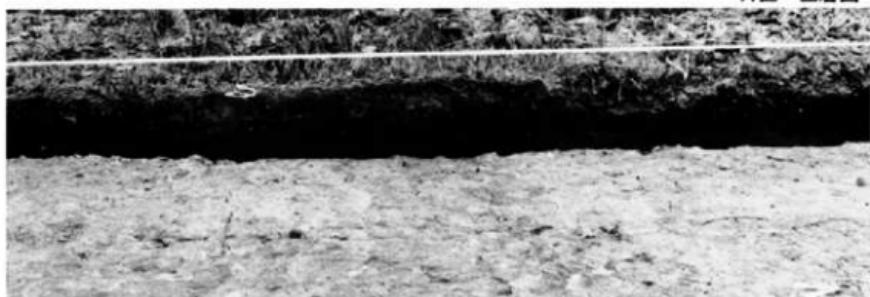
A'区発掘風景



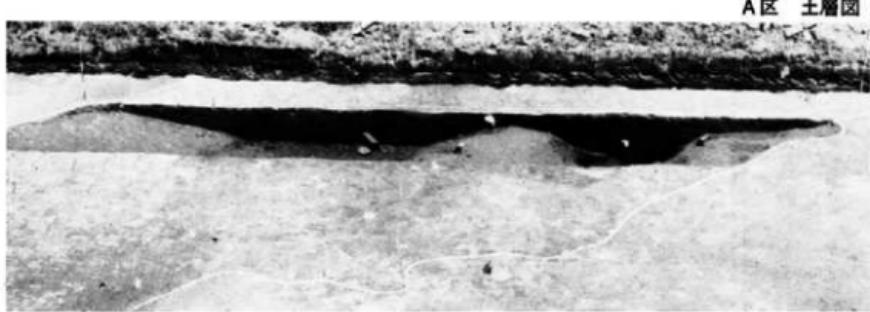
E 区発掘風景



A区 土層図



A区 土層図



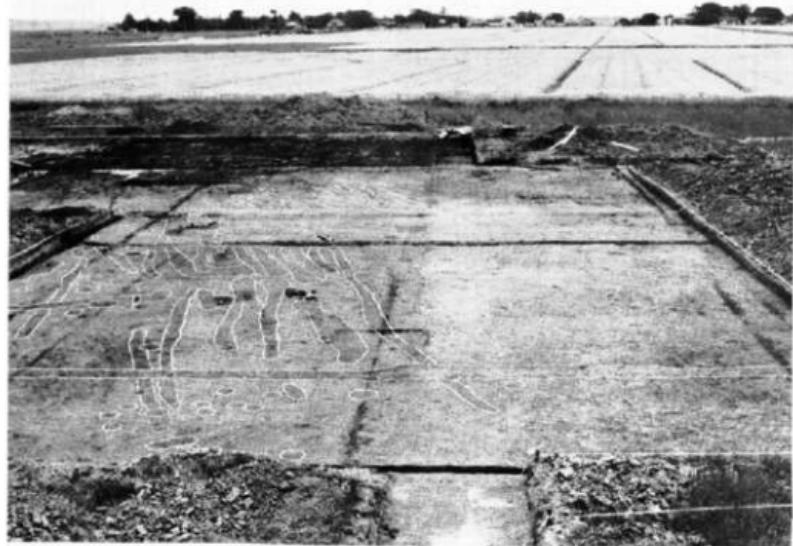
G区 土層図



A' 土層図



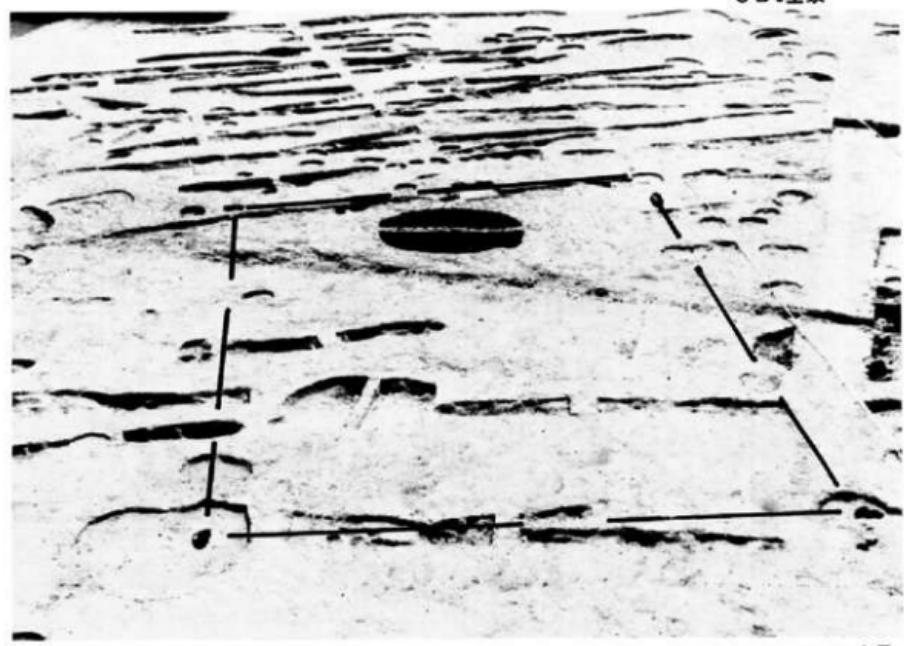
A区全景



A区北半近景



S B 1 全景



S B 2 全景



SB3全景



E B 120柱穴



E B 128柱穴

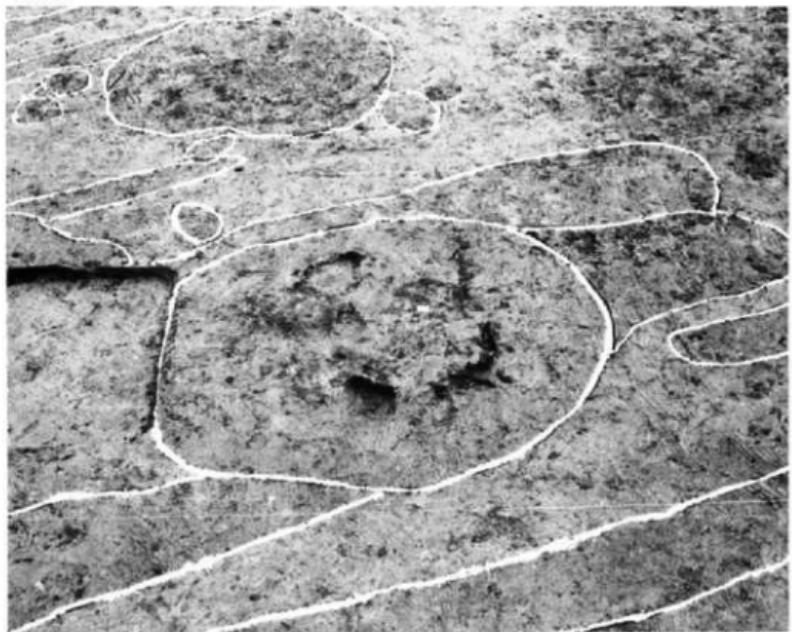


E B 190柱穴



E B 191柱穴

図版 8



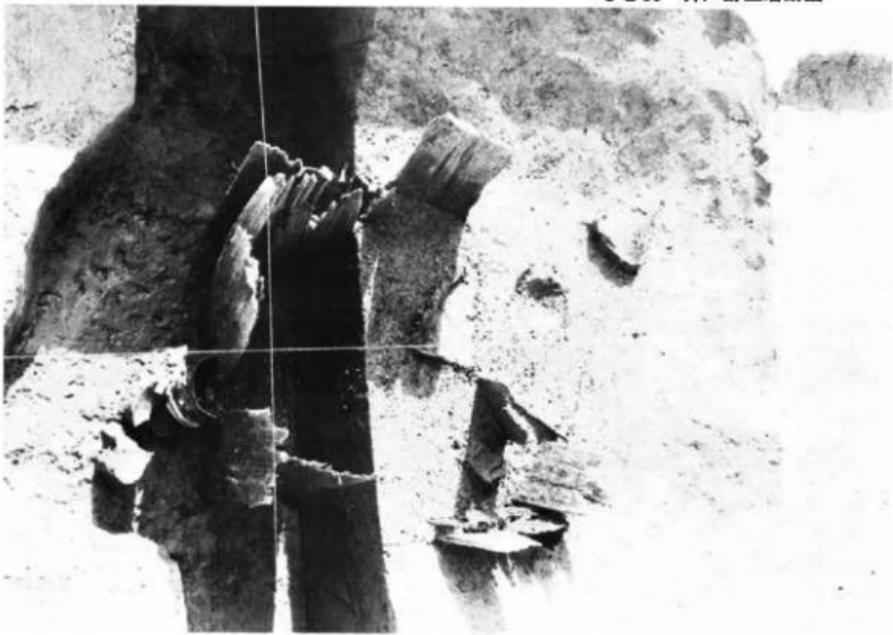
SE 10 井戸跡



SE 10 挖り下げ状況



S E 10 井戸跡土層断面



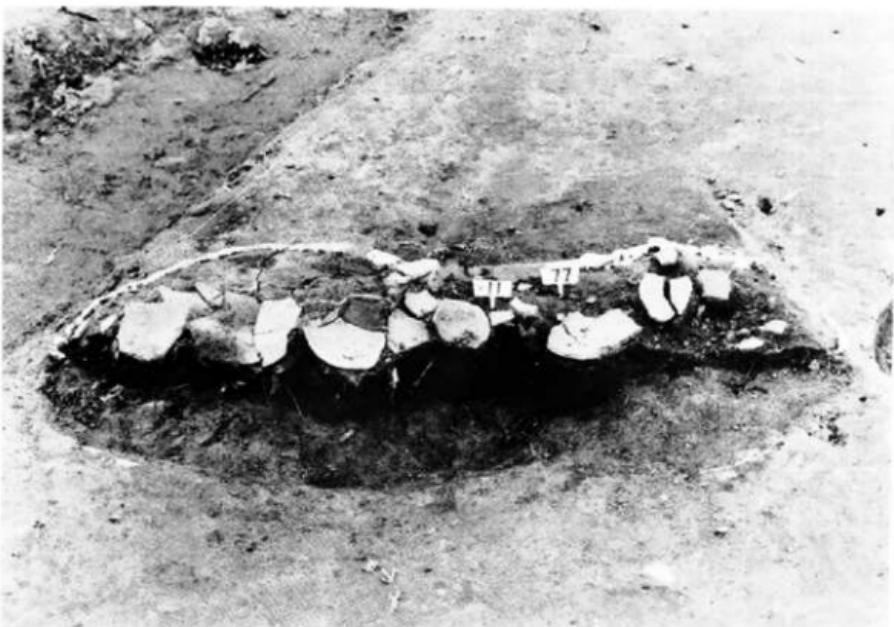
S E 10 挖り下げ状況



SK 74土壤



SK 152土壤



S K 77土壤



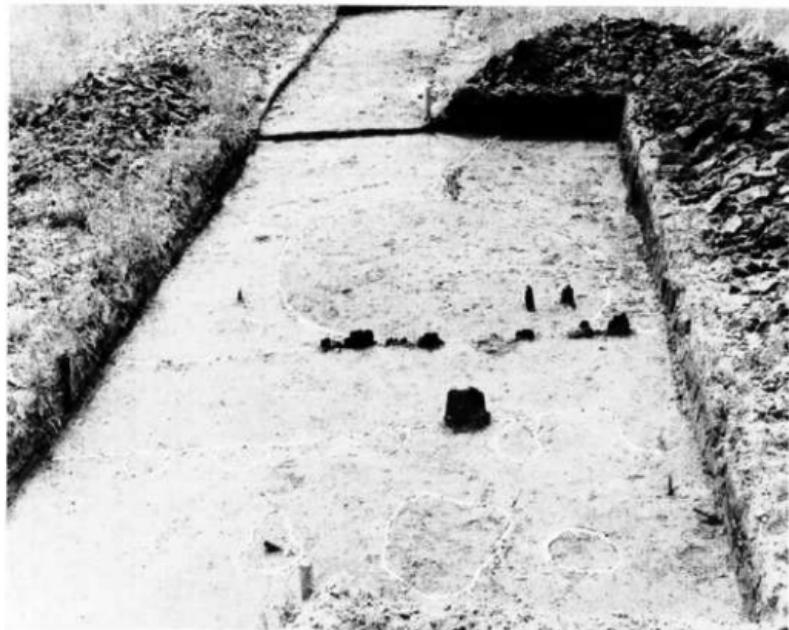
S K 39土壤



A区北半溝状遺構（北から）



A区南半溝状遺構（東から）



A'区矢板列検出状況



A'区遺構完掘状況



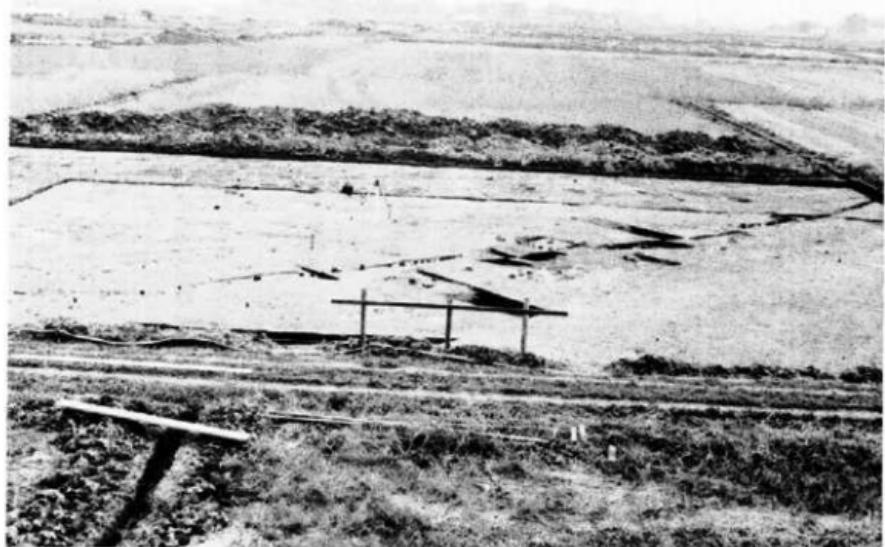
S D 70溝状遺構矢板列



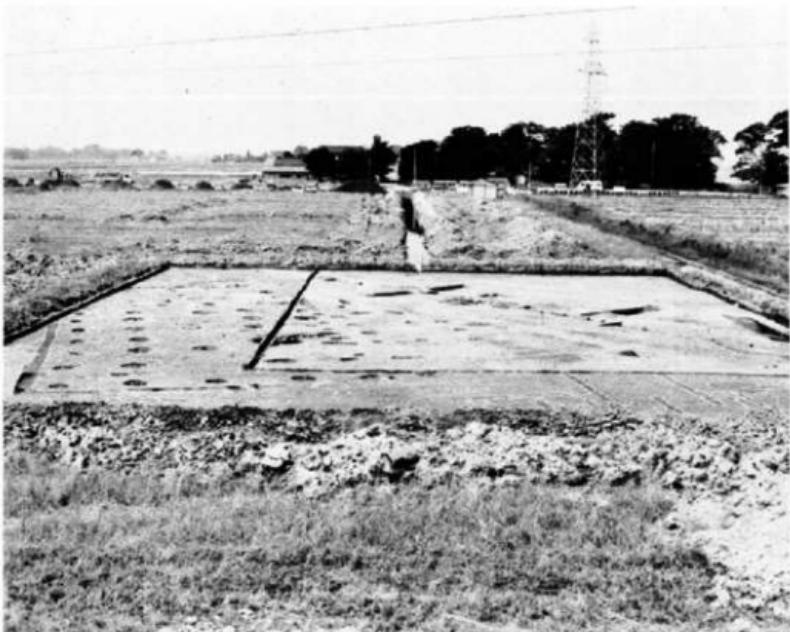
S X 59遺構木製物出土状况



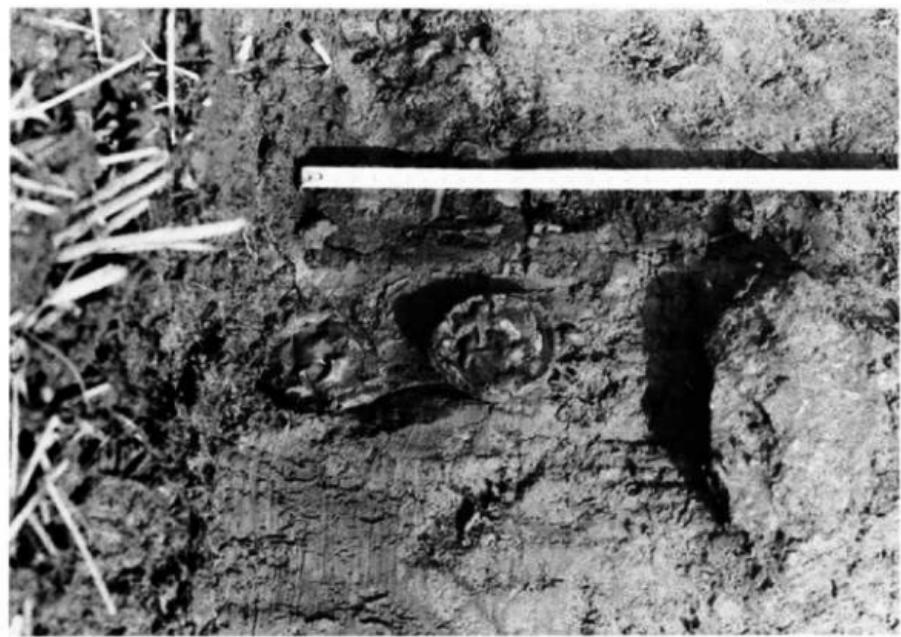
G区遺構検出状況



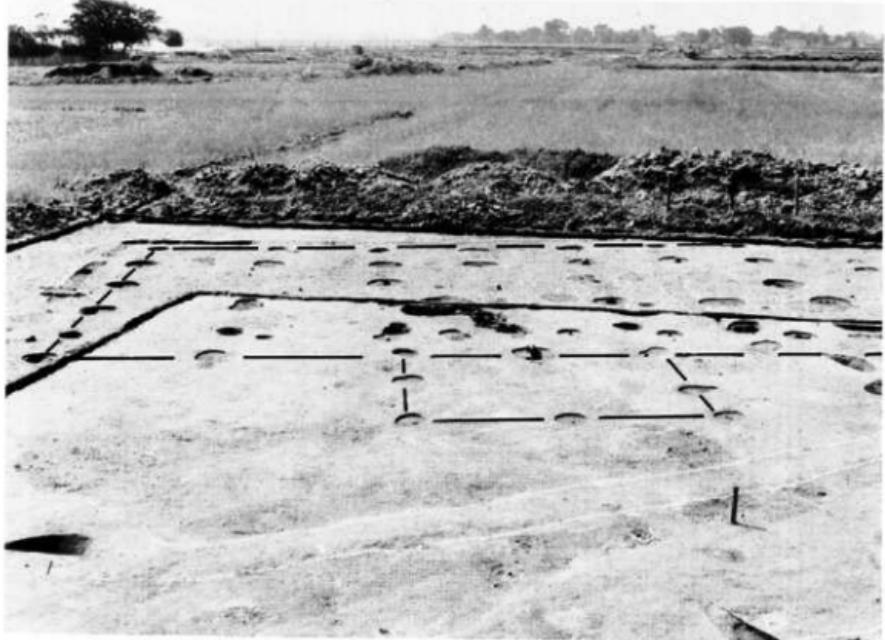
G区遺構検出状況



G区全景



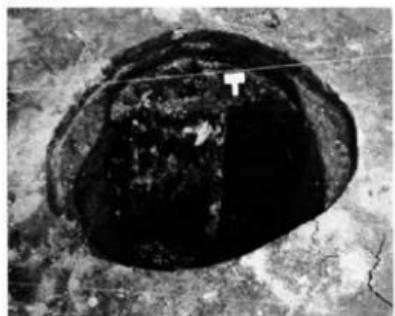
漆紙出土状況



S B5全景



S B5西半部



E B 247



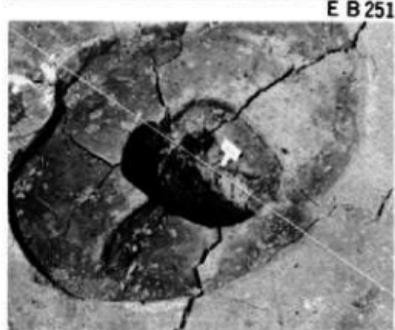
E B 248



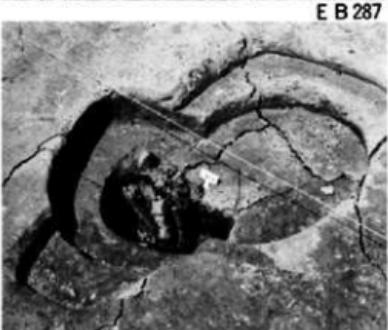
E B 251



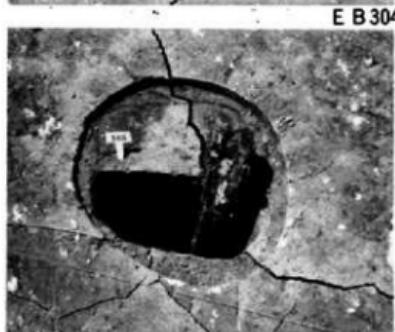
E B 287



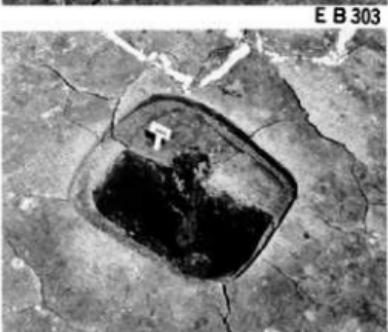
E B 304



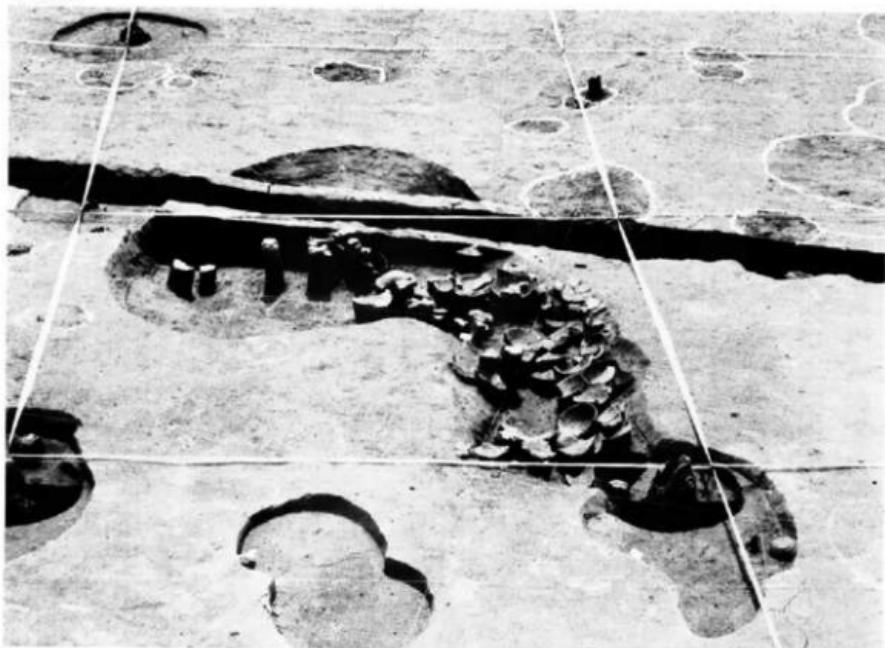
E B 303



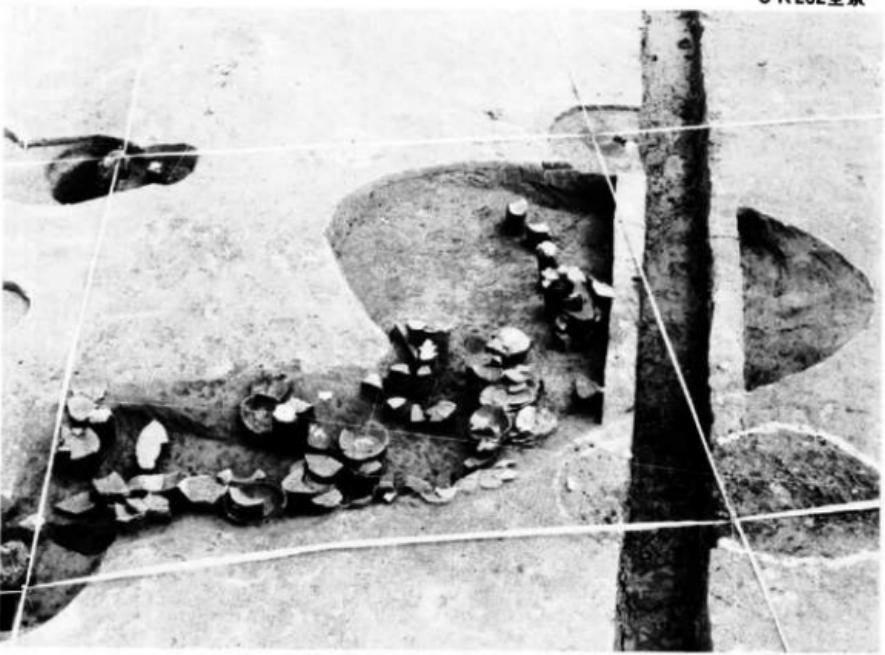
E B 365



E B 366

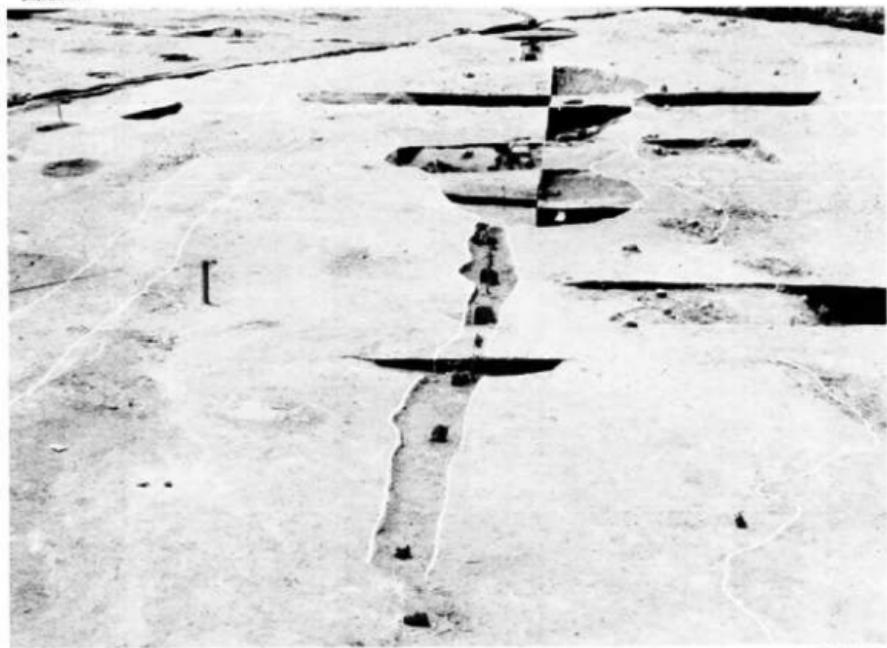


SK 262全景



SK 262土器出土狀況

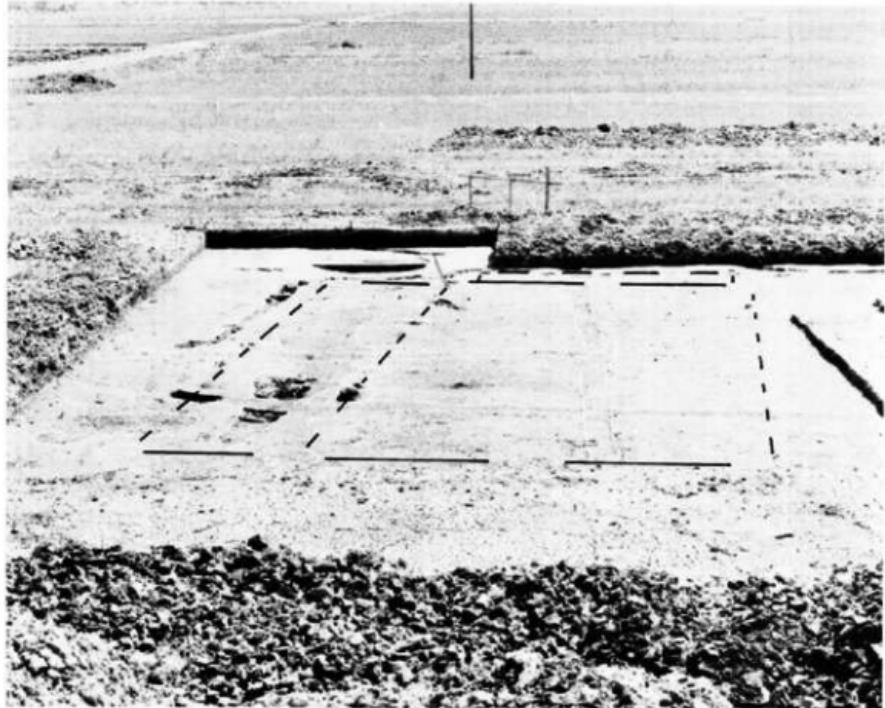
図版20



S A 41 検出状況



S A 41追求区



S B 6全景



E B 336



E B 354



S D 229遺物出土状況



S D 229遺物出土状況



SD 331遺物出土狀況



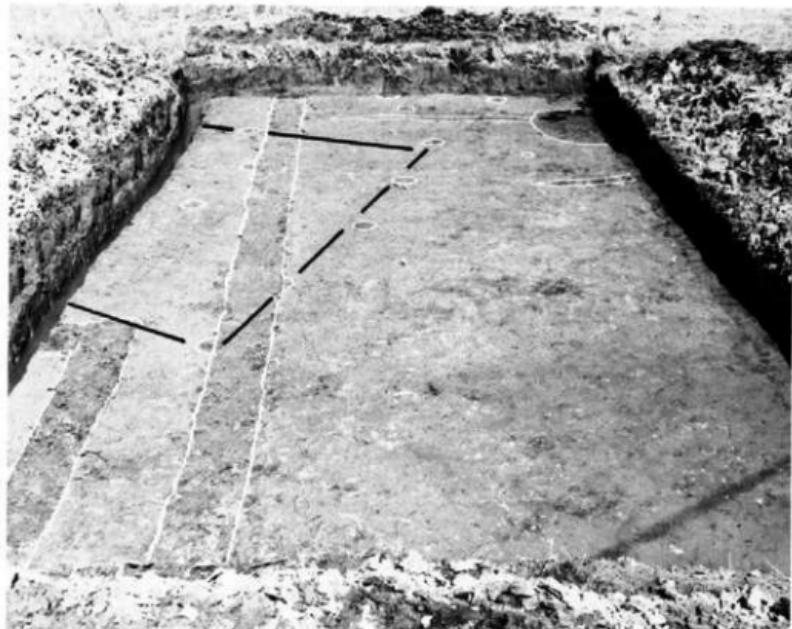
鐵斧出土狀況



S K 230土壤檢出狀況



S K 230土壤双耳坏出土状况



C区 S B 7建物跡



C区 S K 221土壤土器出土状況



B区トレンチ全景



F区トレンチ全景



S D 62～64溝状遺構



S G 61近景

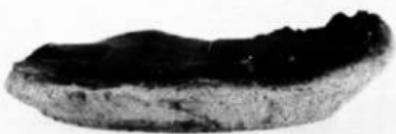


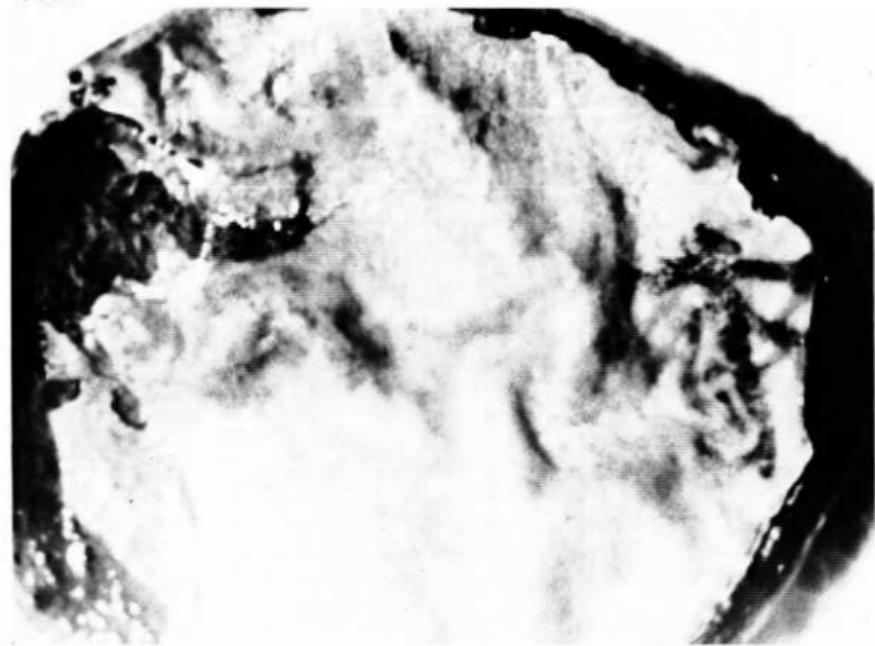
S A 41近景



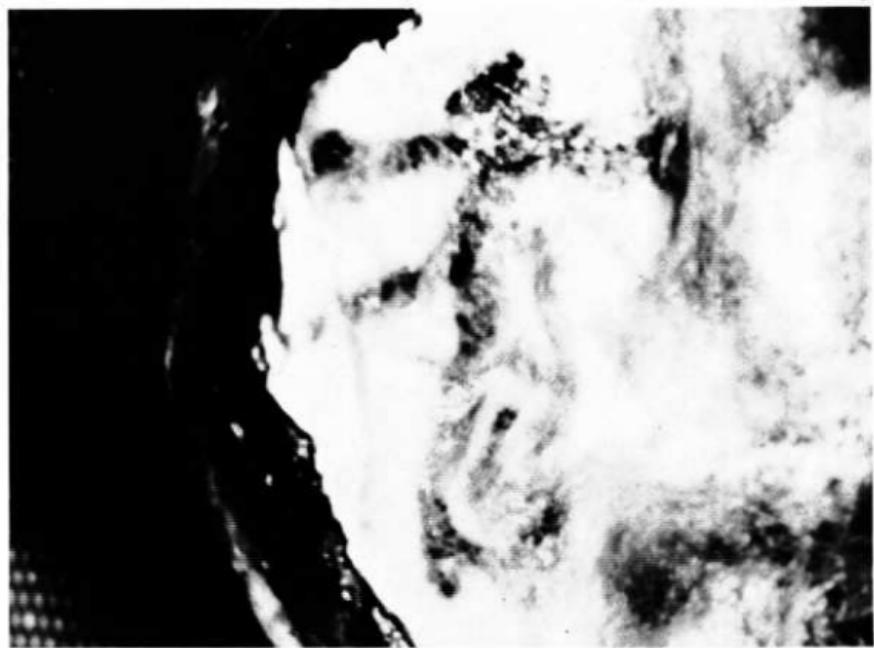
S D 70遗物出土状况

図版29 漆紙付着土器（原寸大）



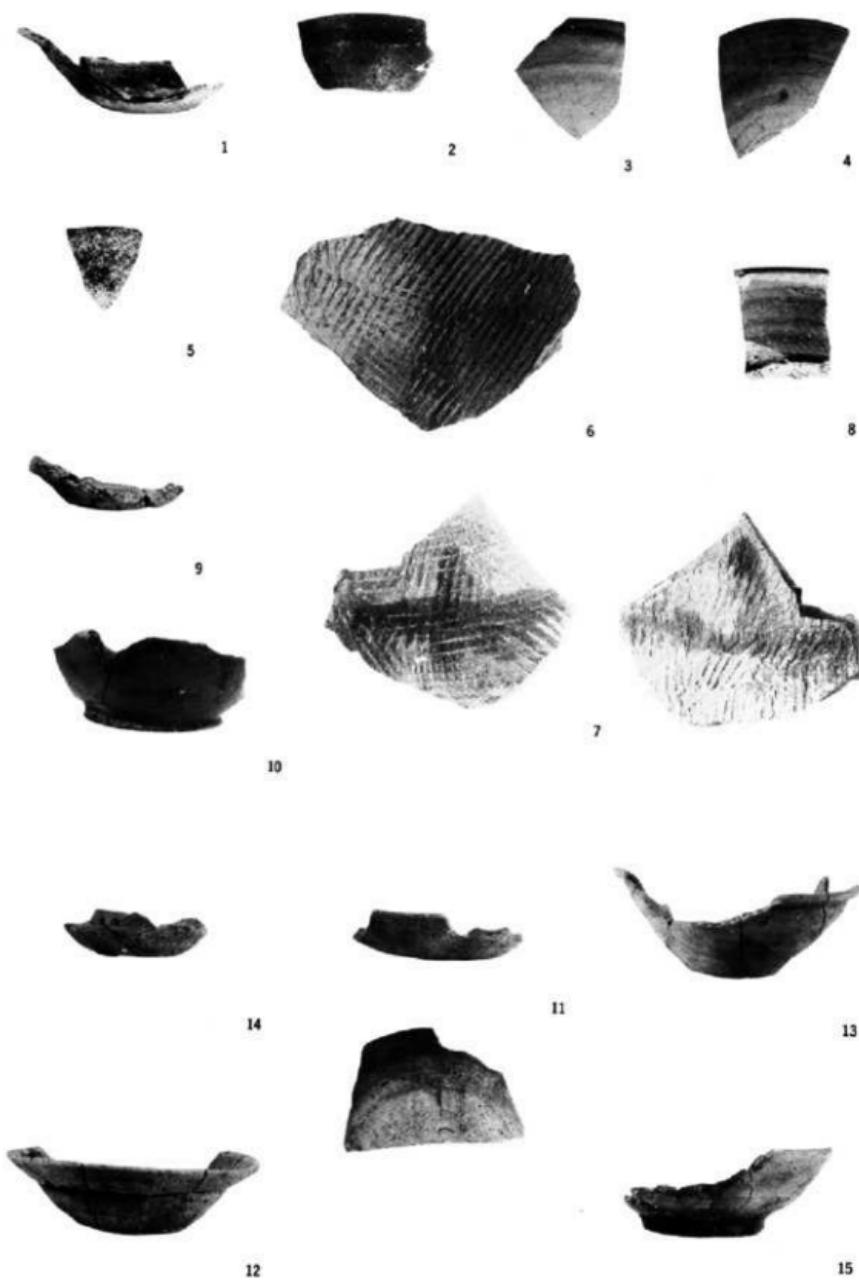


漆紙文書赤外線テレビ写真



同　返転　文字「有」(東北歴史資料館撮影)

図版31 建物跡出土遺物（1）



図版32 建物跡出土遺物（2）



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



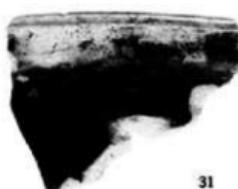
27



28



29



30

図版33 建物跡出土遺物（3） 井戸跡出土遺物（1）



32



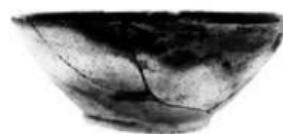
33



34



35



36



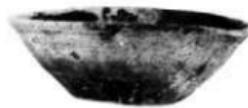
37



41



39



40



41



42



43

図版34 井戸跡出土遺物（2）曲物



図版35 土壤出土遺物（1）



49



50



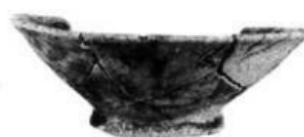
51



52



53



54



55



56



57



|



51



60



|



63

59

62

図版36 土壌出土遺物（2）



64



65



66



67



68



69



70



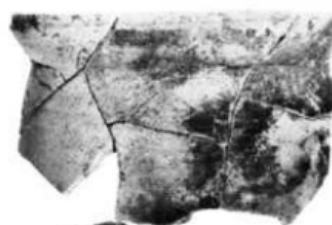
71



72



73



74



76

図版53 包含層出土墨書土器 (3)



310



311



312



313



314



315



316



317



318



319



320



321



322



323



324

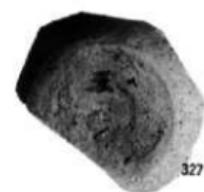
図版54 包含層出土墨書き器 (4)



325



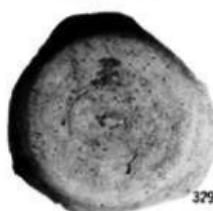
326



327



328



329



330



331



332



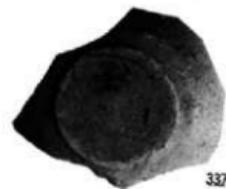
333



334



335



337



336



338



339



340

図版55 その他の遺物（1）



341



342



343



344



345



346



347



348



349



350



351



353



354



355



356



357

図版56 その他の遺物（2）



355



358



359



360



361



363

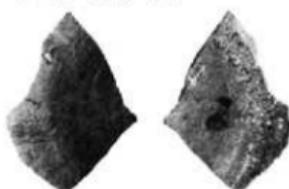


364



365

図版57 その他の遺物（3）



366



367



368



369



370



371



372



373



374



375

図版58 刻印・墨書土器



376



377



378



379



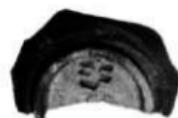
380



381



382



383



384



385



386



387



388



389



390



391



392



393



394



397



(1/6)



(1/6)

399



402



403

404

(1/6)

405

山形県埋蔵文化財調査報告書第78集

ぬま だ  
沼 田 遺 跡

発掘調査報告書

印刷 昭和59年3月25日

発行 昭和59年3月31日

発行 山形県教育委員会

印刷 株 大 風 印 刷